弦

第109号



弦

第109号



「弦」　第一〇九号

目　次

（表紙・扉絵）　岡部寛治
（挿絵）　若林雅美

小説
海に向かって叫ぶ（四十八枚）……長沼宏之……4
むらさき桜（六十六枚）……市川しのぶ……27
関帝廟（二十五枚）……白井康……58
茶聖・千利休自裁のなぞ（二十一枚）……久野治……70
茶聖・千利休追慕十首……久野治……80
エッセイ
空港にて㈠@スキポール（七枚）……富岡秀雄……81
未完成を読む（五枚）……髙見直宏……84
詩
えんえん汽車に乗る……加納仲……86
わが家の本棚……加納仲……88

目　　次

エッセイ

スーチーさんの国のガイド（九枚）……加納　仲　89
どうしてこんな国に（十一枚）……有馬冨美子　93
きょうだい旅行（五十五枚）……国方　学　98

小説

冬の叢（五）（四十四枚）……杉山千里　124
花壇（二十五枚）……山田實　146
夕顔咲く（五十一枚）……木戸順子　158

評論

同人雑誌の周辺（十枚）……中村賢三　182
【表紙のことば】コロナ禍の春……岡部寛治　145

受贈誌……186・187
あとがき……189
合評会案内……190
本号の執筆者……188



海に向かって叫ぶ

長沼　宏之

1

淳一は隆志・尚子夫婦の二人目の子どもとして生まれた。一人目は女の子で、六歳離れていた。

隆志の父は開業医だった。二人の兄と弟も医者で、伯父、伯母をはじめ、親戚にも医者が多い。おまけに妻の父親も医者だった。隆志は子どものころから当然のように医者になることを期待され、自身もそうなることを望み、成績もよかった。だが、幼いころから蒲(ほ)

柳の質で、何かというと熱を出した。厳しい受験戦争を勝ち抜いて、激務の医者になることは早々にあきらめざるを得なかった。一族に医者が多いといっても私大出ばかりだ。自分ががんばって国公立の医学部に入って兄弟も妻の実家をも見返したいと思っていたが、願いは早々と泡のごとく消えた。彼にとってのバブル崩壊だった。

文系学部を卒業して市の公務員となって、働きぶりはかなり高い評価を得ていた。物腰は柔らかく、外部の評判も悪くなかった。だが内心では、気苦労の多い割に報われるところが少ない仕事にずっと物足りなさを感じていた。公務員は身分は安定していても、決して気楽な稼業などではないのだ。

結婚して八年目に男の子が生まれ、淳一と名づけた。あきらめかけた時期に出来た一人息子を両親は溺愛して行くのを見て、隆志の心に希望のあかりが灯った。健康に育つた。自分が医師に進めなかったというコンプレックスから息子に医者になるという目標を課したものと思われても仕方がない。だが、隆志には無理強いしたという意識はなかった。「医師になれ」とあからさまに言ったことはない。だが、淳一は、親戚の状況や、おりふしに語られる両親の会話から自然の内に自分に対する要請を理解していた。

こんなことがあった。まだ小学校に入ったばかりの頃、一家で東京の「キッザニア」という施設を訪ねたことがあった。そこでは本格的な設備や道具を使って、子どもたちが大人のようにいろいろな仕事やサービスを体験することができる。病院のパビリオンでは医師、看護師、薬剤師、救急救命士の内の一つを選ぶ。淳一は外科手術室での手術を選んだ。青い手術着を着て、指導員の話を聞き、まねごとをする淳一の目は輝いて

いた。隆志は妻と共にその光景を眺めていた。あのとき、一家はしあわせだった。

小学校時代は淳一は塾でもトップを争う成績だった。常に同級生たちに君臨して、それを当然のことと思っていた。公立の中高一貫の中等学校に楽々と合格したが、少しずつ成績が下がって行った。塾では模擬試験の成績によってAからDまでの四つにランクを分けてクラス分けされていたが、ずっとAにいた淳一は三年生の夏休み前にBに移動した。隆志は、すぐにAに復帰するだろうと思っていたが、夏休みの間、Bの中でじりじりと下がり、A復帰は遠のいていった。そして夏休み明けには塾をやめてしまった。学校は二学期が始まったが、目に見えて勉強意欲を無くして行った。毎朝、起きづらくなり、遅刻が多くなった。

学校に行きたくない気持ちは隆志に分かる気がした。いわゆる夏休み明け症候群だ。不登校になるのは夏休み明けが最も多いという。夏休みには人を憂鬱にさせる魔力がある。生活のペースが変わり、普段は疑わずに勉強にうちこんできたが、立ち止まって人生について考える時間は十分に与えられる。中学生には早過ぎる思考だということはない。ふと胸の中に芽生えた疑問が膨らんで行く。一方で成績が下がっているという事実に直面しているが、これまでのように勉強に身が入らないことから焦りが生じる。誇り高かった自尊心を傷つけられ、それでも夏休みは一時的なモラトリアムで、現実からいっとき逃れられた。その間に気持ちが逃げてしまったのか。

しかし、成績が下がった本当の原因が何かは隆志にはわからなかった。淳一自身にも分からないのではないか。

淳一の性格を考えてみた。集団の中では積極性に欠けるところがあり、競争心は強くない。それと、どちらかといえば不器用で、勉強のやり方を学年が進むにつれて変えてみるといったことが苦手のようだった。それやこれやで自己撞着に陥っているのではないか。そんなふうに推測した。

いろいろと対策を考えた末に一つの結論にたどり着いた。

自分が教えるというのはどうだ。仕事の方はたまた ま閑職に就いていた。帰宅は早い。時間は十分ある。

隆志は教えることには自信があった。もう昔のことになるが、成績の振るわない小学生の二人の甥を夏休みに預って、苦手科目を集中的に教えて、二学期にぐんと成績が伸びたことがあった。今度は相手は淳一たった一人だ。マンツーマンでの指導だから、時間に関係なく納得いくまで教えられる。塾では、親が教えることは問題が多い、とかねてから公言していた。まあ、立場上そう言わざるを得ないだろう、牽制球だな、と隆志は無視した。

始めてみると、最初の内は目に見えて効率は上がった。だが、次第にこうしても感情的になる。他人の子 教える方の親はどうことも、自分の子どもには言って に対しては言えないしまう。教えるのに一番大切なことは忍耐と褒めるこ とだと分かっていても、つい短気になる。

一方、淳一の立場から言えば、一対一では片時も気が抜けない。疲れる。緊張感を維持するのは難しい。まして相手が親では。淳一にとっては苦痛が増していることが手に取るようにわかる。息子は次第にそっぽを向くようになり嫌悪を表情にあらわすようになった。淳一は勉強自体に嫌気がさしたようで、学校の授業すら投げやりになったように見えた。妻が「やりすぎじゃないの」と心配するようになった。

二人は行き詰まった。今さら元の塾には帰れない。隆志は否応なく立ち止まって現状を見直してみた。淳一がやる気をなくしたのはがんばっても成績は上がらないことから来る負のスパイラルに陥っているのだと思っていたが、もっと根源的なところにあるのかもしれない。なにしろ年齢的には反抗期にある中学生だ。

一方で、親から勉強を強いられた息子が、反抗的になり、家庭内暴力に及ぶという事件が続発し、新聞の社会面や、教育面をにぎわせた。

この報道は隆志の妻を強い恐怖に陥れた。我が家でこのままの状況が続けば、とんでもない事件が起こるのではないかと心配しだした。

隆志は淳一に教えることはあきらめた。

3

父親の圧政から逃れても、学校の成績は上がらなかった。一貫校なので高校には進級できたが、二学期初めの学力テストを受けて、結果が出たところで、学校に行かなくなった。

「絵を習いたい。将来は画家の道に進みたい」と言いだした。そういえば、幼いころから絵を描くのが好きだった。紙とクレヨンさえあればいつでも絵を描いている。動物だけではなく、なんでも描いた。小学校時代はなんども市内の小学校のコンクールに入選し、金賞を取ったこともある。不思議だった。両親には絵心はなかった。しかし、こういう才能は突然変異的に現れることがある。不登校から立ち直るきっかけになれば、と、好きにさせた。画塾に通い始めたが、わずか一か月で挫折した。自分に特別な絵描きの才能などないことはすぐに分かったのだ。

淳一は自分の部屋に閉じこもり、外に出なくなった。ひきこもりが始まった。高校一年の秋だった。

たまに部屋から出て、父と顔を合わすと目をそむけるか、憎しみのこもった目でにらむようになった。

昼夜逆転とまでは行っていない。眠くなるまで起きていて、目が覚めるまで寝ていて、おなかが空けば食べる。それでも深夜二時ごろには就寝しているようだ。ドアから漏れている明かりが消えるので、かろうじてわかる。そして昼前には起きてくる。食事はいつも母がつくって冷蔵庫に入れて置き，淳一が好きな時に取り出して食べる。父の隆志とは会話がない。必要最小限のことは母を仲介して話す。他人と関わるのが怖くなっているのか、家族以外とは会話をしない。シャ

ワーは週に2回、夜中に入っている。
想像だが、部屋ではスマホでゲームにどっぷりと漬かっている。そうでなければテレビを見ている。
窓にはテープを貼りで、中の様子はわからない。淳一は部屋にこもってどうしているのか。隆志は想像してみる。

――それは奇妙な心の安定を得た静謐な生活かもしれない。心の中に忍び込んだ静けさを彼はもはや壊すことが出来なくなっているのではないか。一日中ゲームをやれるわけがない。もう大概飽きているころだろう。そんなときはベッドに横たわったままで国語の教科書を開いて詩を読む。しかし、生じてくる静けさは必ずしも安定しているとは言い難く、言葉が頭に入ってこないこともある。そんな時には眠りにつくまでの二時間でも三時間でも彼は精神を集中して静けさを壊すまいとする。もっと悪いことになにが起こったのか、親にも友人たちにもさっぱり理解できないということ、そして恐らく彼自身にも説明がつかないということだ――

そんな生活でも、全く外出しないというのではなかった。ゲームを買いに出かけるというのが理由だったが、実際には、昼間に家にいるということに罪悪感を感じていて、少しでも外出しないと罪の意識にまけてしまいそうだからではないか、と隆志は思っている。ただ、外で誰かに会うのが嫌だったのか、帽子をかぶり、メガネをかけて、だれとも目を合わさない為に、ずっと下を向いて歩いていた。

2

隆志は淳一の心がかたくなに凝り固まってしまったように見え、なんとか柔らかさを取り戻させたいと思って、閉ざされた心を開かせる手段を思案していたが、思いつかなかった。

鬱屈を抱えている中での休日、気晴らしの散歩の途中、神社の参道に出ていた秋の植木市でグミの実を見たときに、隆志は急に感じた。それは思いがけない喜びが突き上げてくるように思った。そうしてまた、すぐに悲しみに似た感情が不意に襲ってくるようなことだった。

植木市はすでに盛りを過ぎていたが、そのグミの木をすぐに買おうと思った。

隆志は以前からグミを欲しいと思っていた。子どもの頃、隣家の裏庭に大きな夏グミの木があって、初夏の頃、枝にたわわに赤い楕円形の実が生った。隣家の住人は年寄り夫婦で、広い裏庭に姿を現すことは皆無だった。小学生の隆志は板塀を乗り越えて侵入し、グミの実を採っては口に入れ、種をふっと吹き出した。甘かった。ズボンのポケットに入るだけ入れた。わずか数十秒の間の冒険だった。だから余計に美味だった。大人になってもどこかで赤いグミの実を見つけると、口に入れたときの風味を思い出し、心臓が高鳴った。

隆志は、淳一が学校の行き帰りに自然に親しみ、食べられる実が生っているのを見て心を躍らせるような少年に育って欲しいと思っていた。庭に植えて息子の淳一に見せたいと思ったが、庭木にはどうかとためらっているうちに淳一は高校生になってしまった。心ならずも不登校から引きこもりになってしまったが、その淳一にグミの実を見せたいと思った。赤い実を見てどういう反応を示すだろう。手を伸ばして一つもぎ取って口に入れるだろうか。意外な味に驚く顔が見たかった。それから淳一は三つ、四つもぎ取って、隆志の子どものころと同じようにポケットに入れるだろうか。

その光景を想像して、ぞくっとした。それで彼の傷ついた心が少しでも癒されれば……。

枯れてはいけないので大きめの木を買った。店じまいの時期だと見越して、値切った。車には載らないので配達を頼んだ。三日後に、根土をしっかりと縄で縛ったグミの荷が届いた。門を入ってすぐ左側の柊を西の方に移して、その場所にグミを植えた。二階の淳

一の部屋から見下ろせるだけでなく、家に出入りするときにいやでも目に入るように考えたのだった。

「この葉は落ちてしまいますが、三月になると新芽が出てきます」

配達に来たついでに植えてくれた植木屋の若い男が、元気な声で言った。その男の言った通り、冬を過ぎて三月初めに新芽を吹き出した。

六月の半ばごろ、隆志はグミに十個ばかりの実が生っているのを見つけた。それはまだ楕円形になってはいなかった。丸く小さく、柄に近い部分が少し赤くなっているだけだった。

グミの実は日に日に膨らんで丸みを帯び、やがて真っ赤に色づいた。休日だった。隆志はたまたま庭で草取りをしていて、淳一が珍しく日中に、ゲームを買うつもりか、出かけて行くのを見た。門に向いながら、グミの木に一瞥をくれて、「ふん」といった感じで口をゆがめて、額に立てじわを寄せたいつもの表情のままで門を過ぎて出て行った。予想はしていたことだが、なんとなくこちらの意図が見透かされたようで、隆志の心に苦い失望が残された。

3

隆志の妻尚子には洋平という名の兄がいた。つまり隆志の義兄に当たるわけだが、隆志とは二歳年上で、真吾という名の淳一と同年の男の子がいたが、小学校一年で先天性の疾患で亡くしていた。それもあってか、甥の淳一を幼いころから可愛がってくれていた。洋平は妹の尚子から様子を聞くたびに心配して、電話をかけてきて、義弟の隆志にあれこれと注意をした。

洋平は尚子の親族の中でも異色の存在だった。大学の理学部を卒業して、いったんは丸の内に本社がある大手の化学品メーカーに就職が決まったが、どういういきさつがあったのか、入社を辞退し、以来、五十代なかばの今に至るまで定職に就いていない。若いころは作家になりたいと言っていたが、何か書いて

いる気配はない。小さな出版社で校正の仕事をしていたこともあれば、小さな業界紙の編集を手伝ったり、またある時はＴＶのＣＭ作りの会社に潜り込んだり、得体が知れないところがあった。

今は農業関係のＮＰＯを立ち上げて、結構忙しそうにしていて、起業家だと自称している。もっとも妻が看護師として働いているのでホームレスになる心配はなかった。当然ながら一族の中では評判はよくなくて、警戒されたり、敬遠される存在だった。

グミの実の季節が終わった頃のことだった。一度会おうということになって、駅前の小料理屋の小上がりに上がった。隆志が言った。

「義兄さんはぼくのことを子供の教育を間違えたバカな父親だと思っているんでしょうね」

「いや、そんなことはない。ぼくだって真吾が生きていて、出来がよかったら、よく似たことをやっていたかもしれない」

それは相手を慰めるための言葉にしか聞こえなかった。隆志はうなずいたきり、何も言わなかった。重い雰囲気に耐えきれずに、洋平が口を開いた。

「果たせなかった夢を息子に託すのだ」

「それはちがいます」

意外にきつい口調だった。

「今は一流企業でも十年先にはどうなるかわからない時代だ。そうすると士業とか師業というのは固い。無論、本人の努力が必要だけどね。それに、医者に、というのは押し付けたわけじゃない。本人の希望でもあった」

「それで？」

「どこがまずかったのか、よくわからない。親が教えること自体はまちがっていたとは思わない」

後悔していると取られたくなかった。あくまでも指導方法、教える技術の問題と言いたかった。ただ、出発点である将来志向への誘導が本当の愛情から出たものなのか、やはり見果てぬ夢を子供に託したのか、自

分でもよく分からなくなっていた。洋平は「半分は強がりで言っているのだろう」と思うだろう。

洋平が、これだけは、という調子で言った。

「尚子の話では、淳一が勉強の熱意を失っていった原因は成績が落ちたことから自尊心を傷つけられて悪循環におちいったのだと言うんだが」

「そこのところはよくわかりません。。限界だったのかもしれない」

「そうじゃないかもしれない。勉強漬けの生活の先にあるものに疑問を感じたんじゃないか。それで何になる、と。誰か友だちに影響を受けたのかもしれない」

「それはぼくにもわかりません」

隆志には返事はできなかった。

洋平は、さらにこう言った。

「挫折なんて誰にでもある。こちらがだめならあちらで行こう、でいいんじゃないか。若いんだから」

洋平はそれ以上は言わなかった。隆志にはわかっていた。洋平は隆志が強がってみても内心は落ち込んでいると思ったのだろう。ただ、洋平の言葉に誘発されるように、思い出したことがあった。

隆志が高校三年生の秋だった。陸上競技の三人の選手が国体に出場するというので、体育館で壮行会が開かれた。演壇に並んだ三人を前にして、生徒会長が激励の言葉を述べ、選手代表の決意が述べられ、最後はコーラス部によって国体の応援歌が歌われた。「若い力」という歌だった。進学校だったので、送る側の生徒はみんな受験勉強のヤマ場で、寝る時間を削る毎日だったので、隆志には別の世界の出来事を見ているようだった。奇妙な違和感があった。彼らは将来をどう考えているのだろう。県の競技界でも有数の選手だから、私学からはスポーツ枠で引く手あまたなのかもしれない。だが、その後、思うように記録が伸びなかったり、けがで競技を辞めなくてはならなくなることもある、そういうリスクについてはどう考えているのか。

「義兄さん、ぼくが生まれる前のことだけど、太平洋を初めて小さなヨットで横断した若者がいて、いちや

く世界のヒーローになった、という実話を聞いて思ったのは、その人のその後の人生はどうだったんだろう。成功体験だけがついて回るだけではむしろ悲惨じゃないですか。大西洋無着陸飛行に初めて成功したアメリカの若者のそのあとはどうでしたか？　暗い影がつきまとっていたのではないですか？　義兄さん、大きく羽ばたくためには、大きく屈することが必要ですよね。若い時だからこそ、一見無駄にみえることでも地味にこつこつと努力を積み重ねることも意味があるんじゃないかな」

「とは言え、いつも将来に備えることばかり考えていても物事は思うようには進まないよ。若い時は二度とないんだから、そこも考えてやらないと」

二人の話はかみ合わなかった。だが、そうは言いながらも、隆志にはあの国体三人組にはいまだにコンプレックスがあった。そして、「若い力」という歌は忘れられない歌になった。何か物足りなさを覚えるとき、この歌が頭に浮かんだ。

青春、つよき者」と。彼らが卒業後、どんな人生をたどったのかは知らないが、結果はどうあれ、自分の判断で、柔軟に適応していったと思いたかった。

洋平が話題を変えた。

「しかしなあ、子どもが元気に育ってくれるだけでうれしいことじゃないか」

隆志の盃に酒を注ぎながら言った。

「真吾が生きていてくれさえいたら、と、何度もそう思ったよ」

この一言は隆志の胸に堪えた。子どもとは何だろう。至福の幼児期を過ぎれば苦労の種だ。自分の親にとってもきっとそうだったのだ。順送りなんだよ、と誰かから聞いた。しかし、隆志の場合は、その苦労は別格だ。人の胸の奥にまで入ってその訳を探るなんてできる訳がないのだから。

――だけど苦労のし方が少し間違っていたのかも。

洋平の顔を見ると、遠くを見る目つきになっていた。

「淳一と真吾は仲が良かったな。よく一緒に遊んでい

たのを今でも思い出す。今日はこれを持ってきた」

財布から小さな写真を取り出して隆志に見せた。隆志は思わずうっとうなった。まだ幼稚園の頃に見える。真吾が遊びに来た時のことだ。

庭の東半分を耕した菜園で、隆志が腰をかがめて大きな大根の葉の根元を両手でつかんでいる。淳一が隆志のズボンをつかんで、体を斜めに倒して力いっぱい引っぱっている。その淳一の服の背中を真吾がつかんでひっぱっている。

「うんとこしょ　どっこいしょ」淳一が大声で叫んだ声が今も聞こえる。淳一がそんなことをするようになったのは、「おおきなかぶ」という絵本の影響だった。おじいさんがかぶの種を植えた。すると大きなかぶができた。おじいさんはかぶをつかんでひっぱったが抜けない。そこでおばあさんを呼んで、おばあさんがおじいさんをひっぱったが抜けない。孫娘を呼び、犬を呼び、猫を呼び、最後にはねずみまで呼んで、やっと抜けた。ロシアの民話だが、著名な彫刻家が描いたスケールの大きい絵が素晴らしかった。息子は幼稚園に入る前からこの絵本が大のお気に入りで、何度読まされたことだろう。

「うんとこしょ　どっこいしょ　まだまだかぶはぬけません」

隆志がそこに差しかかり、読もうとすると、その一瞬前に息子が大声を上げる。

「うんとこしょ　どっこいしょ　まだまだかぶはぬけません」と。

隆志はそのころからずっと、このかぶに似た丸っこくて大きな大根を、連作を避けながら栽培し続けてきた。他の野菜はやめても、どうしてこれだけを作り続けるのか、みんな不思議がったが、理由は誰にも言わない。そして、いまでも収穫すると段ボールに入れて洋平にも送っている。

「この写真、淳一にやってくれないか」

洋平が託した写真は、隆志の心の傷をうずかせた。いまやそこにあるのは家族の残骸ではないか。洋平

が別れ際に慰めるようにいった言葉が気になった。
「失意のあげく自暴自棄になって、怒りを自分ではなく他者に向ける子供がいる。淳一はそういうタイプじゃないから大丈夫と思うが」

4

二年後、淳一は出席日数は全く足りなかったが、この学校には卒業については不登校枠というのがあって、家で自学習していると申告して、授業料さえ払っていれば、卒業はさせてくれた。
卒業後、三か月が過ぎた。いつの間にか花の季節は過ぎて汗ばむ陽気になっていた。ある日、淳一が突然二階から降りてきて、「仕事に行く」と言った。隆志は驚いたが、意味は分かった。尚子が数日前に、ゲームを買いに行って帰ってきた淳一に「ゲームって結構高いのね」と訊いた。深い意味はなかったのだろう。好奇心から出た言葉だったが、淳一にはニート生活をしているという負い目があって、そこを衝かれたのが堪えたのかもしれない。「どこへ行くんだ」と尋ねると、額に立て皺を寄せて睨んだ。
「何かあったら困る。行先は言ってもらわないと」
「コンビニに仕事で」
めんどくさそうに答えた。何はともあれ実社会に触れることは好ましい変化で、両親とも少しは打ちとけるきっかけになるのではないかと期待した。コンビニは半月ほどしか続かなかったが、それから後は、小ざっぱりとした服装で出かけるようになった。就職活動で出かけるのだと察しがついた。そこまでは良かった。隆志もいろいろと助言をして、面接試験を受けに行き、そして仕事に出かけるようになった。だが、どれも長続きしなかった。最初から正社員で、というのはなくて、非正規の契約社員やアルバイトばかりだった。面接の時に聞いた仕事の条件と実際とは違っていた。履歴書の空白の期間をどう説明したのか。考えると、隆志の胸が詰まった。夜遅くに疲れ切った表情で

帰ってきた。勤め先を変える度に表情が暗くなった。そして、また部屋に閉じこもり、まったく姿を見せなくなった。閉じこもりの殻は一層固くなった。

「前より悪くなったじゃない」と妻は嘆いた。そして、最初の引きこもりが始まってから五年近くが過ぎて行った。

5

初秋の風が涼しくなった頃、突然「運転免許が取りたい」と言いだして、隆志を驚かせた。仕事を探すにしても、車がなければ不便だし、行動範囲を広げることと自体は悪くない。なによりも自分から何かをしたいという希望を示したのは初めてのことだ。彼の精神は密やかに立ち直りの兆しを見せ始めているのではないか。社会復帰へのシグナルではないか。それならば親が背中を押してやらないでどうする。ただ、かなりの金額を要する。隆志は妻と相談して自動車学校の授業料を出してやることにした。

それ自体がきっかけになるかも」と妻と話し合った。

はたして続くのか、と半信半疑だったが、毎朝、決まった時間に出て行く。夜、廊下で顔を合わせたときに「どうだ」と訊くと無愛想に「別に」と答える。もう三十年近くも昔のことになるが、隆志が教習所に通っていたころは同乗する指導員が威張っていて、なかには意地の悪いのもいた。今では生徒の数が減って、女性の指導員も増えて、雰囲気は全く違っているらしい。それにしても不登校からひきこもりになった淳一が落後せずに続いているというのは意外だった。しかも規定回数に近い回数で免許取得したので、安どすると同時に拍子ぬけがする思いだった。考えてみれば自動車学校というのは生徒同士の接触は全くせずに終われる。学科と言っても神経を張り詰めなければ分からないといったものではない。実技の指導員は女性もいて優しい、となれば、ひきこもり人には向いているのだろう。だが、それで生活態度が変わったわけでは

なった。就職活動をする気配もなかった。これで終わったのでは意味がない。隆志は妻と相談した。

「自分の車がいるだろう。行動範囲はうんと広がる。社会復帰へのきっかけになるだろう」

「それは分かるとしても、車で出かける先があるのかしら」

「免許が取れたとなれば、考えも変わるだろう。就活にも有利だろう。それに最初は中古で十分だから」

妻を説得して、金は出してやってもいい、と思ったが、妻は懐疑的だった。

「本人がどういうかしら。私は淳一が何を考えているのかよくわからないのよ」

妻の言うこともっともだった。淳一は、最近は夜遅くには部屋から出て、キッチンで一人新聞を読んでいることがあった。その折に話しかけた。

「車がいるだろう。せっかく免許を取ったのに、乗らないでいるとペーパードライバーになってしまう」

意外に明快な答えが返ってきた。

「いや、必要な時にはレンタカーを借りるからいいよ。たまに乗るだけでもったいない。買えば保険だ、車検だと大変だから」

この返事は隆志を喜ばせた。しごくまっとうな考えかたではないか。

自然の移ろいは隆志の一家の動静には関係なく、季節は冬に向かっていた。街路樹のいちょうやプラタナスの葉はすっかり散ってしまい、絡み合ったような枯れ枝の隙間から冷え冷えとした青空が見えた。

また淳一の外出が続くようになった。求職のためなら、服装がそれらしいものになるが、とてもそんな格好ではない。大きなマスクを着け、目にはサングラスをかけているので、幼稚な変装だが、尚子にも誰だかわからなかった。尚子は夜、役所から帰った隆志に、気味が悪いとこぼしたが、どこに行っているのか聞いても答えない。

日曜日だった。彼が出かけたあと、部屋のドアのノブを回すと、内鍵のポッチは押してなくて、ドアはすっと開いた。淳一の部屋に入るのは初めてだった。床もベッドの上も、思っていたよりも片付いているのが意外だった。机の上には読みかけの本やノート、ゲーム機が載っていて、雑然としていた。書棚にはまだ高校の教科書や大学検定の問題集が並んでいた。そんな志を持ったこともあったのだと思うと、見るだけで痛々しかった。封書が何通も輪ゴムで束ねてある。一番上の一通から中に入っているレターを取り出して広げた。

〈――慎重な選考を重ねました結果、残念ながら今回についてはご希望に添いがたい結果となりました。貴殿の成績は優秀ではありましたが……〉

取り繕ったようなバカ丁寧な文言が空々しい。

メモ用紙が目に入った。手に取ると、何枚もびっしりと鉛筆で書き込まれている。丸で囲んだり、記号があったり、矢印で結んだり、一見、なにか思いついた考えを書きつけて、まとめようとしているようだった。中に日付が書かれているものがあり、その横に「投稿完」とか、Fなどと文字が書き込まれていたりする。ネットの掲示板への投稿らしいと隆志にもわかった。

メモの束をぱらぱらとめくっていると、短い文章が力を込めて書かれ、強調するように傍線が引かれていた。

――人とかかわり過ぎると怨恨で殺すし、孤独だと無差別に殺すし、難しいな。誰でもよかった、というのは何かわかる気がする――

もう一枚には、

――「明日の友」は本日炎上。帰る場所がない。なりすまし。あいつにとっては大成功――

意味がわからなかったが、強い印象を受けた。日記はないかと思って引き出しを開けて、ノートを開いてみたが、こちらは日常の出来事が簡潔に書かれているだけだった。小さな写真が目に入った。取り上げてみ

ると、引き裂かれたのをテープで貼りあわされていて、隆志と真吾と三人で菜園で遊んでいるあの写真だった。

淳一がいつ帰ってくるかわからないので、探索はそこまでにして、そっと部屋を出た。

隆志は自分のスマホで調べてみた。「明日の友」は携帯サイトの掲示板の一つだった。ユーチューブのような規模の大きい掲示板ではなく、小規模のもので、投稿メンバーは十数名ほどだった。比較的まじめな固定客の集う掲示板のようだ。淳一は多いときは一日に数回も投稿していた。

そこでは淳一は意外なキャラクターを発揮していた。おどけたり、自分を茶化したり。「不細工な男としては」とか、「カノにふられた。こんなことを言われた」とか。書かれていることは事実ではなく、創作かもしれない。自虐的な感じもするが、受け入れられやすいキャラクターを作って、交流相手を増やしているのだろう。けっこうまじめな内容のものもあった。時には自作のジョークを投稿していた。うまいジョークもあった。だが、こんな状況の中でそういうジョークを一つ考えだすのに幾日も幾晩もかかっただろう。それを思うといたたまれなかった。

そして、最近、なりすましによって掲示板「明日の友」は破壊され崩壊したことがわかった。

隆志にはわかっていなかった。彼は全くの孤独ではなかった。ネットの中で一つの仮想世界を作っていたのだ。それは実態の知れない人々を相手にした世界だが、それなりの葛藤はある。敵対する場合もあるだろう。今の高度情報化の時代は引きこもって孤立することと自体が困難なのだ。ただ、架空の世界だから相手は目に見えない。だから直接ぶつかりあう摩擦も共感もないかわりに、孤独感は本当には癒されないだろう。

それから数日の間、あのメモに書かれた短いフレーズが脈絡もなくふっと頭に浮かんでは消えた。意味を考えたがわからなかった。それでも忘れられなかったのは、抽象的な文章だが、思いつきに書いたとは思えず、凝

縮された何かを感じたからだ。

それから一週間も経たないうちに、関東のある町の駅で、一人の若者が複数の無関係な通行人を車ではね飛ばし、ナイフで数の死者と負傷者が出た。犯人の青年は逮捕されたが「誰でもよかった」と述べた。「またか」というのがメディアの報道ぶりで、「誰でもよかった」は定番化したセリフだった。隆志はテレビや新聞で事件の報道を読んで、即座に淳一のメモに書かれていた言葉を思い出した。

前段の「人とかかわり過ぎると怨恨で殺す」というのは、人とのかかわりが極めて希薄な淳一には起こりえないことだ。それに対して、後段の「孤独だと無差別に殺す」はどうか。隆志は「あっ」と思わず声を上げた。淳一には友達はいない。それ以上に問題なのは両親との断絶ではないか。

順を追って考えてみた。問題なのは父親だけでなく、母親にもあった。何があってもかばってくれるはずの母親がいなかった。父親としたのではなかったか。そして今、母は不在だ。息子の様子に妻はすっかりおびえている。もっけの幸いと、朝早くから娘の家へ二人の孫の世話に出かけている。

淳一から見れば、かつては存在していた普通の家族がなくなってしまった。どうしてそうなったのか。しかし、今から家庭を再構築するのは無理だと思っているだろう。

社会への復帰を試みたが、ことごとく失敗した。隆志も妻の尚子も何の支援もできなかった。淳一が何も言わないのだから支援のしようもない。だが、こちらから手を差し伸べてみることはできたのではないか。見て見ぬふりをしていたのではないか。

淳一にとっての孤独は、彼の内部に一緒にいるべき誰かがいない。友人もいない。内部が空洞化している状態なのだろう。その空洞部分を埋めるのは彼にとっ

てはスマホだったのか。掲示板は彼の両足が辛うじて載っている足場のような場所だったように思える。ある程度のところまではネットの双方向性が社会とのかかわりを引っ張ってくれたけれども、最後のよりどころだった掲示板がなりすましによる荒らしで崩壊した。社会復帰は現実世界でも仮想空間でも失敗した。

彼の心の空洞はポッカリと空いたままになり、回りはすべて敵になった。残された対応は死しかないのではないか。彼の投稿にこんな文章があった。「現実でも一人。ネットでも一人」「死ぬまで一人、死んでも一人」

空洞を埋めるのは自殺か、それとも誰でもよい誰かの存在の抹殺か、である。空洞に「誰でもよかった」という言葉を当てはめてみる。あとは無差別殺傷という行動しかないと思い定めているのではないか。

ここまで一気に推測が進んだ。いや、これは推測ではない。必然だった。事態は差し迫っているように思える。車の免許を取ったのも、レンタカーでいいと言ったのもふに落ちる。変装してる場所を探していたのではないか連休に入る。繁華街はどこも人出はいつやるかだ。片時も目が離せは後をつけなければ。レンタカー力ずくでも借りることを阻止しな

隆志は一週間の休暇を取った。というものは無縁のものと思って上司は驚いていたが、家事都合で

7　父と息子

隆志は廊下に立っている。淳一取るようにわかる。

〈父親が廊下で聞き耳を立てている〉そう思いながら淳一は目を覚ます。

起き上がり、手探りでズボンを探すのが父親には見

える。

息子が食事をしに台所へ出て行かないのが見える。、スマホの画面に見入っているのが、一時間も便所に坐っているのが、読みもしない本をパラパラめくっているのが。息子の苦悩が、孤独感が。隆志は廊下に立っている。淳一には父親が廊下に立っているのが聞こえる。

息子がドアを開けると父は廊下にいる。父は息子に尋ねる。

「どうしてそんなとこに立っているんだ？　どうして仕事に行かないんだ？」

淳一は疑う。父は有給休暇を取った。〈何のために？　息子を監視するために？　こんな暗い廊下に突っ立って、いちいち息子の行動を監視して、どうしようっていうんだ？　見えもしないことまで推量したりして、どうしていつも息子を見張っているんだ？〉

隆志は居間に行くが、しばらくするとまた廊下へこっそり出てきて聞き耳を立てた。息子が部屋の中でときどきなにか言っているのが聞こえる。でも、自分には何も話してくれない。

妻は朝のうちに嫁いだ娘のところへ出かけた。娘は三人目の子どもが生まれる。母親の代わりに炊事や洗濯をしてやり、二人の子どもの守りをしてやる。娘は身重になってから血圧が高いのでほとんど寝たきりだ。医者にそうしろと言われている。それで妻は一日中家にいない。妻は息子を怖がっている。

息子は引きこもって、考えてばかりいる。

話しかけても、怒鳴り返されるのがおちだ。

息子は新聞を読み、たばこを吸う。

息子は部屋に閉じこもる。でなければときどき通り へ散歩に行く。

「散歩はどうだったか？」
散歩は散歩。返事はない。
働きに行ったら？
「別に働くのがいやなんじゃないんだ。気持ちが悪くなるんだ」
「なぜだ？　どうして気持ちが悪くなるんだ？」
「悪くなるから悪くなる。考えてた仕事と違うんだ」
それじゃ何か臨時にアルバイトの仕事でもしたら、と妻は言った。
息子は怒鳴りだす。
時に臨時を上塗りするような仕事をどうしてぼくがやらなきゃならないんだ？
このくそおもしろくもない世の中も臨時さ。

隆志は台所で聞き耳を立てている。淳一の言いたいことはわかる。
「みんなが、働けば気分は良くなるという。ぼくはそんなはずはないと思う」

一月が過ぎて、息子は二十二歳になった。夜はテレビのニュース番組を見ているようだ。息子の言いたいことは分かる。
「みんなのんびりと平和な顔をしている。ぼくだけがはみ出ている。いっそ戦争でも始まればいい」
彼に言わせれば、今となっては何もかも取り返しがつかず、自分にとって着手しがいのあることなど、もうない、「ゼロだ、ゼロ」と吐きすてる。

淳一はウインドブレーカーをはおり、下はジーパンという軽快な服装で、毛糸の帽子をかぶり、マスクをして部屋から出てきた。なんとなくいつもと雰囲気が違う。休日だ。繁華街は人が密集しているだろう。ついに決行か。隆志はあわててコートを着て戸締りをして、あとを追った。やがておもて通りを行く息子の姿が見えた。電柱三本分ほどのあいだをおいて、あとをつけた。角を曲がって広い通りに出ると、ちょうど息子がバスに乗るところだった。隆志の予想とは違って、

町とは反対の方向に向かうバスで、海岸に添った道に向かう。

隆志は次のバスを待つしかない。タクシーを拾ってバスをつけてやろうと思ったが、タクシーは一台も通らなかった。二十分経って次のバスが来たので終点の神之浦まで乗って行った。

二月の神之浦は陰気で寒く、人の影もなかった。海は雲が低く垂れこめ、水平線がぼやけていた。海岸通りにはほとんど車が見えず、それと交差する通りにも誰ひとり見えなかった。雪になってきた。向かい風にあおられた雪に顔を打たれながら、彼は遊歩道の上を、淳一の姿を探しながら歩いて行った。日の射さない空の下にぼーっとして輪郭のはっきりしない灰色の海岸が続いていた。シャワー室や屋台店などの施設はみんな店を閉めている。寒々とした鉛色の海は、ゆたゆたと動いていた。海面から吹き上げてくる風が服の隙間から忍び込んでくる。鉛色の波に、風が白い波がしらの帽子をかぶせ、それが人気のない海岸にゆっくりと押し寄せては砕けて消える。そのザザっというとどろきもひっそりとしか聞こえない。

息子を探して浜の端まで歩き、またおなじ道を引き返した。岩場の方へ歩いて行くと、泡立った渚の中に突っ立っている人影が見えた。遊歩道から階段を降り、隆志は畝のように波の跡がついた砂浜へ出て行った。靴の上まで水に浸って、波音のとどろく浜辺に立っていた人影は淳一だった。

隆志は淳一の方へ駆け寄った。悪かった、疑ったのはおれが悪かった。淳一は身じろぎもせず、打ち寄せる波を見つめたまま、水の中に立っていた。

淳一、おれは恐ろしいんだ。何がしたいのか言ってくれ。

おれは体の中が恐怖でいっぱいになるような気がする。淳一は何も言わなかった。

風にあおられて隆志の帽子が飛び、海岸を転がって行った。帽子は磯波の中へ吹き寄せられそうになった、と思うと、また湿った砂地の上を車輪のように転がって、遊歩道の方へ吹かれていった。隆志は帽子のあとを追った。あっちへ追い、こっちへ追い、最後は海の方へ向って追いかけて行った。風が帽子を足元へ吹き返し、やっと捕まえることができた。いつの間にか彼は泣いていた。彼は息を詰まらせながら、凍えた手の指で両の目をぬぐい、こっちへ追い、最後は海のき返していた。息子は水際に立っている息子の傍へ引しまで水につかった。風が帽子を足元へ吹き

あの子は孤独な人間なんだ。

自分で自分を孤独に追い込んでしまった。おれにも責任はある。

淳一よ、どういったらいいのかな。

でも人間なんて決して楽なもんじゃないんだよ。それが人生なんだ。

それ以上のことはおれには言えないよ。

でもなあ、人間、生きる気持ちがなくなってしまえば、死んだも同然でどうにもならないんだよ。

全然どうしようもないんだ。生きるしかないんだ。

さあ、もう家に帰ろう。ここは寒いよ、そんなに足首を水につけたりなんかして、風邪をひくぞ。

淳一はじっと水の中に立っていた。淳一は大声で叫んだ。何を言っているのか聞きとれず、隆志には、だうおーっとしか聞こえなかった。でも、息子は叫び続けた。隆志も水に入って淳一の肩を抱いた。父は泣きながら、ただ、許してくれ、と言った。

「さあ、帰ろう」

どこへ？　おまえの家に。ただひとつ存在に値するもの、それを取り戻しに。「愛」をたとえどんなことがあっても、それがあればこそ人間は生きていける。

―了―



むらさき桜

市川しのぶ

序章

佐保子は何時ものように足元に気をつけながらゆっくりと進む。つい先日電照係のバイトの男の子が転倒して、右足首骨折した暗く狭い通路を進む。突き当りのドアの鍵を開け、天井に付けられた蛍光灯のスイッチを入れる。地下の部屋はむっとした空気が充満している。毎朝この部屋の空気で佐保子は四季を感じる。冬は身を切るような冷たさである。打ちっぱなしのコンクリートから上がってくる冷気は、否応なしに冬の

厳しさが身体に迫ってくる。あまりにも冷たい空気に、そこへ直接敷いた古ゴザ二枚の上で仕事をしている佐保子を可哀想に思ったのか。ベテランの道具係が、イベントで使わなくなった畳を持ち込み、さらにその上へカーペットを敷いてくれた。あれから何年になるだろう。今ではカーペットは取り換えられて何枚目かになっている。これは佐保子だけのためでなく、彼女が仕事をするために広げる豪華な衣装のためでもある。それだけの年月がここで過ぎてきた。

旧式のクーラーをかけても下がらない真夏の部屋の温度は凄まじい。直しがある衣装の上へ、自分の汗を落とさないように細心の注意をする。

この頃体調が良くない。毎年紫陽花がその色を鮮やかに見せる頃になると過呼吸が起こる。発作止めの薬が入った袋は片時も離せない。何十年も同じ仕事をしていると、理由のない目眩が始まる。それに仕事の忙しさが重なり、じっと目を閉じたまま身じろぎもしない。眠気がに時間の配分が解ってくる。

書かれた予定表から、今日の自分の仕事量を確認する。今朝一番の仕事は裾直しである。豪華な打掛の鶴と亀の金糸銀糸がどうしても裾の部分から褪せる。裂けた糸を注意深く抜き、針で金糸銀糸を均等に足して治す。頭痛がする。過呼吸の前兆か。佐保子はそのままの姿勢で、裁縫台の上へゆっくりと突っ伏していった。

一九九〇年四月一日

病室の窓から外を見るとすぐに林が見えた。多分桜林だろう。レースのカーテンはまだ新しかった。昼過ぎに入所した部屋にはシャワー付きの小さな浴室とトイレがあった。この一か月間、二人の環境は目紛(めまぐる)しく変化した。数時間かけての移動が立花にはやはり辛かったのか、ベッドに横になるなり、じっと目を閉じたまま身じろぎもしない。眠っているのか。ただそうしているだけなのか、佐保子には解らなかった。彼女の世界は全て変わった。今まで生きてきた無色の世界に薄い色が付いた。全力で立花の看病をすること。

そのためだけに、これからの人生を生きることを決めたのだ。目を開けた時、佐保子が言った。

「綺麗な病院ですね」。彼の返事はなかった。その眼の中には哀しみと諦めと焦りが、全て集まっているような気がした。佐保子とは反対に、立花の世界は色がなくなった。生きることを諦めた人間は、色彩を認識出来なくなるのだろうか。

立花と初めて会ったのは何時だったのか。随分昔のようなまだほんの一年とちょっと前なような気がする。だがのだ。仕事を終えた佐保子が、地下の衣裳部屋から細い通路を通って、地下駐車場へ抜けた時だった。用度課長にこの所帰りを待伏せされている感じに、地上の従業員口から帰るのを避けて、地下駐車場へ抜けたところを捕まった。そこを立花に助けられた。彼はいかにも佐保子と一緒に仕事に出掛けるような態度を取り、用度課長のパワハラをかわしてくれた。彼はホテルの特別セレモニー課チーフである。顔は知っていたが今迄に直接口を聞いたことはなかった。その後佐保子が早番で急いでいる時、立花がバス停に佇んでいる彼女を見つけて、車を止めたのが、口を聞くようになった始まりだった。

「早番の時、よく君をこのバス停で見かけるが、この近くに住んでいるのかい？」

「ハイ」。早朝バスを待つのは寒くて辛い。車内のヒーターの暖かさにほっと息を吐く。

「すると買い物はスーパーエルかい？」

薄い色のブルゾンにジーンズ姿でステアリングを握る立花の隣で、佐保子は極端に緊張していた。

「私はあのスーパーの上に住んでいるよ」

派遣女子社員や、バイトの女の子が必死に彼の住所を知りたがっているのに、何の躊躇もなく口にする立花が不思議だった。彼は地下の部屋で一日中繕い物をしたり、ホテルの予約衣装オーダーを揃える仕事を、佐保子がしていることを知っていた。二人が顔を合わす場所と言えば、大きなイベントや結婚式があって、ホテルの衣装を予約する客がいる時。あるいは関係ス

タッフ一同が集まって、ミーティングをする時である。と言っても、スタッフは整列して各係の上司の注意事項を聞くだけである。その時バイトの若い子や派遣の女性達は最前列に並びたがる。立花に声をかけてもらいたいからである。おそらく彼が住んでいる所を知っていると、佐保子が知れば大変なことになるだろう。彼は怖がられてもいた。仕事に対しては非常に厳しかった。少しのミスも許さない完璧主義者であった。同僚達にはうるさがられていた。ホテルの披露宴の招待客は二百人を超える時もあった。出勤途中の私服の彼女を車の中から見つけ、さらに車を止めてまで乗せたことが不思議だった。

四月二日

翌朝佐保子が目覚めると病室の外は既に朝の光が存在していた。慌ててベッドの中の立花を見る。カーテンを透かしての、朝の光の中での彼はよく眠っていた。それはすべての防御を取り払った騎士のようだった。

初めて彼の部屋を訪ねた時にハプニングがあった。アジアアフリカ会議のレセプションが迫っているというのに、チーフから連絡がないと、係りの者がボヤいているのを佐保子は従業員食堂で聞き、思わず声をかけてしまった。明日までに決済しなければならない書類を預かった。当時はまだ固定電話以外の通信手段は、ポケベル全盛時代である。世間はバブル時代で消費ブームが続いていた。結婚式は年々派手になり、ホテルでの披露宴の招待客は二百人を超える時もあった。仕事の帰りに寄るスーパーの反対側へ回り、マンションの郵便受けで部屋番号を確認する。チャイムを押すが応答はない。しばらく待ってから声を出す。

「衣装係の絹本佐保子です。書類を預かって来ました」

それでも返事はなかった。諦めて帰ろうとした時、鍵を開ける音がしてドアが細く開いた。そのドアの隙間から大型封筒を差し入れる。

「今日中にお返事を下さいとのことです」

すぐに踵を返した。何も佐保子が持ってくることは

ない。サブチーフが持ってくればよいことであった。
エレベーターの前まで行かないうちに、何か物音を聞いた。小さな音であったが重い音であった。振り向くと立花の部屋のドアが、先刻と同じ角度でまだ開いていた。不審に思ってドアの隙間から中を覗いた。佐保子は大きく息を吸い込んだまま動けなくなった。そこに立花が倒れていた。どのくらいの間、ドアの内側に倒れている彼を見ていたろうか。随分長い時間だったような気がする。
「あの……、どなたかいらっしゃいませんか」
返事はなかった。予想したことであったが彼女は困惑した。ドアの外にも内にも人影はない。思い切って一歩踏み込む。そっと彼の首へ指を当てる。頸動脈が打っているのが、指に伝わってホッとする。掌を今度は彼の額へ移動する。熱い。異常に熱い身体に動揺した。靴を脱いで廊下を進む。電話を探した。受話器を取った途端に少し冷静になった。
（救急車を呼んでもいいのだろうか）
それは漠然とした考えだれた時のことを思い出す。身体が震える。男が倒れ、直属の上司ではない。面倒しかし、仕方がない。一刻は真冬の街の風景を、サイて来た。

四月五日

毎日が単調な日々であった。検温から始まる一日。何の狂いもなくその日が過ぎていく。薄闇の中から南向きの病室に、青紫色の光が入ってくると日の出である。やがてオレンジ色の朝日が眩しく斜めに入ってくる。朝日が出るのも山の上である。夕日が沈むのも山の上である。ここは終末期を迎えたがん患者の病棟として造られた。
屋上に洗濯物を干して帰って来た佐保子が、ベッドの中の立花に笑いかけた。

「今ね、隣室の付き添いの人に屋上で会ったの。そしたら、私のこと奥さんって呼ぶのよ。そしてね」

さらに言いかけて言葉を飲み込んだ。彼の反応は佐保子が予想したのと反対だった。身体全体から不機嫌さを沁み出して、窓の外に目を向けて冷たい声を出す。

「帰れと言ってるだろ」

佐保子もつい感情的になる。

「何処へ帰るんですか。私に帰る所はもうありません。アパートは退去しました。チーフのマンションも売りました」

この数か月間続けてきた終わりのない会話がまた始まる。ほんの少しの感情は変化する。奥さんと呼ばれたことで病人の感情は変化する。奥さんと呼ばれたことで病人の感情は変化する。奥さんと呼ばれたことで病人の

に、すぐに彼は発車させる。先日の礼がしたいと連れて行かれた所は、小さなレストランだった。それが最初の強引な誘い方で、それから数度誘われた。何度か誘われるうちに、何時の間にか人目を避けようとする心が薄くなっていた。彼は時々眼前に彼女がいることなど忘れてしまったように、ふっと殻に閉じこもってしまうことがあった。そんな時佐保子は静かにしている。そこに彼女がいることに気が付いてくれるまで、じっとしている。やがて彼はふっと佐保子に気付く。そしてニッと笑う。思考の底に沈みこんでいる間、佐保子がずっと黙っていてくれるのが、何よりも嬉しいらしい。切れ長の瞳が閉じられていることさえある。彼は人を見下したような目付きをすることがある。ほんの一瞬ではあるが、信じられないほど冷たい目の色をする。彼がそういう目になることに気付いた佐保子は、底知れぬ恐怖を感じる。二人は職場の話をしなかった。衣装を揃えることや、直し専門のスタッフと、格式高いセレモニーや、華やかなレセプションの全責任者が、話せるような内容は何もなかった。

四月七日

佐保子が会う人物は限られている。一日に誰とも口をきかない日もある。それが皮肉にも化粧室で悪口を聞く時があり、個室から出られなかったことがある。女性同士の他愛のない会話は、エスカレートして激論になっていく。佐保子が聞いているとは露ほどに思わない。「あの人、男に興味がありません、って顔してるわよ」「立花さんと出来てたなんて。あんな恐っろしいチーフの何処が良いのかしら」「解らないものね」

立花は男性でも女性でもミスがあると、躊躇せずに注意する。その鋭さを怖がるスタッフも多かった。彼女達の話は尽きない。やっと数人が出て行った。ホテルの仕事は一定パターンの勤務ではなく、非常に変則的である。直接お客様に接するスタッフはともかく、佐保子のような全く影の存在であるスタッフも同じである。特に立花の仕事はそれが顕著である。このホテ

ルは最高、一度に千人の客の食事を用意出来る。小さな会では十人程度の昼のランチクラス会も用意出来る。

彼女の方も立花の課から予定表が回ってくると、とてつもなく忙しい時もあるし、仕事がばらけて比較的暇を持て余す時もある。そんな時も佐保子は出勤して地下の部屋で、何なりと仕事を見つけては針仕事をしている。彼女は針を持っている時が、何もかも忘れて夢中になれるのが好きだった。一針一針心を込めて進める。縫う。綴じる。繕う。解く。色を合わせる。一日中誰とも話さないことが少しも苦痛ではなかった。むしろその方が自分に合っていると思っていた。何となく毎日を暮らしていればよかった。それだけなら洗面所で強烈な言葉を聞くことはなかったろう。おそらくスタッフ陣の間では、もっと過激な言葉が飛び回っている。佐保子はそれを考えると身の置き所がなかった。後ろから突然得体の知れない物が飛びかかってくるような感覚が、いつも彼女を襲った。せっかくこの仕事を得て、生きると

と思った。だが運命の神は何時も、佐保子を少し温めただけで、再び地獄の氷の中へ突き落す。都会の桜が満開の時も、無味無色の世界の中で、彼女は息を潜めながら生き続ける。

四月二十一日

朝は今日も二人の部屋の外へやってきた。誰にでも平等、という素晴らしい輝きはやってくる。朝食のスープを立花は二口ほど飲んだだけで、もう再び口を開こうとはしない。わずか一八〇CCのスープさえ飲み干せない。熱いタオルで身体を拭いた。全体に浮腫がかなり進んでいる。特に足の浮腫がひどい。ここへ入所した時は、自分で歩けると我を張った彼であったが、もう自力で歩ける状態ではない。一昨日は面倒臭そうに自分で顎にシェイバーを当てていた。今朝はもうそれさえ拒否する。昨日一日剃らなかっただけで、白いものがかなり多い。鏡でわざと立花に見せる。

「人は死んでも髭は伸びる。爪も伸びる」

朝から一言もしゃべらなかった彼の口から、言葉が漏れた。

「完全に心臓が停止し、脳波が止まっても、髭も爪も伸びる。嘘だと思うなら、俺が死んだ後、何もしないでほっといてみろ」

それだけ言うだけでも立花は、少しずつしか声を出せない。息を継ぐ口元が歪む。何か話して欲しい。しかし声を出させるのが辛い。

「ね、今日は暖かそうですから、外へ散歩に行きましょうか」

無理に車椅子に乗せて連れ出す。朝食後ナースに言われた。気分転換に散歩して下さいね。桜林の中に一本だけ色の違う桜が咲いていますよ。ぜひ見てきて下さいと。都会より季節の移り変わりが遅いのか、空気が澄んでいて冷たい。立花の膝の毛布を胸まで引き上げる。病んだ男の内面の苛立ちが、車椅子に乗った背中に出ている。嗚咽が漏れそうになるのを必死でこらえる。あと何日生きられるのだろうか。二人だけの世界は何日続けられるのだろうか。

「若葉の匂いがするな。今まで感じたことがなかった」

立花は身体が衰えていく分、聴覚が敏感になった。佐保子には聞こえない小さな音が時々聞こえる。

「鶯だ」立花が小声で言ったのが、次には直ぐ近くで本当だ。遠くで聞こえていたのが、都会のざわめきの中では決して聞こえない音が、ここでは聞こえる。夜中木々の幹と幹とがこすれ合って、音を出す。葉と葉がこすれ合う音ではない、不気味な音である。今も突然聞こえた。佐保子の耳には確かに聞こえる。だが音に敏感になっているはずの立花には聞こえていない。幻聴だ。最近はひっきりなしに聞こえる。佐保子だけにしか聞こえない音が、壁のように彼女を取り巻く。

川の流れは広い河口から山奥の細い流れに遡るほど激流となる。立花にとって一体、佐保子はどんな存在なのだろうか。独身のやり手のホテルマン。肩書が物

を言うホテル業界に身を置くには、普通の者では勤まらないだろう。その立花の前歴を誰も知らない、というのがまた不思議であった。噂が噂を呼び、彼はアメリカのホテルで働いていた。彼の能力を外国資本の入ったこのホテルの、ある者が見つけたというのである。その前はと言うと誰も知らない。知らなくても彼の流暢な英語はこのホテルで大変重宝された。しかし彼はスラングも使う。佐保子にはよく解らないが、時々とんでもない言葉を、口から吐く時がある。特に二人だけになった時にそうなる。佐保子が聞き直すと、はっと気が付いて苦笑いをする。

桜は満開である。桜の花は正常な者でも一種の不気味さを感じる。今立花は生きることを神に拒否された身である。そして、佐保子は生きる意味が解らないまま、長い間苦しみ続けて生きてきた。若い時から生きることが苦しかった。彼女はこの季節が好きではなかった。桜の花は非常に綺麗だし、優しい花である。咲いている時も散るときも美しい。だが空一杯に広がった様子は、その綺麗さを通り越して、何か異常なものを感じるのだ。特にライトアップされた桜を見た時は、その怪しげな花の美しさに、人々とは違う意味で息をのんだ。息を吸い込んだまま吐くことが出来なくなった。何かがいる。花と花の間に何かが潜んでいる。桜の花の陰に得体のしれない何かがいる。人間なのか、獣なのか。桜の花は一人で見るには妖気に溢れ過ぎている。そうかといって大勢の人と賑やかに見れば、より一層魔物の怒気が増大する。それが佐保子の最初の症状だった。あれから何年になるのだろうか。パニック障害の一種で過換気症候群と診断され、多くの種類の薬を処方された。心の病に効く薬はない。向精神薬や抗うつ薬は様々な種類がある。その中の何種類を試したことだろうか。何かの症状に効けば、何かの副作用が必ず出る。

「少し歩きたい」

立花が顔を振り向けて佐保子に言う。前へ回ってひざ掛け毛布を取る。ゆっくりと立花が立ち上がる。手

を添えようとする彼女を無視して、彼は歩き出す。ホテルの中で背をぴんと張って颯爽と仕事をしていた面影は全くない。後ろから見ていると目頭が熱くなる。ついこの間だったのだ。彼がホテル内を歩いていたのは。何故こんなことになってしまったのだろうか。涙をそっと拭いて彼を見た時、佐保子の背中を戦慄が走った。立花が両手で桜の花をむしり取って、口へ入れていた。ナースに教えられたむらさき桜の花だった。駆け寄って、その両手いっぱいの花を奪い取った。佐保子の必死の剣幕に、彼は地面へ倒れたままじっとしている。身動きをしない男の背中に数枚の花びらが落ちた。一重咲きで、花弁の先へ行くほど濃い紫色になっていた。里桜の一種とのことである。東京荒川堤に植えられている種類だという。それがこの山で一本のみ突然変異で咲いたらしい。一枚幾千も含まれているかのようであった。

車椅子に戻った立花が呟いた。

「もう二度と桜の花を見ることは出来ないんだな」

膝に毛布を掛けている佐保子の手が震えた。

五月十日

連休が過ぎたが終末医療棟は何の変りもなかった。立花の病状にあまり変化はなかった。ただし昨日と今日とを比べればそうであろうが、入所した時に比べれば、かなりの変化が出てきていた。相変わらず食事の量は少なかったし、口数も少なかった。入所した時は感情の起伏が激しく、物を投げつける時もあったし、怒鳴ることもあった。薬のせいだと思うことにしていた。彼も辛いのだ。痛みを堪えることだけで、佐保子に当たらざるを得ないのだ。分かる。胃が痛い。腹が痛い。喉が痛い。身体中をガンの細胞が駆け巡っているのだ。佐保子の場合の痛さは幻想だった。だが、彼の場合は現実に強烈な痛さなのであろう。医師は強い痛み止めを使いましょうかと言うが、立花はそれを拒否する。

「最後まで佐保子が分かるように、正気でいたい」
と言うのである。モルヒネを使えば痛さをかなり抑えられる。しかしその量が多くなればなるほど、意識は薄れていく。やがて、眠り続けて、血圧が下がって行く。呼吸数が少なくなり、眠るように穏やかな最期です。二人でそのように医師の説明を聞いた。彼はここへ入所することを選んだが、佐保子が付いてくることを拒んだ。二人揃っての入所を彼は強く否定した。それで揉めに揉めた。彼は退院して自分のマンションへ戻ると言い続けた。医師はそれを許可せず、転院を進めた。手術を拒否し治療を拒否する立花を受け入れる病院はなかった。最後に残った施設が緩和専門のこの病院だった。

ホテル内は快適に温度調節されている。だが何時も地下室まではそれが及ばない。一時でも温かい夢を見たのがいけなかった。喜び楽しみが大きければ大きいほど、次に来る哀しみも絶望も反対に大きくなる。寄ると触るとスタッフの噂は尾ひれに尾ひれがついて、大きくなって行き二人の噂は止まらない。

五月十六日

配膳車の上の食器が触れる音で、佐保子は目覚めた。物心ついた時から熟睡出来ない性質だった。それがこの療養棟へ立花と一緒に入所して余計に眠れなくなった。ベッドの中は静かだった。朝方まで寝返りを何度も打っているのを覚えていた。立花の顔を覗き込む。ふっと掠める恐怖。その恐怖が目覚めたばかりの頭の中へ、木枯らしのように入り込む。ずっと持ち続けてきた恐怖。慌てて掌を口元へやる。微かに感じる寝息。彼が息をしていることを確認することで、いつもの朝のように安心して、自分自身の身支度をする。

立花がホテルの駐車場で倒れている所を、救急車で運ばれた。今度はなかなか出勤してこなかった。スタッフの噂話では、悪性ガンでそれが破れて出血したとか。面会謝絶が続いていて、誰が見舞いに行っても

会えないという噂も飛ぶ。どんなに佐保子が心配しようと、どうしようも出来なかった。

何時もの衣装保管庫で仕事をしていると、内線電話がかかり至急人事部へとのこと。佐保子が出勤していることは知られているかいないか、一般のスタッフには関係がない。衣装係のスタッフさえ、あまり会うことはない。衣装箱へファイルに指定されている着物と帯とその他小物を全て完璧に揃えて、黒板にそのことを記入し、棚へ上げて置けば、日常の仕事はなくもう帰ってもいいのだ。

従業員用のエレベーターで上へ上がる。人事課長が飛んで来て、役員室へ連れて行かれた。車椅子の白髪の老人がいた。

「こちら、上田常務さんだ」常務の顔など全く知らなかった。「絹本佐保子さんですな」

常務はゆっくりと声を出した。老人特有のしゃがれた声だった。顔をじっと見つめる。常務はそこにいる全員に、部屋から出るように命じた。佐保子だけが広い役員室に残された。

「今から言うことを、落ち着いて聞いて欲しい」

老人は自分で車椅子を佐保子の方へ向けた。

「私は若い時、公的国際援助団体に属していたことがあった」

老人はテーブルの日本茶を一口飲んでから、静かに話し出した。

「その時マンツーマン学資補助制度というのがあった。今でもあると思うが、あまり日本では知られていない。簡単な履歴書と写真で一人の子を選び、その子が高校を出るまで学資を援助するという制度だ。月々僅かな金が私の口座から引かれるようになった。私は難民キャンプにいる、髪の黒い瞳の黒い男の子の写真を選んだ。彼には名前がなかった。よちよち歩きの時には、もう難民キャンプにいたようだ。両親も兄弟姉妹も見つからない子だった。手続きの便宜上、日本人として、立花一郎と私が名付けた」

車椅子が窓の方を向いた。高い階にある役人室は眺めが良かった。佐保子は膝の上に置いた両手を思い切

り強く握った。チーフの名前が出たからである。
「一年に一回、私にとっては僅かな金額だった。途中で中止の手続きを取るのも煩わしくて、そのままになってしまっていた」
常務はゴホンと咳をした。
「私は間もなく帰国して、今のホテル業に移った。何年もして一人の少年から手紙が届いた。全く宛先の書かれていない手紙だった。よく日本国内の私にそれが届いたと思う。世界のＮＰＯを回って回って、それこそ地球を一周して着いた手紙だった」
常務は再び佐保子の方に向いた。目が潤んでいるようだった。
「私の方からも、何とか連絡をとって返事を書いた。その手紙が届いて、青年が数年して訪ねて来た」
「それが立花チーフだったのですね」
「ああ、広い世界の中で二人が会えるなどと言うことは、奇跡だと思った。私は小さなビジネスホテルへの仕事を世話した。初めてあった彼の、保証人になるには少し勇気を要したがね」
誰も知らない立花の若い頃に充分だった。道理で誰も知らないはずだ。
立花は二度目の入院後、すぐに退職届をホテルの人事部へ送ってきたという。そこで処理することではないと判断した部長が、保証人に連絡したと。常務が保証人に印を押していることは、取締役の他は、人事部長のみが知っていることであった。
「あれがここのホテルのＳＳになったことは、風の便りに聞いていた。二人はそれくらいの薄い関係だ」
今立花は全ての治療を拒否しているとのことだった。
「何故か生きることを否定している。面会謝絶をして、全ての人に会うことを拒否しようとしない」
彼女の握りしめた拳が白くなっている。あまりにも強く握っているので、血が通わなくなっているのだ。
「私は癇癪を起して強制的に病室へ押し入った」
誰が止めようとも、老人の目力にはかなわなかった

ことだろう。

「私は世界に一人切りの、赤の他人の肉親の顔を、初めて見た訳だ」

赤の他人の肉親、という妙な言葉が常務の心の全てを表していた。彼からのほんの少しの奨学金で、学校をまともに卒業出来たのだろうか。少なくとも地球上の難民キャンプで、数年間を生きてきたことは確かである。そしてはるばる日本へ幻の父に会いに来たのだ。おそらく戸籍のない男の子が、日本へ来るまでには、相当の波を越えてきたのだろう。

「私は恥じた。なまじ奨学金を送り続けていたが故に、彼を長い間縛り付けていたのかもしれないと」

外では風が出てきた。はるか下の街路樹がかなり揺れている。

「今迄濃く生き続けてきた。だから、もう未練はない」

と言い続ける。生きていく気持ちが全くなくなってしまっている」

時々虚無的な眼差しをする彼なら、いたずらに病院のベッドの上で命を永らえるより、潔く死ぬことを選ぶだろう。

「彼はマンションの鍵を私に渡し、絹本佐保子と言う人に渡して、売るなり住むなり自由に使えと」

どういうことなのだろうか。

「好きな人なのかと問う私に、奴は笑った」

そんなはずはない。佐保子と立花は他人のままである。ほんの数回食事を一緒にしただけである。それも豪華なレストランなどはなく、そこら辺りの定食屋である。彼は食事をしただけで、アパートの前まで送って来て、そのまま帰って行く。一度も自分の部屋へあがったこともなく、佐保子の部屋へあがったこともなかった。そのような関係だけの佐保子に何故立花は、鍵を依頼したのだろうか。

「あれは肯定の笑いだ。何処が好きかと尋ねると、少し考えてから、男女を感じない空気みたいな存在。と答えた」

常務は右の掌で車椅子のひじ掛けを叩いた。一瞬

だったが、暖かい空気が室内に漂った。
「そこで君に頼みがある。何とか彼の気持ちを和らげて欲しい」
佐保子はあまりのことに口が開けなかった。
「私はもう老い先短い。その私より先に彼に死んで欲しくはないのだ」
常務は佐保子に最後の一言を言うと、秘書達に入室を許可した。
「それでは、後はよろしく」
すぐに後ろに控えていた男性が、車椅子の方向を変えて歩き出す。間髪を入れず人事部長以下が最敬礼をして送り出す。ドアが閉まるとそこに残った者達の緊張が、一気に解けたようだった。部長が彼女に告げた。
「では、そういうことで、本日付けをもって、長期療養と言うことで」
納得出来た。解雇通告だ。慣れていた。彼女は何度も、こういう場面に出会ってきた。
意地悪や噂話や無視など、今までに何度も受けてきた。ほとんどが一方的に首を切られたが、中には自分の方から辞めざるを得ない状況に、追い込まれたこともあった。今回もそうである。否も応もない。出社に及ばずと厳命されたのだから、もう明日から出る必要はない。役員室を出てエレベーターに乗る前に、係長が追いかけてきた。
「とにかくお前は、明日は立花チーフの病室へ行ってくれ。上田常務と部長との間で、話がそのようについたのだとさ」
「ついたとは？」
「雲の上のことは、俺にもさっぱり分からん。俺の立場としては、お前に辞められると困るのだが、常務命令なら致し方なしだ。必ず戻って来てくれよ」

五月十七日

今立花は軽い寝息を立てている。先程まで歯を食い

しばって痛さに耐えていた。点滴へ入れてもらった鎮痛剤が効いて来たのであろう。佐保子はほんの少しの音も立てることのないように身じろぎもしない。

初めて彼を見舞いに行った時のことを想い出してみる。立花は個室にいた。面会謝絶を無視して中へ入る。点滴がゆっくり落ちる音が聞こえる静かさの中で、彼はしっかり眼を瞑っていたが、寝ている訳ではなかったらしく、ドアが開く僅かな音で、その瞳を開けた。一か月の間に、彼の眼は大きくなっていた。顔全体が小さくなったので、目が異常に大きく思える。立花が笑顔を返してくれたら、佐保子も笑い返すことが出来たことだろう。だが彼は太い眉毛を吊り上げたような顔で、佐保子を睨んだ。睨み返してみる。立花も目を離さなかったが、とうとう佐保子の方が勝った。

「何しに来た？」

「お見舞に決まっているではありませんか」

「ふん、治る見込みのない病人を見舞に来たのか」

昨日から腑に落ちないことばかりが、佐保子の周りで起こっている。病院へ行くと、担当医とケースワーカーとが、佐保子を相談室で待ち構えていた。彼は今救急病棟から普通病棟にいる。精密検査の結果、スキルス性全身ガンで手術は既に遅過ぎる。この件はこの前に運ばれた時に本人告知してあった。今回も手術はもちろんすべてのガン治療を拒否して、退院する希望であるという。寛解にも当たらない病人を追い出すことは出来ない。転院してもらいたいのだが……。要約すると担当医の話は意外な内容だった。知らなかった。佐保子の関知しない処で、物事が進んでいた。

立花はそれっきり佐保子を無視して口を開かない。都会の真ん中でも、病室の窓から澄んだ青空が見えた。

「私、昨日付で仕事を首になりました」

掛け布団から立花が眼だけを出した。

「今日はその責任を取ってもらいに来ました」

彼が声を出さずに笑った。佐保子も少し微笑んだ。

「チーフがもう一度ＶＩＰ・ＳＳで働けるようになるまで、私がお世話します」

窓から差し込む日差しが眩しい。
「退職金は頂けないそうです。だから今日からチーフの付き添いをして、生活費を稼ぐことにしました」
「退職届を出したから、俺も今は無職だ」
点滴の管を邪魔だと言わんばかりに片方へ寄せながら、彼は細い声を出す。
「昨日常務がいらっしゃって、お言伝を託されました。私より決して先に死ぬな、と」
立花の身体が一瞬宙に浮いたような気がした。それほど彼は驚いた様子だった。二人の間に沈黙が落ちた。
「そうか、常務に会って話をしたのか。それで急に、自信たっぷりの顔で見舞に来たんだな」
「常務は車椅子でした。入院先から来たと仰っていました。お話になるのも大儀そうでした」
今夜から佐保子が付き添う手続きをした。それを立花は許さなかった。
「誰が何といおうと、私は今日からチーフに付き添います」
佐保子も頑固だった。一歩も譲らなかった。今夜から眠られない夜がまた始まる。救急病棟とは違って内科病棟のせいか、静かな夜が更けていく。
その夜立花が自殺を図った。身勝手な男のやる事だった。佐保子が眠れないながらも、昨日からの目まぐるしい展開に、うとうとした時だった。窓が開いたような気がした。夢の中だろうと思った。だが次の瞬間何かが頭の中で炸裂した。低血圧の彼女が瞬時に、起き上がることなど考えられなかった。にもかかわらず身体を起こした。冷たい風が部屋の中へ入って来ていた。窓枠に登ろうとしている人間がいた。人はとっさの時には声が出ない。彼女が掠れた声をやっと出した時には、立花は既に窓によじ登っていた。
「私を独り残さないで、お願い」
金切り声でもなかったし、大声でもなかった。むしろ極端に押し殺した低い声だった。立花が不安定な格好で振り返った。
「お願いです。口紅を付ける間待って下さい」

どうしてそのような言葉が出たのだろうか。付添い用の簡易ベッドから飛び降りて、立花の身体を抑える時間がないことを一瞬にして悟り、飛び降りようとしている男の意志を、ぐらつかせる言葉が出た、とっさの事だった。立花の自殺を本当に止めたかったのだろうか。そうはっきり断言出来なかった。本当は一緒に飛び降りるつもりだったのかもしれない。両手を立花の腕の脇から思い切り強く突っ込み、彼の病衣の前で組み合わせた両手の一本一本の指を、たとえどんなことがあっても、決して解かない強い意志が含まれていた。

「一緒に死にましょう」

立花は飛び降りなかった。彼が飛べば、背中にしっかりと張り付いている佐保子も、同時に落ちる。この高さからなら二人とも即死だろう。細い桟の上で男の身体が凍り付いていた。彼の意志が一瞬鈍ったのを感じ取ると、佐保子は力いっぱい彼の身体を引き戻した。脆くも病人の身体は内側へ転げ落ち、二人とも派手に転倒した。その姿勢のまま佐保子は嗚咽し、立花は肩を震わせていた。どの位の間二人はそうしていたのだろうか。彼が身を捩って佐保子の方を向いた。病室の冷たい床で二人はしっかりと初めて抱き合った。

「約束する。二度と自分の命を縮めるようなことはしない。さあ、窓を閉めよう」

翌朝、立花はナースからお目玉を食らった。熱が上がっていた。絶対安静の患者が、身体も心も重労働をしたのである。当然であったろう。その夜、佐保子は立花の左手首と、自分の右手首を長い紐で結んだ。立花は苦笑いをしながら、手首に巻かれた紐を見た。

「そんなに俺が信用出来ないのか」

「私自身が、です。何をするか分かりませんから」

見舞いの花箱が包んであったビニールの紫色の紐で、二人はその夜から結ばれた。頼りない細い紐であったが、それによって二人の心はしっかりと結ばれた。立花の症状は快方に向かうことはなかった。個室での長い夜の話は身の上話になる。けれども立花は決して自

分の過去を話すことはなかった。彼はベッドの中で静かに聞いているだけだった。彼女の方が、一方的に自分の過去を話した。佐保子の父は精神に異常をきたして入退院を繰り返した。母はそれを苦にして自殺した。兄は冬のある日失踪した。幼い頃から内に閉じこもる性格だった。北海道稚内駅の旅行者用伝言板に、兄の名前で「北へ行く」と書いてあった、と捜索願を出していた警察から教えられた。父方の祖父は相当奇行の持ち主であったらしい。その祖父と祖母から生まれた、父の兄弟二人ともが自殺していた。佐保子は自分の暗い過去を知られたくなくて、生まれ故郷を飛び出して都会へ出た。小さな工務店に勤めた。そこで得意先の男に見初められて、先方の親の反対を押し切ってまで結婚した。幸せになれると信じていた。妊娠した。その頃から、佐保子の体に異常が現れ始めた。妊娠うつ病と診断された。もと友人も多くなく、陽気な性格でもなかった。舅姑との不仲。夫の無理解。そのような妊娠後期には浮腫がひどくて歩けなくなった。子供は死産だった。離婚した。

佐保子は天涯孤独になった。寂し過ぎてフェリーの船上から飛び込んだ。だが女の一人旅を訝っていた船員によって助けられた。

「俺の過去に比べれば、君の過去はたいしたことはない」

立花が口角を上げた。声を出さない寂しい笑いだった。彼も天涯孤独なのであろう。いつも社会を斜めに見ている目元をしている。二人の目が合った。優しい目を立花が一瞬した。その後、瞳の色が変化した。地獄の底へ引き込むような強い目の色だった。佐保子は気が付かない振りをした。

「鉄格子の病院を退院したその日に、薬を飲みました。その時も死ねませんでした」

胃洗浄をされた苦しさは今でもよく覚えている。薄れた意識の中で佐保子は『神にも見放された』と思った。過去を知る人のいない見知らぬ土地なら、たとえ傷ついた心身でも生きていけるかもしれない。死ぬこ

とも出来ない女は、都会の片隅でひっそりと生きるしかなかった。しかし女が都会の片隅で生きていくには、寂し過ぎた。いたずらに神経が尖っていった。病気の再発で、せっかく見つけた小さな店のお針子の仕事を失った。目にも異常が現れた。眼科では老化現象と言われたが、そういわれる年でもまだなかった。目の中に絶えず黒い短い物がふわふわと浮かんでいる。睡眠不足が続くとそれは顕著に増え、ムカデのように眼の中をモゾモゾと動き回る。本当に目の中に何かが存在するのではない。心因性の現象なのだ。佐保子のカルテには「心因性」という言葉が付いた。医者はそれを付けることによって、積極的に治療方法を指示しない。それは、治療方法はないということである。佐保子自身も、大きな総合病院へ行って治療すると通うほど、自分が惨めになるだけだった。死ぬことも生きることも出来ない女が、都会の隅で彷徨った。行き倒れのような状態で、歩道橋から転げ落ちた。もしかしたらそうなるように、意識して踏み外したのかもしれなかった。転がり落ちながら佐保子はこれで死ねる、と思った。もしかしたら彼女はあの時、微笑みながら転げ落ちて行ったのかもしれない。死ねなかった。神はひたすら佐保子を生かすために「死」から遠ざけていた。退院してから小さな内科医院を見つけた。睡眠薬が欲しくてその医院へ行った。期待もせずに佐保子は初診表に書き込んだ。夫婦でのんびりと開業しているような、看板も剥げた本当に小さな医院だった。

「あのなあ、長い一生幸せに生きようと思うから疲れるんだ。高い山へ登ればその反作用で、かならず今度は深い谷がある」

医師は彼女の病歴を見て、呆れたように第一声を発した。今までの白衣の医師と全く違った口調だった。それから佐保子はどの病院も通うのを辞めて、そこだけで薬をもらうようになった。佐保子の病気は薬で治すものではなく、心の安定を図って治すべきだとその医師は考えていた。

五月十八日

病室にいると時間の流れが単純なので一日が遅い。

立花は昼夜逆の現象が起きて、陽のあるうちはうとうとしている。そのかわり夜になって消灯時間が過ぎても、眠れないらしく寝返りを打とうとする。一度にくるりと向く力がなくなっているから、自然と佐保子が手伝うことになる。毎夜、佐保子の方が一方的に身の上話をする結果となる。

「私の過去を聞いてびっくりなさったでしょう」

点滴の音のみ聞こえる静かな病室で、とつとつと語る佐保子の声だけが、壁にぶつかって立花の耳に届く。彼には聞こえているはずであるが、あまり返事はない。彼は天井を見つめたまま、静かさの中にいる。風が立ってきたのか、林の中の木の擦れ合う音が時々聞こえる。その中で佐保子は、ここへ転院してくるまでのことを思い出してみる。立花の日毎の病状変化で、落ち着かない日々を過ごしていた佐保子だった。

ベテランのナースが佐保子に向かって言った。

「あまり張り切り過ぎはいけませんよ。これからが、長い介護になるんですからね」

立花は痛そうに点滴の針を替えられながら、

「長くはないさ。直ぐに終わる」

と抗った。もう一人の若いナースが、

「ほらまた。あなたは素直な患者さんではないのが、一番いけません」

明るいナース達の言葉は一刻でも病室内が和む。転院先を探そうと努力していたものの、末期患者を受け入れる病院が見つからなかった。終末医療専門の、この森の中の病院に決まるまでに、一か月を使ってしまった。今はもう、何年生きられるかではなく、何か月になった。否、ひょっとしたら何日になるかもしれない。長い一日の間にほんの少しではあるが、立花との会話が成立する。

「チーフは何故、結婚しなかったのですか」

何の話をしていた時だったか、ふっと佐保子が尋ね

た。立花の過去を知ろうとしても、彼はなかなか話に乗ってこなかった。

五月十九日

足早に廊下を走る音が聞こえた。深夜の足音は不気味である。早く歩くほど、病室内の者を不安にする。また今夜も危篤の患者が出たのであろうか。もう立花の心は佐保子から離れていくかもしれない。彼女に病院への入院経験があり、しかも何度もの自殺未遂である。だが彼は自ら命を絶たないことを約束してくれ、こうして緩和ケア病院へ移ることが出来たのだから。もし今本気で「帰れ」と言われても仕方がない。二人はあくまで他人なのである。

「私は納得したのです。自殺をして死ねなかった者は、まだ神様がお呼びになるものか」

「神なんてこの世にいらなければ生きてゆけません」

「います。いると思わなければ生きてゆけません」

「俺はたった一人で生きてきた。もし神がいれば、俺は何故両親に捨てられた？」

それはあまりにも捨て鉢ないい方だった。

「何処かに生きておられるかもしれません。この世の中、好んで子供を捨てる親はいません」

「両親の顔も名前も、自分の誕生日も、本当の年が幾つさえ分からない男さ。俺自身、日本人なのかさえも解らないんだぞ」

彼の乾いて荒れた唇を濡れたガーゼで湿らす。

「君の過去など、俺の過去に比べれば、たいしたことはない。俺は人を好きになったことがない」

最後の言葉の意味が佐保子には解らなかった。

「難民キャンプは弱肉強食の世界だ。食べるためには何でもやった。男か女かそんなことは二の次だ。まず生きる。それだけだ」

翌日は雨の一日だった。

「何処の難民キャンプにいらしたんですか」

「自分の名前も分からないうちに、親と離れた子供が生きて行く、ってどういうことか分かるか」

佐保子だって明日食べるものがなかったことがある。キャベツ一個で数日を耐え忍んだことがある。

「両親はもしかしたら、眼前で殺されたのかもしれないが、俺は何も覚えていない」

「人間あまり悲しいことがあると、その時のことを忘れようとするものです」

ベッドの脇に腰を下ろして立花の腕をさする。ホテルの廊下で袖をまくり上げて大股で歩きながら、スタッフにきびきびと、指示を与えている彼の面影はない。あの頃の筋肉質の腕を思い出す。

「拾ったナイフで年下の子を脅して食物を奪った。たった一切れのカビの生えたパンを、だ」

彼は遠くを見るような柔らかい眼差しに、一瞬なる。

「何処かの誰かの奇特な人が、名前を与えてくれて、小学校へ入れてくれた。随分大きくなってからだ」

「それが上田常務さんだったのですね」

今度は足をさすった。浮腫の浮かんだ足首が太くなっている。ホテルで難なく軽々とテーブルを飛び越えていたあの足だ。

「その時は、何処の誰とも知らない立花がフフンと鼻の上へ笑いを乗せた

「高校まで勉強して、その後日本へいらしたの」

「そんなに上手くいくものか。幾つになっても生きるか死ぬかだ」

「ずっと難民キャンプに？」

「何でもしたさ。かっぱらいに、恐喝に、人殺し。パン一欠片のために」

佐保子の手が止まった。あまり冷たい目の色だ。のけるには、恐ろしい言葉だった。

「俺が怖くなったか？」

時折見せた彼の鋭い目つきを思い出す。あの目なら人が殺せたかもしれない。氷柱よ。あの目は

「まだ小学校へ行っている時だ。先生は俺の手に食べ物を渡すと、俺の着ていたぼろぼろの布を下ろした。身体は普通の子より大きかった。大人たちがやっている行為は何となく解っていた」

思い切りナイフで背中を刺した。何度も刺した。女性教師は転がったまま動かなくなった、と立花は声を荒げることもなく、淡々と佐保子に言った。

「まだ子供の俺は、男の餌食にもなった」

村から街へ、町から山へ……。長い放浪の旅の間に、何人かと戦った。俺にとっては全て戦いだった。

「男も女も、だ。人間は獣になる。獣は殺した」

彼女は耐え切れずにベッドから離れた。ポットで茶の用意をする。

「何処かの海岸で密航した。見つかって海へ放り投げられた」

身体の後ろへ枕をかわせてから、湯飲みを渡す。

「船中の者が溺れる俺を見て大笑いしていた。連中は本当に俺を水葬にする気はなかったらしく、気が付くと倉庫に放り込まれていた。次の港へ着くまで毎夜男が来た。不条理に男が男を犯すのさ」

五月二十一日

翌日も雨だった。しとしとても気を滅入らせる。時々立花の口から声が漏れる。痛さを我慢している声だ。がん細胞は、彼の身体中を縦横無尽に走り回っている。

「好きな人はいなかったのですか」

彼が苦痛と苦痛の間に声を立てて笑った。

「君に手を出さなかったから、女に興味がないと思ったか。それとも男色か」

ふっと痛さが引く時があるらしい。佐保子は茶化すように言った。

「じゃ、立花さんは五番目のアルファベット?」

「好きにならなくたって、男と女のすることは出来るさ。だからそれとは違うな」

立花がムキになって否定するのが、佐保子にとっては却ってすっと息が出来た。今、命が尽きるかもしれないのに、二人は男と女の話をしている。

「男と女なんて、総ておぞましいだけだ」

唇が歪むのは心の痛さだ。

「君の仕事をしている後姿を見た時、男とか女とか、そんなものは超越している感じがした」
「それで常務さんに、私のことを空気みたいな存在、と仰ったのね」

五月三十日

夜明け、立花の様子が急変した。手首と手首を繋いでいた紫の紐が強く引っ張られて、佐保子は浅い眠りから覚めた。立花が両手を空中に伸ばして、何かをしきりに掴もうとしている。短い言葉を叫んでいる。だが佐保子には何を叫んでいるのか分からない。ナースコールですぐに看護師が来た。そして医師が来た。
「集中治療室へ移動します」
佐保子と立花を結んでいた紫の紐は、看護師が切った。集中治療室に佐保子の居場所はなかった。何もすることもなかった。医師と看護師の間から、邪魔にならないように立花の様子を、ただ見続けるだけだった。思考が宙に浮いて空間を頼りなげに浮遊している。全てのことがここでは、佐保子に関係なく動いているようであった。
夕方になって少し立花の様子が落ち着いたらしく、佐保子は院長に自室へ戻って休むように言われた。指示通り病室へ戻っても、佐保子には何もやることがなかった。横になって少しでも眠ろうと努力するが、神経が研ぎ澄まされるばかりで、どうしても眠りに入っていけない。窓の外は今日も雨になっているらしく、雨粒が窓ガラスを打つ音がする。廊下に足音がするたびに、耳が立つ。瞼が痙攣する。唇が震える。
とうとう夜が明けた。一睡も出来なかった。明るくなるともう我慢が出来ずに、ＩＣＵへ行った。ガラスの向こうは静かだった。医師の姿はなく、多くの機械が動いている。その間を縫うようにナースが動いている。病室担当の看護師ではないのだろうが、全員が大きな帽子とマスク姿のため区別出来ない。立花は両腕から点滴をされ、胸元からチューブが入っている。息

をしている証拠が機械の画面で確認出来る。
「手を洗って白衣を着て入室して下さい。患者さん抵抗力が弱っていますから、触れないで下さいね」
眼だけ出した看護師が、瞬きをしないでそう言う。そんなに悪いのだろうか。僅か数時間で立花の様子は著しく変化している。だがきっとこの数時間で変化しているのだろう。機械に埋もれている立花にそっと呼び掛けてみる。患者は反応を示さない。看護師の顔を見上げる。
「大丈夫ですよ。人はそんなに簡単に神に召されませんよ。人間は悪いことを沢山しているから、それを一つ一つ消してからでないと、幸せにはなれないのよ」
立花のした「悪いこと」を考える。彼は一体幾つの悪をしてきたのだろうか。看護師が言うのが本当なら、その数が多ければ多いほど、人は長く生きていられることになる。
「だったらこの人、随分悪いことをして来ているから、滅多に死なないわね」
佐保子は思い切り明るく言った。そして笑おうとしたが笑えず、頬が痙攣しただけであった。
午後になって院長から呼び出しがあった。
「成すべきこと致します。全力を尽くします」
「ありがとうございます。でも彼自身が長く生きることを欲していませんので」
「もし会わせる方がおられるのなら、今のうちにご連絡をお取り下さい」
「二人とも身寄りはありませんので」
ＩＣＵへ戻った。立花が眼を開いていた。出来るだけ笑顔で明るく意識して微笑んだ。だが立花は、笑い返してくることはなかった。輸血用のチューブが取り外され、新しいものと取り換えられる。冷たい輸血用血液が立花の身体へ入っていく。腕に触る。冷たい輸液がどんどん入っていくのに、彼の腕は暖かかった。点滴液が漏れたのか、紫色に腫れ上がっている。指の先はもう冷たい。
「もうモルヒネを入れましょう。きっとかなりの痛さ

を堪えておられるはずです」
来るべき時が来たのだ。彼はここへ転院した時、治療法について、担当医師と院長とで打ち合わせた時、痛み止めを最少にしてと欲しいと頼んだ。
「どんなに痛くても、麻酔で意識がなくならずに、最後まで佐保子の顔が解っていたいから」
と言った。だから今まで痛み止めは少しにしていた。
「まもなく昏睡状態になります」
無表情に医師が告げる。無表情であるがゆえに、現状がいかに、切迫している状態であるか理解出来た。
「今のうちに声を掛けてあげて下さい」
立花は眼を開けている。それが宙に泳ぐ。
「もっと大きな声で」
ふっと彼の目が止まる。佐保子の顔が解ったのだろうか。
「ここにいます。私はここにいます」
指先に力を込めて立花の腕を握る。立花が何か言ったように思えた。
「何ですか。私に何か言いたいのですか」
血圧を担当していた看護師が叫んだ。
「急速に血圧降下しています」
「心拍数減少」
他の看護師が報告する。口で言わなくても、機械が正確に立花の様子を映し出している。師長が彼の酸素呼吸器の器具をずらし、耳元で叫ぶ。
「立花さん、しっかりするのよ」
師長の声がＩＣＵ中に響く。立花の口が動く。何かを必死に伝えているかのような口元に、佐保子が耳を寄せる。
「佐保子はここにいます。何？」
（死ぬな。生きるんだぞ）
確かにそう聞こえた。二人は誰もが認めている夫婦である。しかし実際は夫婦ではなかった。籍も入っていないし、一緒に暮らしたことさえない。否、どの夫婦よりも深く、今結ばれたような気が佐保子はした。
夜中を過ぎても、スタッフの交代はなかった。皆が

立花のために戦って
「心停止ッです」
青い画面の中の白
えた。佐保子はなん
にそれを眺めていた
気がしていた。今そ
らない叫びが、佐保
「離れてください。
担当医が靴を脱い
は人の群れに押し出
ハッハッと規則正し
す。心肺蘇生を試み
寒かった。佐保子
いられなくて開いた
い声が漏れる。叫び
ように思う。思うこ
反射を確かめた。立
「人工呼吸を止めま

ひっそりと部屋の隅にいる佐保子に、白髪の院長が厳粛に伝えた。過去に何度も立花の死を告げられる瞬間を、佐保子は想像した。今それが現実となった。どんなにそれを恐れていたことか。恐れながらもいつかその日が来ることを、充分に承知していた。ゆっくりと立ち上がり、院長に向けて丁寧に頭を下げた。そしてすべての者に向かって、深く頭を垂れた。万感の思いを込めて礼の言葉を口にした。

「ありがとうございました」

立花に付けられていた全ての物が取り払われた。点滴チューブも、酸素マスクも、様々な器具も、全ての束縛から彼は解き放たれた。ようやく自由の身になった。だがもう動くことは出来ない。

終章

二人の付き合いは、去年の正月行事が終わった頃だった。二年に満たなかった。上司の強引な誘いを断り切れないで困っていた佐保子に、機転を効かして立

花が助けてくれたことから、口を聞くようになった。あれからあまりにも色々なことがあった。セレモニースタッフの立花ＳＳ・チーフと、衣装部の陰のスタッフに過ぎない、佐保子の間はすぐに噂になった。噂は大きくなるばかりで、立花はさぞ辟易していたことであろう。佐保子は、火のない所から出た煙は、すぐに消えるだろうと思っていた。

立花が二度倒れた。二度目は退院出来なかった。相当前から症状が出ていたのを、自分で気が付いていたのであろう。

長い間一人で生きてきた佐保子には、立花との一年は、何十年にも値するような重い空気の中にいた。太く短く生きて来た立花の一生も、佐保子のように孤独であったかもしれない。彼もまた都会の巨大ホテルという中で、誰にも知られることのない、暗い重い過去を背負って、生きて来ていたのだ。それぞれの過去が共通することもなく生きてきた二人が、ホテルのスタッフとして出会った。目では見ることの出来ない何かが、二人を引き寄せたのだろうか。

今も佐保子は地下の窓のない衣装保管庫で仕事をしている。あれから何十年になるのだろうか。

立花の最後の言葉は「死ぬな、生きろ」だった。それを守って苦しみながらも、ずっと生きてきた。立花が亡くなり、少したって常務も亡くなった。もうホテルの地下室へ通うことはないと思っていたが、主任や仲間に強く薦められて、また通い出した時、ＳＳチーフは既に他の人の名前になっていた。立花のことはスタッフの口に登ることはなく、誰の噂にもならず毎日が、何もなかったように過ぎて行った。彼はホテルのスタッフとして、ピンと背を張り颯爽と歩き、そしてあっという間に消えた。彼は誰にも言えぬ人間としての大きな重荷を抱えていたが、一切その表情を変えることなく、ひたすら仕事に生きてきた理由は、底知れぬおぞましい性への思いがあった。幼い時に凌辱

を受け、それからも幾度か同じようなことがあったことが、彼を人間不信に陥らせ、人を愛するということが出来なかったのだ。佐保子と巡り合ったことで、それが少しでも救われたのかもしれない。

それから何十年も地下室で、衣装を相手に息をするとは思ってもみなかった。

あと数か月で、今度は正式の退社になる。定年退社である。衣装部の生き字引として、ここでの数十年間は幸せだった。発作は何度も出たし、薬とも縁は切れなかった。それでも長く生きられた。佐保子の定年を皆が惜しんでくれている。立花と共有した精神的な、濃密な一年があったからこそ、こうして生きてこられた。

天井の蛍光灯の光が薄くなったように思える。頭が錐で刺されるように痛い。普段の発作ではなかった。佐保子はゆっくりと前へ顔を伏せた。

―了―

まだ見ぬ「むらさき桜」を想う

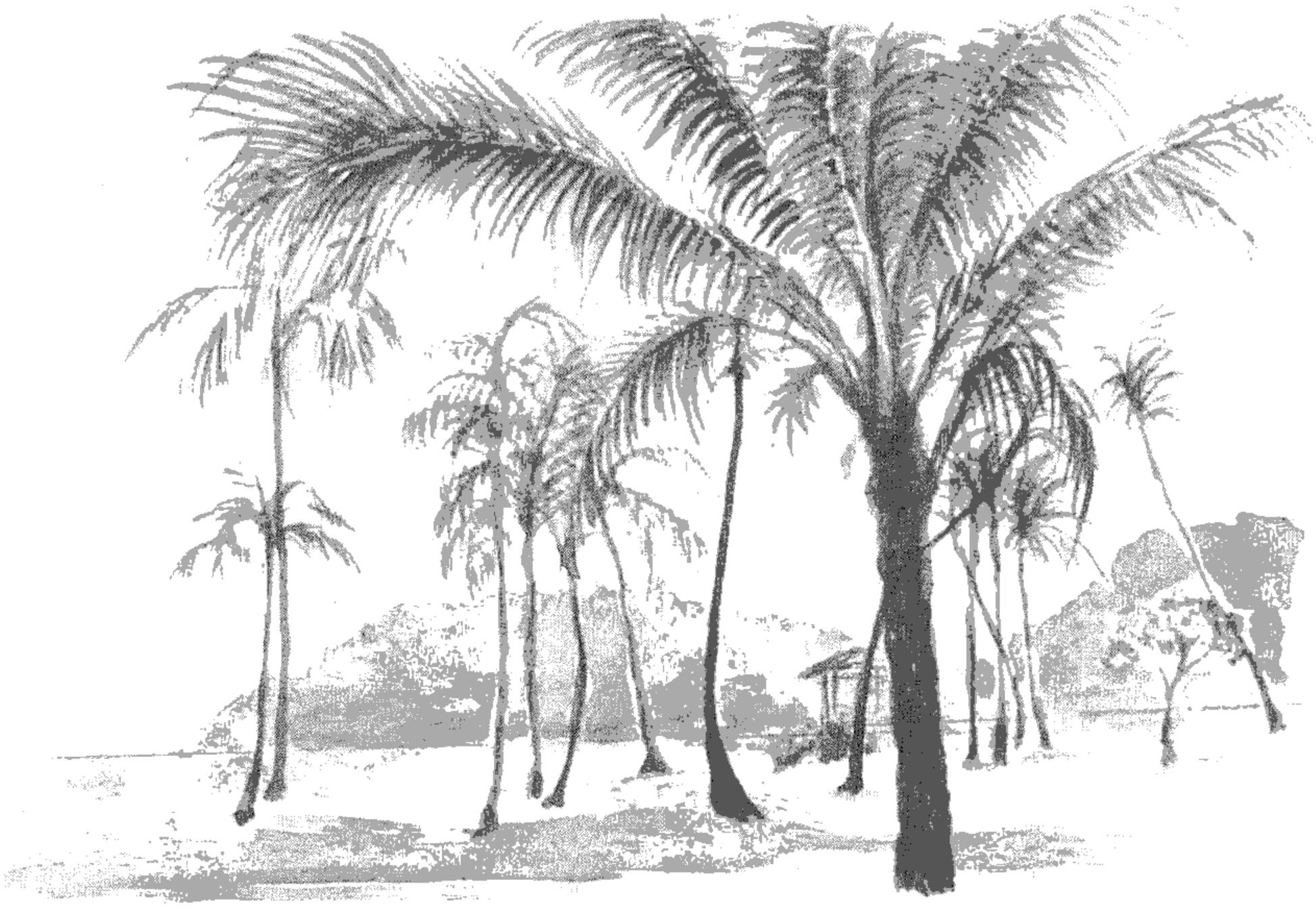
桜の原種は十一種類。それから分かれて今では三八〇種以上もあるという。その全てに名前がついている。名前はＤＮＡで分ける方法や、形・色・開花地などで分ける方法などがある。たとえば、里桜、大島桜、染井吉野はＤＮＡ区分であり、三春滝桜・根尾薄墨桜・石割桜などはその色、地名から名付けられている。

今回「桜花を食べる男」という設定で書き始めた時、タイトルがなかなか決まらなかった。色にするなら紫なのだが……。紫色の桜など都合よく実際にはないだろうなぁ、と思いながら調べ始める。すると存在した。東京荒川堤に毎年咲くという。

数年前なら取材に飛んで行ったであろうが、今の私には無理で『幻の桜』である。

いつの日にか、咲き競うむらさき桜を間近で見上げて、この作品を苦労して書いた頃のことを、懐かしく想い出せるだろうか。

（しのぶ）



関帝廟

白井　康

西暦一四九八年にコロンブスが第三次の探検航海でこの島を発見し、アリポ山と二つの火山を、キリスト教の三位一体に因んで島の名をホーリー・トリニティとしたが、この島を統治したスペイン人が、トリニダード島と改めて名付けた。福岡県より少しだけ小さな島だ。十六世紀にスペインの植民地になったが、十八世紀にイギリス領となり、二十世紀に独立国となった。公用語はスペイン語から英語に変わった。

鈴木孝治がこの島にきて早くも三か月が過ぎた。

此処の暮らしと言葉にも少しは慣れた。

「こうじ、起きて」

雨桐（ユートン）の大きな声が聞こえた。孝治が世話になっている中華料理店のオーナーの娘だ。首都のポート・オブ・スペインの有名な老舗の中華料理店だ。中国系の人々は華人と称されている。孝治が三か月前にトリニダード島の空港に着いた時は雨桐が迎えにきてくれた。

飛行機が此の地の空港に着いた時は心細かった。誰も迎えに来ていなかったら、、警察に頼んで店まで連れて行って貰うか。もし、店の人に知らぬといわれたらどうしよう。帰りの旅費は、何処で工面すればよいのか。英語は空港内の案内がわかる程度だ。詳しい会話は無理だ。孝治の後先を考えぬ悪い癖がでた。荷物を持って出口に急ぐとプラカードを持った綺麗な娘さんが待っていた。

「こうじ」

と娘さんが呼んだ。あの時は嬉しかった。思わず手を振った。娘さんは雨桐と自己紹介した。美人でスタイルがいい。なぜか顔に憂いがあった。

空港から中華料理店までは一時間ほどだった。町並みは薄汚れ、破れた塀が続き雑草が生い茂っていた。

通りを歩いている人々の表情がどこか暗かった。小さな子供が元気に走り回っている。ようやく孝治の顔に笑みが浮かんだ。

「どう、この町は」

雨桐が運転しながら、聞いてきたが、

「よく、わからない」

と応ずるのが精いっぱいだった。

急いで身支度をし階段を降りて厨房に入った。オーナーの王さんが大きな中華包丁で鶏をぶつ切りにしている。見事な包丁捌きだ。孝治はまだそこまではできない。小さな包丁で、まこも茸を切り揃えた。

白いワンピースに前掛けをした雨桐が傍に寄ってきて囁いた。

「今夜は予約で満席よ」
「本当か」
孝治は餃子に使うまこも茸を微塵切りにすると、厨房の壁に白い黒板があって料理が書かれている。きょうの献立だ。孝治は料理に使う野菜を思い浮かべた。
王さんが刻んでいる鶏肉は回鍋肉で使うものだ。豚肉ではなく鶏肉を使うと、さっぱりと仕上がって人気があった。キャベツとピーマンが添え物の野菜だ。切り揃えてアルミのトレイに盛った。王さんが肉を刻みながらにやっと笑った。八宝菜もあった。白菜、青梗菜と人参に椎茸だ。素早く切り揃え、別のトレイに並べた。あとは麻婆豆腐だ。青葱を微塵切りにし、葉にんにくを、削ぎ切りにしてトレイを一杯にした。
「こうじ、もう充分だ。あとは夜だ」
王さんが孝治に声をかけた。
十月は雨期の最盛期だ。大きな雨粒が道に叩きつけられている。まるで日本の夏の夕立だ。これで少しは涼しくなる。朝のうちに仕込みを終えて、昼からは休むのが此処の習いだ。午睡の習慣がない孝治にとって珍しい習慣だ。オーナーは王天佑さんだが、電話のやりとりや、店内の段取りは雨桐が仕切っている。
忙しい雨桐だが、一人では決して外出しなかった。いつも王さんが一緒だ。母親は体調が悪いのか、店と厨房がある一階にはほとんど降りてこない。孝治はまだ一度しか会ったことがない。優しそうな顔つきだが、辛そうな表情をしていた。三階が王さん夫婦の部屋である。店の様子がわかるにつれて、孝治に疑問が生じた。厨房の手伝いなら、この国の人を雇えばいい。孝治を雇った理由がわからなかった。
高校の三年間は孝治にとって大学に合格するための準備期間に過ぎなかった。両親は高卒で父親は愛知県の市役所に勤めているが、学歴がなくて苦労したらしい。総務部で課長に就いた時は嬉しそうだった。酒を飲まぬ父親が、缶ビールの一缶で、顔を真っ赤にして

同期の出世頭だと三人の子供の前で自慢した。

二人の実家も財産があるわけではない。庶民だ。母親はかえって世間体を気にしていた。生活が楽ではなければ、子供も大きくなっているから、働きに出ればいいのに、親戚や隣近所の陰口を気にし、働きにでなかった。弟と妹も大学に行くと、その費用も馬鹿にならない。蓄えがあるとは思えなかった。いったいどうするつもりだ。

実家の祖父は、自治会の役付で、小さいことに拘らず、もめ事があってもてきぱきと片づけて、他の役付きの人から一目おかれていた。孝治はこの祖父が好きだ。だが、母親は祖父を嫌っていた。実家にこれといった財産がなかったからだ。母親と父親の喧嘩はいつもこのことが根元にあった。

祖父は元気だったが、病になったら、「誰が世話をするのよ」と母親は愚痴って父親を困らせていた。

父親は大学の受験がわからず、孝治が進学塾に行くことも許さなかった。大学入試センター試験が、どのようなものか考えもしなかった。

学歴がなくて苦労した父親は、

「大学だけは行けよ」

とうるさかったが、現実のことになると、公立か国立ならば許すと趣旨を変えた。

孝治の顔を見れば、

「勉強しろよ」

と言った。孝治が大学の入試に失敗すれば、親の言うことを聞かずに勉強を怠った、とするのか。孝治は父親のいい加減さが嫌いだった。大学入試センター試験の数学で、孝治は三角関数に山を張った。これが見事に的中した。運がよかった。二次試験は自慢できるできではなかったが、数学の点数に助けられた。これで愛知県の国立に合格できた。憧れた大学の授業は面白くなかった。教授と称する老人が古くさい教科書を読むだけで、参考の書籍も最新のものではない。はっきりいって時代遅れだ。なぜか休講も多かった。大学に行くのが嫌になった。孝治は親に黙って居酒屋や建

築現場のアルバイトに励んだ。三ヶ月もアルバイトをすれば、海外旅行に行けるほどの資金が貯まった。

孝治は地図を見ながら考えた。カリブ海にトリニダードという島があった。小学生の頃、教会の日曜学校に通った。トリニィということばに惹かれた。三位一体だ。『トリニダード』と名付けられた島に興味をもった。この島のレストランやホテルを大学の図書館で調べて、

「雇ってください」

と片っ端から手紙を書いた。我ながら無茶だと思った。向こう見ずな性格がもろにでた。

中華料理店から、

「雇ってあげる」

と返事がきたときは嬉しいより驚いた。後のことは何も考えていなかった。旅費を調べてみたが、アルバイトで稼いだ蓄えで何とかなった。大学は休学する。後は両親を説得するだけだ。母親を説得するのは始めから諦めていた。孝治は母親の考えがよくわかっていた。大過なく、大学を卒業して大企業に就職し、家に仕送りをすれば、親戚に自慢ができる。母親の望みはそれだけだ。父親は金のかかることは反対するが、それ以外のことは考えるのが面倒なのか、深く考えなかった。孝治は父親のその癖に乗ずるつもりだ。

三日ほど考えて父親に相談した。

話を聞いて父親は言った。

「大学はどうするつもりだ」

ありきたりの質問だ。言い訳をぐだぐだ言えば、

「止めとけ」と、言うだろう。はっきり意思を告げることが必要だ。

「休学します」

孝治は言い切った。

「旅費はだせぬ。おまえは早生まれか」

「はい」

父親は思ったより簡単に許した。母親が怒ったが、大学の受験で、父親はひとつも親らしいことをしなかった。後ろめたさがあるかもしれない。孝治が何度

も頼んだのに、許さなかった進学塾に、弟と妹は通っている。

十月に入ると忙しくなった。

王さん一人では手が足りない。孝治も店に出す料理を任された。まずは麻婆豆腐だ。孝治は王さんの麻婆豆腐の調理をじっくり観察していた。

豆腐は二センチ角に切り揃え、鍋の湯が沸騰すれば五分ほど茹でて皿に取り出しておく。大きめのフライパンに油を引いて、長ネギと湯通した豆腐を中火で炒め、香りが匂ってきたら、豚の挽肉を混ぜて炒める。豆腐の形が崩れないように注意し、形が崩れれば、作り直すつもりで集中した。雨桐が心配そうに厨房を覗いていたが、孝治が集中し調理しているので何も言わなかった。豚の肉の色が変わったら、鶏ガラスープに唐辛子で辛みを加えた。水分が三分の一ほどになったら、強火で熱を加えた。水分が三分火でとろみがつくまで溶かした片栗粉を加えて中熱した。

できあがった。

王さんに味見を頼むと、

「旨い」

と王さんが合格点をつけた。

雨桐も嬉しそうに客のテーブルに直ぐ運んだ。

最後の客が帰った後で王さんが二人に告げた。

「明日の昼から関羽の祭りだ。店は休みだ。雨桐よ、孝治に関羽のことを教えてやれ」

雨桐が驚いた表情をしたが黙って頷いた。王さんはすぐ三階にあがった。もうすぐ日付が変わろうとしている。孝治は疲れてはいたが、頭は冴えていた。雨桐は空港に迎えにきてくれたが、あの時から、二人だけになったことはない。いつも王さんが傍にいた。意識的に二人だけになるのを避けている。だが、雨桐が孝治を嫌っている気配はない。それはわかる。孝治は人との付き合いが上手ではない。孝治に好意を持っていれば、その人の何気ない仕草でわかる。孝治も雨桐が好きだ。伏せっている母親の世話もし、店の切り盛り

も大変なのにてきぱきと片付けている。いい機会だ。関羽を口実に雨桐の気持ちを確かめたかった。

雨桐が扉を叩いた。

「ちょっときて」

雨桐の部屋に入るのは初めてだ。部屋は綺麗にかたづけられている。かぐわしい匂いが漂っている。卓子に本が積み重なり、点心の焼売が皿に盛ってあった。

「食べてもいいよ」

と、雨桐が言った。雨桐も疲れているはずだが、そのようすもない。薄手のズボンにシャツを羽織っている。胸の膨らみが目立つ。孝治はできるだけ見ないようにした。窓のカーテンが半分ほど開いていた。外は真っ暗で静まりかえっている。

「何か知っているの」

「いや、何も」

中国の歴史は世界史に含まれる。大学入試センター試験の選択科目だ。孝治は選択のは知っていた。でも、関羽が三国志の武将の一人であるムで覚えた。

「何を知りたいの」

「関羽の人柄と、多くの武将が三国志に登場するが、なぜ、関羽のみが、神として祀られるようになったのか、そこを知りたい」

孝治は正直に言った。

雨桐が座り直し孝治を眼を見詰めた。

綺麗な眼だと孝治はおもった。正直な人らしかった

「部下には優しく、嘘が嫌いで、上司の理にあわぬ指示には逆らうタイプね」

雨桐が焼売に手をだした。孝治も一つ摘まんだ。夜中に焼売を食べるとは思わなかった。旨かった。

「関羽は味方に裏切られ、打ち首にされたの。恨みを

果たすために、祟り神となって、裏切った者や、敵の武将を呪い殺した、と信じられたの。祟りを恐れた人々が廟を建立し、関羽を神として祀ったのよ。日本でもあるでしょう」

雨桐の言うように、菅原道真が祟り神となり、藤原氏に祟りをなし、恐れた朝廷が道真を神として祀ったのが、北野天満宮だ。どの国でも、不遇に死んだ人を祀ることがあるのだ。でも、関羽が祟り神になった経緯がよくわからない。

「日本でもあると思う。でも、関羽が祟り神となった経緯も詳しく知りたい」

「いいわ。でも遅くなったね。そのうち、教えてあげる。もう寝たほうがいいよ」

孝治も頷いて立ち上がった。明るくなってきた。雨桐が扉のところまで送ってくれた。孝治は扉を開けて廊下に出て、振り返ると、雨桐が部屋に入ろうとしている。孝治はさりげなく、雨桐の肩をつかんで、振り向かせ、雨桐を抱き寄せ唇をあわせた。自然な動作だったので、雨桐も孝治のなすがままに任せた。だが、急に雨桐の体が強張った。

「止めて」

と雨桐は叫んで、体を離し扉を強く閉めた。祖父に似たのか、孝治はぐだぐだと考えない質だ。ベッドに潜り込むと、疲れもあって直ぐ寝てしまった。ただ、雨桐に嫌われたら嫌だな、と思った。眼が覚めたのは朝の十時を過ぎていた。身支度を調えて降りていくと、厨房で王さんと雨桐が朝食の用意をしていた。

「昨日は、ご苦労さん」

王さんが労った。

「まだ寝ているなら起こしに行こうと思ったのよ」

雨桐もいつもと変わりがない。孝治は安堵した。トレイにコーヒーとスクランブル・エッグに焼きたてのパンがあった。朝と昼の兼用の朝飯だ。孝治がほとんどのパンを食べてしまった。雨桐が眼を丸くして驚いている。孝治はさりげなく、雨桐の肩をつかんで、振り向かせ、雨桐を抱き寄せ唇をあわせた。自然な動作

三人が関帝廟に出かけたのは十二時を廻っていた。

繁華街は港に沿って拡がっている。ここに来たのは初めてだ。通りにはブティックやレストランが軒を連ねている。半ズボン姿の観光客が多い。客船で来た観光客か。港の埠頭に着岸している大きな客船が通りからも見える。此処はカリブ海を周航する客船が寄港する観光地のひとつだ。

関帝廟は繁華街の近くにあった。孝治と雨桐は関帝廟の前でセダンの車を降り、王さんが隣の駐車場に車を止めに行った。雨桐が手を握ってきた。少し汗ばんでいたが、柔らかい手だ。雨桐の気持ちがわかって孝治は嬉しかった。

関帝廟の屋根の端が跳ね上がり、二匹の竜が向かい合って飾られている。屋根は尊いとされる黄色の瓦で葺かれ、正面に関帝廟と記された額が掲げられている。廟の廻りに中国人が大勢集まっている。戻ってきた王さんが知り合いの人々と挨拶を交わしている。爆竹が大きな音を立て煙があがった。雨桐が孝治の手を強く握って傍を離れようとはしない。

王さんが近寄ってきた。

「主神は関羽で、両脇に息子の関平と配下の武将の周蒼が祀られている。三人とも一緒に首を切られた」

と王さんが厳しい顔つきでいった。

「雨桐、孝治と一緒に詣ってこい」

「そうするわ」

雨桐が売店に孝治を連れていった。そこで太めの線香と金紙の束を買い、三本の線香と金紙の束を孝治に渡した。

「金紙は彼岸のお金よ。これを本殿の台に神様に向けて置いておくの。それから外に出て、香炉に火を付けた線香を一本ずつ供えるの。三度お辞儀をして線香を供えるのを忘れないでね。線香を供えたら本殿に入って、神様の前で、三回お辞儀をして、心の内で住所と名前と生まれた月日と年を告げ、願い事を唱え、一礼をするの。最後に金紙を持って出てくれと叫ぶお礼に、備え付けの金炉で金紙を燃やすのよ」

孝治は言われた通りに詣って、願い事を心の内で唱

えた。雨桐も真剣に願っている。何を願っているのか知りたかったが、聞けるものではない。黙って様子を見ていた。

「何を願ったの」

雨桐が聞いてきたが、そんなことを言える訳がない。

「言えるか」

孝治がぶっきらぼうに応ずると、参拝を先に済ませた王さんが思わず笑った。

「久しぶりだ。茶館にいくか」

王さんが二人を誘った。茶館には個室があった。その部屋で鉄観音茶を喫した孝治は、考えてもいなかった事実を王さんから告げられた。

何気ない王さんの話から始まった。

「孝治は何を頼んだの」

普段と同じようにさりげなく聞いてきた。

孝治もつい喋ってしまった。

「雨桐さんと共に暮らせることを」

王さんはさほど驚きもせずに雨桐にも質した。

「雨桐は」

「孝治さんと結婚できますように」

雨桐が顔を真っ赤にして応じた。

「孝治よ。二人が互いに好意を持っているのはわかっている。関帝廟で二人とも同じ願いを唱えた。関羽は願いを叶えてくれよう。誰も二人が一緒になるのを反対はしない。ただ、黙っていても、孝治もすぐつらい噂を聞くことになる。嫌な話だ」

隣に座った雨桐が痛いぐらいに強く孝治の手を握った。雨桐の顔色が青白くなった。いつも笑顔を絶やさぬ王さんも緊張している。

「半年前のことだった。妻が雨桐に繁華街で刺繍の糸を買ってくるように頼んだのが、発端だった。夜でしかも雨が降っていた。此処の治安はよくない。雨桐は家の近くで待ち伏せされていた。車の進路を妨害され、窓を叩き破られ、車の外に引きずり出されて、有り金を強奪され、そのうえレイプまでされた。犯人はまだ捕まっていない」

雨桐がうつむいて泣き出した。孝治が雨桐を静かに抱き寄せた。王さんの一言ですべてわかった。雨桐が死ぬほど辛い目にあったのだ。もうこれ以上、雨桐の悲しませることはないと思わず言ってしまった。「後は任せてください。車の鍵をおいていって」王さんも孝治の気持ちを汲んで、車の鍵を置いて静かに部屋を出て行った。雨桐が涙で濡れた眼で何かを孝治に必死に訴えている。孝治もこの理不尽に怒りを覚えた。

「出ようか」

雨桐が頷いた。孝治が雨桐を守る」

「気にならないと言えば嘘になる。でも、いまの雨桐が好きだ。何があっても雨桐

雨桐がまた泣き出した。孝治は雨桐を外に連れ出し、泣きじゃくっている雨桐の肩を抱いた。小さな湾はあくまでも青く人の気配もない。涙を手で拭きとり、優しく唇をあわせた。トラウマが起きるか心配したが、その気配はなかった。孝治がブラウスのボタンを外し、膨らみに触れると、雨桐が関を切ったように、孝治にむしゃぶりついた。

店に戻った時は暗くなっていた。

王さんが心配して厨房で待っていたが、孝治と雨桐の表情を見てすぐ三階にあがった。その夜、雨桐がバス・ローブだけを羽織って孝治の部屋に忍んできた。

「こうじ、起きて」

と雨桐が部屋の中にはいってきた。変わったことが

二人はかまわず足早に茶館を出た。

雨桐が押し黙ったまセダンの車を走らせた。市街地を抜け森のなかを北に向かうと視界が開けた。カリブ海に臨む小高い丘に囲まれた小さな湾があった。

「マラカス湾よ。一人でよくきたわ。でもあのことが起きてから、此処に来るのは初めてなの。何かあったら、孝治が守ってくれるね」

孝治は雨桐を手を強く握った。

もうひとつあった。王さんの妻の美朱（メイチュ）さんが厨房に姿を見せたことだ。雨桐が元気を取り戻し、美朱さんも心配をかけられないと思ったのだろう。店でレジを打ち始めた。これで雨桐の負担も少しは減る。家族が元気になって喜んでいるのは王さんだ。

客が帰った後、王さんが三人を厨房に集めた。

雨桐が孝治の横に寄り添って座った。

「店も軌道にのった。あとは二人のことだ。式をあげたいが、どうするか二人で決めてくれ」

孝治がしばらく考えていたが、

「少し待ってくれませんか」

と応じた。雨桐も頷いた。王さんを失望させるつもりはない。ただ、孝治は解けぬ疑問がひとつだけあった。すぐ孝治は雨桐の部屋を訪ねた。一昨日の夜は、二人は向き合って座っていたが、雨桐は孝治の横に座って体を密着させてきた。孝治は雨桐の眼を見詰めて質した。

「手紙の返事をなぜ出したのですか」

「毎日、泣いて暮らしたの。父は店を開ける気持ちにならで夜も寝れず体調を崩してしまった。家の中は暗かった。その時、孝治の手紙がきたの。他の国の人の手紙ならゴミ箱に捨てていたわ。れるし、決して裏切らない。日本人なら信じらもし、孝治が気にいらなければ、すぐ帰国させればいいと、父を説得したの。迎えに行った時は、本当に心細くて怖かったわ。孝治が来るわけにはいかないでしょうれば、父も店を閉めていた」

これが理由だった。思わず雨桐の顔を両手で引き寄せ唇を吸った。雨桐が座り直して孝治を見詰めた。

「式はどうするの」

「二回するのはどうだ。此処と日本で」

「えっ」

雨桐が、一瞬驚いたが、眼を輝かせて喜んだ。

「賛成よ。花嫁衣装を二度も着れるのね。嬉しいわ」

孝治ははじめて雨桐の笑顔をみた。

―了―

評伝

茶聖・千利休（せんのりきゅう）・自裁のなぞ

久野　治



毎年、**二月二十八日**は「**利休忌**」として、京都は表千家、裏千家、そして武者小路千家。また東京の江戸千家では、茶聖・千利休（一五二三～一五九一）の遺徳を偲び、それぞれが追悼の茶会を催しておられます。

このとき「**利休肖像画**」（掲載のものは、わたくしが写したものであります）は、唯一の掛け軸であるため各千家の持ち廻りとなっております。

また千家では参席者が多いため、日時を少し遅らせて催されております。何れにしても千利休が、ときの天下人（てんかびと）であります豊臣秀吉（一五三六～一五九八）の怒りにふれて、自裁に追いこまれたことは歴史上、明らかな事実であります。

しかし、その原因については、これまで諸説が述べられてきましたが「**謎**」となっており今年は利休自裁から数えて四三〇年。これまでに発表されました幾つかの説を次に誌るすことと致します。

第一は**岡倉天心の「秀吉の利休毒殺」をはかったという疑い**。美術評論家でフェノロサ（Frnest Francisco

Fenollosa　一八五三～一九〇八）に師事したのち、東京美術学校校長で、かつ**「日本美術院」の創立者**である岡倉天心（一八六三～一九一三）の著書**『茶の本』**（The Book of Tea）であります。

この本は、アメリカ（America）ニューヨーク（New York）で出版され、わが国の茶の湯文化を世界に知って貰うために書かれたもので、貴重な文献ともいえるもので、現在は岩波文庫本となっております。

同書86頁～87頁では、次の如く述べられております。

――利休と太閤秀吉との交誼は長いものであって、この偉大な武人が茶の宗匠を尊重したことも非常なものであった。しかし暴君の友誼は、いつも危険な光栄である。その時代は不信にみちた時代であって、人は近親の者さえも信頼しなかった。利休は媚びへつらう佞人ではなかったから、恐ろしい彼の後継者と議論して、しばしば意見を異にするをもはばからなかった。

太閤と利休の間にしばらく冷ややかな感情のあったのを幸いに、利休を憎む者どもは、利休がその暴君を毒害しようとする一味の連累である。といった。

宗匠のたてる一碗の緑色飲料とともに、命にかかわる毒薬が盛られることになっている。ということが秘かに秀吉の耳にはいった。秀吉の嫌疑がある。というだけでも即刻死刑にするに充分な理由であった。

そして、その怒れる支配者の意に従うよりほかに哀訴の道もなかったのである。死刑囚にただ一つの特権が許された。すなわち自害するという光栄である――

以上の論説によれば、**岡倉天心は秀吉毒殺の嫌疑？**という決め手が、利休の存在をねたんだ秀吉側近のものどもの画策、と捉えておられる。側近では急速に台頭してきたのは石田三成（一五六〇～一六〇〇）ですが、三成は近江（滋賀県）の出身で、秀吉にとりあげられて治部少輔となった人で、佞臣ではありますが、如何でしょうか。

また利休は自裁をまえにしてひらいております。それは天正十八年（一五九〇）八月十七日から、翌天正十九年（一五九一）一月二十四日の期間

でありました。そこで最終の茶会に招かれましたのが徳川家康（一五四二～一六一六）という密室。加えて傍証ひとりであった為、二畳茶室人のいないことで、あらぬ疑惑が推測されても致し方ないと思います。その一が家康と利休は秀吉の毒殺を相談した。と伝えられております。これは少しうがった見方と思いますが、如何ですか。**第二は、お吟さまへの恋慕**という話であります。

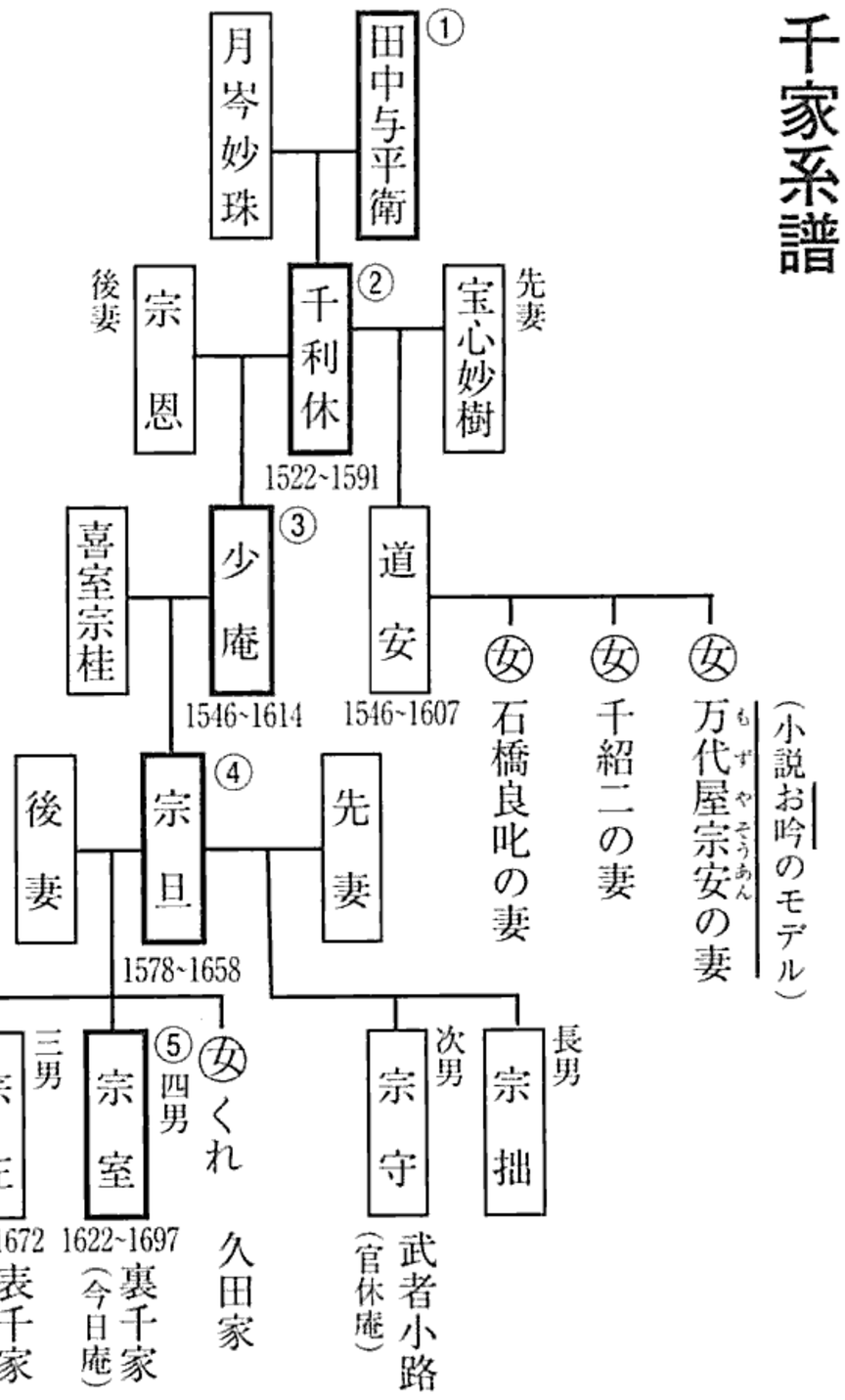
小説「お吟さま」は昭和三十二年（一九五七）に作家・今東光（一八九五～一九七七）が**第三十六回直木賞を受賞**した作品で、映画ではお吟さまを**京マチ子**が演じて、評判の高かったことで有名ですが、小説と史実の間には差違があることは、やむを得ないことですが、一般には映画での印象がつよく、それが真実である。と思われ、そちらが一人歩きしてしまいました。

お吟さまは**別表**（千家系譜）にあるごとく、千利休の娘で、万代屋宗安（もずやそうあん）の許へ嫁ぎますが、そのころキリシタン大名で高槻城主（大阪府高槻市）の高山右近（一五五二～一六一五）への思慕が来ず離縁されたところを、秀吉が目をつけ**側妾**にと求められますが、これを頑なに拒否。権力に抵抗いたします。それが利休処刑への道を辿ったのではないか。という説であります。お吟さまは天正十九年（一五九一）正月十八日に自殺されます。

面白いことに、この話は『**利休由緒書**』の末尾で、「**十市縫殿助物語**」として載せられています。（以下要約）

――豊臣秀吉は子宝に恵まれなかった。正室の北政所（きたのまんどころ）とのあいだに子が無く、自然に生まれるべくして側室

千家系譜



が出来ますが、その前の天正十六年（一五八八）、さきの正親町天皇（第一〇六代、一五一七～一五九三）の長男にあたります陽光院誠仁親王の、第六皇子であります〝**胡佐麿**〟十歳を養子として迎え入れることにしました。

秀吉は天皇家から養子を迎えるいうことで、大変に嬉しく、喜んでおりましたが、翌天正十七年（一五八九）に**側室**である**淀殿二十三歳**とのあいだに、**鶴松**が生まれましたので、まことに申し訳けのないことでありますが、〝胡佐麿〟の養子縁組みを解消して、胡佐麿のために天正十八年（一五九〇）、「**八条宮家**」を創立して、三千石の所領で**八条宮智仁親王**を名乗られることになりました。

（智仁親王は、のちに「**桂離宮**」を創建されますが、これは後日譚であります）

さて、秀吉は五十四歳にして、初めて恵まれました鶴松を溺愛いたしますが、不幸にして鶴松は天正十九年（一五九一）三歳で病没してしまいました。

秀吉の失意の心境はわかりますが、小説、お吟さまへの恋慕、また鶴松の死などは秀吉の事実は想定できますものの、利休の自裁との係わりでは如何なものかと思います。

第三は利休愛弟子・山上宗二の惨殺であります。

山上宗二（一五四～一五九〇）は堺（大阪府・堺市）で生まれ、山の上に住んでいたことから山上を姓としましたが屋号は薩摩屋、号は瓢庵（ひさごあん）で、伜である伊勢屋道七のために書いた『**山上宗二記**』は、**利休秘伝書**と伝わっております。

容貌がみにくい上に、毒舌家といわれ利休一の弟子でありながら、秀吉の小田原城攻めのとき、北条方の城将でありました皆川山城守のもとで茶頭をつとめていた。ということと、「山上宗二記」を故に、天正十八年（一五九〇）四月、山上宗二は秀吉軍によって耳をそがれ、かつ鼻をけずられる等と、**惨殺の刑**に処せられました。

この頃、利休は秀吉軍に随行して、小田原ちかくの熱海などで茶席など設けて、秀吉および将兵をもてな

した。といわれております。

（このとき古田織部（一五四〇～一六一五）も従軍し、千利休との間で軍事郵便「**武蔵鎧の文**」の書状をのこしたことは著名であります）

さて、愛弟子である山上宗二が秀吉によって惨殺された。という情報がいつ利休に伝わったかは定かではありませんが、圧倒的な軍事力の前に、北条方は敗北。

秀吉は北条方の降伏、小田原城の開城を見届けたのち、蒲生氏郷（一五五～一五九五）に会津若松（福島県）四十二万石（のちに九十二万石となる）を与え、会津へむかい、京都へ凱旋したのは九月一日でありました。

このとき、利休は、この**会津行には随行せず直ちに**京都へ戻り、「**千利休百会記**」の準備に入ったものと思います。

この一件こそが、わたくしとしては秀吉と利休の決別の大きな一歩であったとみますが如何でしょう。

第四は、京都・大徳寺の山門（金毛閣）に利休木像を置いた。ことによる**不敬**が利休刑死の理由である。

というものです。

大徳寺は利休が参禅の師であり、**利休号**を与えた人物は、大徳寺一一七世・古渓宗陳（一五三〇～一五九七）であります。大徳寺は京都市北区にあって臨済宗大徳寺派の総本山で、山号は竜宝山・一三二四年宗峰妙超を開山として創建された古刹であります。

そこで古渓宗陣の要請にこたえて大徳寺の山門に楼閣を寄進したのは天正十七年（一五八九）であります。山門は応仁・文明の乱（一四六七～一四七七）で焼失。一休さんとして親しまれています一休宗純（一三九四～一四八一）が大徳寺の住職となられましたのは文明六年（一四七四）で、その後享禄二年（一五二九）連歌師でありました宗長（一四八四～一五六三）が寄進して、単層の山門が再建されました。そこへ利休が私財を投じて重層の壮大な「金毛閣」に増築されたものであります。

山門の梁には「檀越泉南利休老居士」と刻まれました。

（檀越とは大檀那で仏家では財物を施与する信者をさす言葉で、施主ということです）

問題は、その山門のなかに利休が頭巾をかぶって杖をつき、雪駄をはいた木像で雪見をしている姿であります。

このような町人風情の木像を、勅使や関白殿がその下をくぐる山門に据えおくことは、不遜僭上（ふせんせんじょう）の所行（しょぎょう）である。これが利休処罰の第一である。と書かれてもいます。

それを裏付けるに、木像は利休自裁の直前から金毛閣からは下ろされて、聚楽第の大門近くの一条の「戻り橋」のたもとにして道ゆく群衆に見物させた。と伝えられております。**木像を磔（はりつけ）**にするということも前代未聞と申せましょう。

第五は茶道具の目利きを通じて不当な利益を得ている。という世評（風聞）。つまり天下第一等の茶人である千利休が、捨てられてあったような茶道具でも「寂びに適（かな）っている」といえば、その物品は高額な価格がつけられて売買されることであります。

（話は少し違いますが、テレビ番組で「なんでも鑑定団」という放送があります。わたくしはＯＲＩＢＥ研究家として、やきものに関心が高く、とくに安土・桃山時代（一五六〜一六〇〇）の志野・織部・黄瀬戸などには一層の興味をもっていますので、鑑定士・中島誠之助先生の判定と造詣には感心しております）

もともと**商品価格**というものは、主として原価はあるものの、**需要と供給**によって決まるものである以上、高価すなわち不当とはいえません。欲しい人は、たかが一個の茶盌といえども、家屋敷を手ばなしても購入する。といいますから、利休が目利きで不当な利益を得ているという噂は、京都・興福寺に関係のある「**多聞院日記**」（多聞院英俊が一四七八年から一六一八年の日記を主としてまとめたもの）と日記の中では町中の噂ばなしを書きとめたもので、多分、利休は堺の一商人から立ち上って、権力（けんりょく）の中枢（ちゅうすう）にまで上りつめていた故に、相当の嫉妬（しっと）・やっかみは町衆の中にはあった。と思われます。

他愛もない世間話も後のちに残る日記として残った。これは一例で利休自裁の理由としては、わたくしは質の低い所説とおもいますが、どうでしょう。

第六は、利休キリシタン説であります。

キリスト教は天文十八年（一五四九）イエズス会（soci. etas jesu）の宣教師、フランシスコ・ザビエル（Francisco Xavier）が、九州・鹿児島に上陸。布教活動をはじめて以来、織田信長（一五三四～一五八二）はキリスト教に対しては寛容であるばかりか、むしろ渡来してきた宣教師を通じて、西欧の文化を積極的に採り入れております。そして、それを政治で実行しております。

利休はまだ宗易として四十九歳から六十一歳にいたる、いわば信長に仕え茶頭への道をあゆんでいたときで、利休茶道は完成に近づいていました。

茶道における「**袱紗さばき**」は**キリシタンであったのは高山右近と牧村兵部の二名**であり、中でもキリスト教への信仰の厚かったのは高山右近で、織田信長が「本能寺の変」でたおれ、豊臣秀吉が天下人となりました後、秀吉は天正十五年（一五八七）にバテレン（padre）追放令をだし、キリスト教を禁止してしまいました。（利休六十六歳のとき）

ミサ（missa）の儀式に似ている。という指摘。さらには「**小間の茶室**」それ自体が**船室**（キャビンcabin）ではないかと仰言る。利休は堺の港の商家で生まれ育っていますから、当時、堺港へ入ってくる外国の船への出入りはありましたから、たとえ聖杯のぬぐいと袱紗さばきが似たからといってキリシタン（christao）と決めつけるのは早計ではないでしょうか。

わたくしはキリスト教の作法を、茶道の上での**様式美の追求の結果**である。と思っております。

また、後に「**利休七哲**」とよばれます高弟の中に有名なキリシタンが存在していたことは事実で、七哲とは筆頭に蒲生氏郷（一五五六～一五九五）、ついで高山右近（一五五三～一六一五）、細川忠興（三斎）（一五六三～一六四五）、芝山監物（生没不詳）、瀬田掃部（生没不詳）、牧村兵部（一五四五～一五九三）、古田織部（一五四四～一六一五）で、この中で

このとき頑なに秀吉の禁止令に従わない高山右近に対し、秀吉は茶道の師である利休に対して、右近を説得するよう命じ、利休は努力しましたが右近は棄教しなかった。というエピソード（episode）があるくらいですから、利休キリシタン説は当たらないと思います。

（正確なことは分かりませんが、安土・桃山時代のわが国人口は二千万人と推測し、キリスト教信者はおよそ十五万人に達した。と伝えられております）

第七は、「士農工商」の制度と堺商人の没落があげられております。

秀吉は天正十年（一五八二）織田信長を討った敵の明智光秀を倒すや翌十一年（一五八三）には大坂城（大阪市）に入り、ただちに増改築をすすめ、拠点としての地盤をかため、一方、かつて織田軍団の中では譜代衆の代表格であった**柴田勝家**（一五三〜一五八三）を賤が嶽（滋賀県北部）の戦いで破り、ついで**滝川一益**（一五二五〜一五八六）をも降して、それまでの貿易港かつ商業都市であった堺の繁栄を、新しく大坂城を中心とする大坂へ移すべく、足場固めを初めて、自ずから堺は斜陽化してゆきました。

（今日の大阪市を中心に商業活動を展開する近畿経済圏は、此処からはじまっている故、未だに**太閤秀吉への信望**はあついものがあります）

また秀吉は**身分統制令をもって**「**士農工商**」の、**階層社会**をつくりだします。

かつて堺は申すまでもなく商人が「会合衆（えごうしゅう）」という指導機関を、自分たちで作り、堺の町の自治をまかなって来ました。いうなれば商人主導の町づくりで繁栄を招いてきたのであります。

これが根本から崩れて、秀吉が築いた大坂城を中心に、政治は武士階級がにぎり、その支配下に農業それに工業。そして商業という位置が決まって、それまでの「**とよとみ商店**」とも俗称されます政治や難しいことは、番頭格である秀吉の**弟・豊臣秀長**（一五四〇〜一五九一）とは、番頭格である秀吉の**弟・豊臣秀長**（一五四〇〜一五九一）がとり仕きり、よろず**雑務は千利休**といった体制は、さながら小物商店の番台をおもわせる状景であった。

といえましょう。

秀吉の身分統制令は武士を主に中央官僚の台頭で、おりから堺の没落を契機に庶政一新を、目論んでいた矢先、秀吉の片腕であった弟の秀長が天正十九年（一五九一）正月に逝去するとそれまで抑えられていた官僚のトップである石田三成（一五六〇～一六〇〇）らが一斉に、利休排斥・追い出しの大義名分を求めて奔走。失脚は堺の没落とあわせて、転落を辿ることになりました。

これらの状況からみんでいった。とわたくて利休は失意のどん底に落ちこしは想像いたします。それを端が、遺偈（ゆいげ・高僧が死をまえにして残す言葉）であります。

人生七十　力囲希咄　吾這宝剣　祖仏共殺

辞世の歌としては、

引っ提ぐる　わが得（え）具足（ぐそく）の　一つ太刀　今此の時ぞ

天に投げうつ

利休は、自らが確立してきた茶の湯茶道の道しるべとして、自己を殉じることによって割を充分はたしたものと、わたくしは思います。

ただ時世の大きな転換は、自らが生まれ育った堺を没落せしめ、かつ商人の扱いには不満は大きいものがあったでしょう。

第八は、秀吉が執心をもって欲しがっている「**橋立の壷**」を**利休は拒否**して、大徳寺の聚光院にあずけた。ということが秀吉の逆鱗（げきりん）にふれた。す。このとき利休が壷に添えた歌があります。

――渡さじな　面影うつる　人あらよ　天の橋立――いま一つは――横れる　紫野　踏みとどろす　天の橋立――

これらの歌は、利休自裁の少し前になる二月四、五日のものといわれており、のち後、堺の南宗寺につぐ、大徳寺の聚光院の（宝塔が置かれる）に預けることは、利休がこの「橋立の壷」に大きな愛着があったことは想像されます。

秀吉の執心を拒否して隠まうとこ

克を感じますが、自裁の要因説としては聊か弱い。とわたくしは思います。

その他、細川忠興に「引木（ひきぎ）の鞘（さや）」という大名物の朝鮮筒形茶盌をおくり、相談したい。と述べたともいわれ、また大徳寺の古渓宗陳とも善後策を話し合った。とも、さらに禁裏（宮中）出入りの川端道喜（生没不詳）とも相談した。という事が伝えられていますが、これらは自裁以前の懊悩（おうのう）のときがあったものを思わせますが、自裁の要因としては如何なものか。

死をもって茶道を、わが国固有の文化として確立。とわに茶聖として、その名を歴史に刻した意味は大きいものがあります。わたくしは、利休の弟子であり、これ又、謎の存在として、その死を含めて分からずじまいでありました。こちらは武将茶人・古田織部（一五四〜一六一五）の研究に半生を費したＯＲＩＢＥ研究家として師である千利休の生涯。さらにはわが国における茶の湯の歴史を探究して、このほど「喫茶養生記」の栄西禅師を筆頭に、しんがりは松尾流・松尾宗二、そして川端道喜にいたる茶人およそ四十名の顔のイラスト、さらにその生涯（茶道）を探究して、およそ十年の歳月をかけて、調べあげた上で『**茶人伝**』をＡ５判一六七頁を、中日出版㈱（TEL052-752-3033）から出版することが出来ました。また千利休と古田織部の関係を「**対極の師弟関係**」と捉（とら）えた『**千利休より古田織部へ**』四六判二九一頁を鳥影社（TEL03-3763-3570）または（TEL050-3532-0474）（TEL0266-53-2903）から出版いたしておりますので、ご参考にして下されれば有難いことであります。





茶聖・千利休（一五三～一五九一）

追慕十首

久野治

利休忌を　家にしあれば　一碗の　茶をば献げむ　春まだ遠し
（二月二十八日利休忌）

花曇る　空いつしかに　音たてて　利休鼠の　雨降りはじむ

柳の芽　吹きてさやさや　揺れており　此処は一条　戻り橋かな

春の雷　憤怒のごとく　激しかり　利休自決に　天地震える

そのむかし　利休の首を　晒したる　戻り橋趾　春の雨降る

むさくるしと　言われて尚も　黒楽の　茶盌は禅の「無」にあれば

細縞の　間道仕覆も　似合いたり　利休自決の庵は　囲み小さし

一途にも　侘び寂びもとめ　七十年　一期は茶道　極めておわる

春を待つ　われの心に　めぐり来る　利休忌かなし　梅の花散る
（四百三十年遠忌）

エッセイ

空港にて（一）@スキポール

富岡　秀雄

海外旅行すると空港で様々な出来事に遭遇する。思いがけない出会いもあるが、トラブルも多い。私の経験を少し書いてみよう。

現役時代、私の関係する学会がレイキャビック（アイスランド）で開催されることになった。滅多に行けない地なので、家内と参加することにした。二〇〇三年八月のことである。

いつも航空券を頼んでいる旅行社に相談したところ、関西国際空港（関空）からスキポール空港（オランダ）経由で、レイキャビックへ行く経路が最善とのこと。従ってそのようにした。

行きは時差と乗り継ぎ便の関係で、アムステルダムで二泊し、翌々日レイキャビックへ行くという旅程であった。折角二泊するのだから、私の研究室に滞在していたことのあるドイツの友人と会い、食事をすることにした。関空からスキポールへのフライトは快適で、無事アムステルダムに到着、久しぶりの再会を楽しみ、アムステルダム市内見学もして、翌々日、無事レイキャビックへ到着した。

アイスランドは我が国と同じ火山国であるが、ユーラシアプレートと北アメリカプレートの海嶺（海の山脈）が海面上に顔を出しているという珍しい地形もあり、世界最大の露天風呂（ブルーラグーン）はじめ見どころ満載の国であったが、それはまた別の機会に。

学会も無事に終わり、帰国の日を迎えた。帰りは、レイキャビックースキポールー関空と宿泊無しで一気はアイスランド航空を利用するが、この航空会社は旅行社経由より直接購入した方が安いとのこと、助言に従ってそのようにした。

に乗り継ぐ旅程である。

レイキャビック空港は小さい空港で、凄い混雑であった。出発時刻の大分前に到着したが、バスを降りても、空港ビル内へ入り切れない人の波を目にして、焦った。しかも殆どの旅行客は（当然のことではあるが）大柄な西洋人である。小柄な家内は、巨漢の群れに飲み込まれそうであったが、そこはこういう混雑には慣れた国に生まれ育った人種である。ふたりで、ぐいぐいと動きの悪い巨人軍を押しのけ、すりぬけ、なんとか受付カウンターへたどり着いた。喜び勇んで、チェックインを済ませて、飛行機に搭乗できたのは、出発の十数分前であった。

飛行機も時間通りテイクオフ。やれやれ、これで無事帰国できる、と思った瞬間、私は、ハッとした。

カンターでチェックインの時、スキポール？と聞かれてイエス、と応えたのだ。通常は通しの航空券を持っているので、受付でそれを渡すのだが、今回は航空券を別々に購入したので、私はアイスランド航空のチケットだけを示した。つまり、私は先の乗り継ぎのない客と認識され、その通りです、と答えてしまったわけである。

それは、何を意味するか？

機内預かり荷物が、乗継便であるKLMの関空行便へは自動的には搬入されないということである。言いかえると、スキポール空港で、アムステルダムでおりる乗客の手荷物ターンテーブルに出てくるので、そこで自分の荷物を取って、KLMの受付カウンターで再び搭乗手続きをしなければならない。

これは大変なことである。というのも、KLMの関空行の出航まで一時間しか猶予がないのである。そして、ご存知のように、機内預かり荷物が直ぐ出てくることは先ずない。

私は家内にこの事態を告げて、どうするかを話し合った。なるようにしかならないのだが、もし、一方の荷物だけ早く出てきた場合はどうするかである。一応、その場合はそのものが荷物を持ってKLMの受付

へ行き、事情を話す、ということにした。
その後は、間に合わなかった場合に起こる様々な問題に頭を悩ませている間に、飛行機はスキポールへ着陸。手荷物ターンテーブルへダッシュしたが、案の定、荷物はなかなか出てこない。関空行の便の出発まで、あと三十分・・二十五分・・時計を見ながらイライラヤキモキしていたら、ターンテーブルに家内の荷物が現れた。でも、私のはとっさに家内に「先へ行って」と言ったので出てこない。私はとっさに家内
これは大きなリスクであった。というのも、家内は大変な方向音痴である。その上にこの空港はいわゆるハブで巨大である。ターミナルは一個で便利に設計されているとは言え、未知の巨大空港へ方向音痴の家内を一人で行かせた場合に起こりうる最悪の事態も考えないではなかったが、背に腹は、でもある。
程なくして私の荷物も出てきたので、ターンテーブルからひったくるようにして取り出し、空港内をダッシュ。来た時の空港内の様子を思い出しながら、関空行の出発ゲート方面と思しき後方から「お父さん、こっち！」という呼び声が。振り返ると家内が手を振っている。ああ、やっぱり、と思い、思わず、違う！こっちだぁっ！と怒鳴ったが、よぉく見ると、家内は登場ゲートの前に立っており、家内の指差する案内板にはＯＳＡＫＡの文字が……ああ、何ということだ〇▽◇×……。
その後色々なドタバタ劇があったが、私たちはドアが半分閉まりかけている飛行機に、何とか駈け込むことが出来た。
ＣＡの出してくれた出発前のシャンパンが、これほどうまいと思ったことはなかった。
こうして私たちは予定通りに帰国できたのだが、それにしても、あの方向音痴の家内が、あの切羽詰まった状況下、あの複雑な巨大空港を、迷うことなく目指す搭乗口に辿り着いたのは何故だろう。
一緒に外出すると、方向音痴ぶりを発揮する家内を見るたびに、私には永遠に解け ぬ謎として蘇ってくる。

エッセイ

未完成を読む

高見　直宏

作家の原田マハさんが、WOWOWのコンタクトアートという番組でこんなことを話していた。

「美術館で絵画を観るとき、音声ガイドで解説を聞く人が多い。でも解説を聞くとどうしても作品を頭で観てしまう。それは素晴らしいことだが実は後でもできる。知識が心の目を曇らせることもある。私はまず心の窓を開けて作品とコンタクトする」

社会人はみな多忙だ。ゆえにどうしても最小の時間で最大の効果を求める。絵画のディティールや識者の評価を音声ガイドで確認しながら観れば理解も早い。でも原田さんは問題提起する。「それでいいのか」と。

以前スコーレサロンという映画ファンの集いに参加していた。小説にエンターテインメントと純文学があるように映画にもそれがある。芸術性を有したエンターテインメント作品が存在するのも同様だ。会員の方々は映画を年間二〇〇本以上観るような映画通揃いだったが、その中に映画の予告編を全く観ない人がいた。しかもその人は面白くない映画だと途中で中座する。つまり映画鑑賞する際、念頭にあるのは自身の感性のみ。前評判も前評価も関係なしなのだ。芸術を楽しむ姿勢は本来そうあるべきだとは思う。

とはいえ小説を読む場合、どうしても既成の評価に左右されてしまう。古典や芥川賞作品を読むのはその現れだ。もちろんそれが悪いはずはない。小説を書くのなら少しでも多くの作品を読みたいし、どうせ読むなら自身にとってプラスになるものを読みたいのは当然だ。従ってこの呪縛から逃れる術はない。ならいっそ連載中の作品、つまり評価前の未完成も合わせて読んではどうか。

私は一昨年、図書館で「サロメ」のハードカバーを見つけた。作者は前述の原田さんだ。実はこの作品、二〇一五年頃「オール讀物」で連載されていた。当時は気の向くままに文芸誌を買って読んでいたが、たまたまこの本を買い、偶然「サロメ」と出会った。その印象が強く残っていたので早速借りて読んだ。それが実に面白く、連載中に読めば良かったと後悔した。

そんな訳で私は昨年初から「オール讀物」を購読し始めた。この文芸誌は物とバランスよく掲載読み切り、連載、準連載、企画されている。初めは全て読んでいたが、私は読書が遅いのですぐに発刊に間に合わなくなった。そこでやむなく掲載作家をカウントしつつ、好きな作家をチョイスして読むことにした。カウントされた作家数は既に五十人を超えた。その中で今、好きな作家としてチョイスされているのは二十人。いったいこの国には何人のプロ作家が存在するのだろうか。きっと文壇では想像を絶する熾烈な競争が繰り広げられているに違いない。

「オール讀物」で今楽しみに読んでいるのは二作品。一つは直木賞作家・川越宗一さんの作品。もう一つは女優・中江有里さんの作品。どちらも準連載で、川越さんの作品は「海神の子」というサブタイトルが付けられているが中江さんの作品はそれもない。

中江さんの作品は通信制高校所属の女学生・沙羅と、その先輩で大学通信教育部所属の大学生・万葉の学生生活を描いたものだ。万葉は通信制高校を卒業し、大学通信教育部に進むという特殊な進路を自らの意思で歩んでいる。作者の中江さんは大学通信教育部を卒業された方なので、万葉の学生生活がとてもリアルに描かれている。私も大学を通信教育で卒業したので作中の万葉の気持ちが良く分かる。

未完成でタイトルさえ定かでないこの作品が、将来どう評価されていくかは分からない。けれど今、私は心の窓を開け現在進行形で作品とコンタクトしている。きっとそれが読書の本来あるべき姿だろうと思う。

令和三年一月

えんえん汽車に乗る

加納伸

とおちがいのねえさんに
いとうずの動物園に
つれていってもらった
たったひとつ　思い出すこと
まぶしいソフトクリームの
白

無惨に落としてしまった
あの胸を裂いた痛みが
くりかえしくりかえしくる
そんな子供だった
幸せを形づくった
汽車に乗っていく町
マッターホルンの

詩　えんえん汽車に乗る

白いそびえ
驚きの舌ざわり
サーカスの来る街
ナゴヤという都会から
えんえん電車に乗ったら
尾道について
お寺の裏を抜けてお宮の境内
そして坂
すれちがいのばあちゃんと話し込む
あの崩れ落ちた白のまぶしさを
胸のはり裂けんばかりの
痛みをなぜか思い出した
ひとの心の甘い舌ざわり
えんえん汽車に乗ってやっと着いた

わが家の本棚　　加納　伸

泣一凍本こ早敵ドこ後し鉄事こ傭こ凍こ起本
は兵隊のように
立して並んでいる
とばは　本棚の中で拘束されて
えそうだ
とばは本棚の中で　仮死している
兵を雇いすぎてはいるが
の家の大将は　満足している
変が起こらない事には
砲を肩に動きはしない　これらかし、
かし、この世の戦場で、人はどん負傷兵となつて
に
必死の形相である
に向かう
ば
ら
だ

冊の本は　ひとりの人の物語なの
いて笑って　孤独に並ぶ
つての勇士、
クターに会わなくてはと　兵士は
に向かうより　今となっては自分
く故郷の待つ人の処へ　帰還せね
こは戦地だ
はその個人の情報を　温存しなが
えている

エッセイ

スーチーさんの国のガイド

加納　伸



スーチーさんの家の周りを、我ら日本人十一名を乗せたバスは、一周した。「内緒で」とガイドさんは言う。バスは軟禁のスーチーさんの屋敷をゆっくりと進む。

家の角に玄関に軍服の鉄砲を肩にした兵隊が直立不動起立している。二〇一一年の十月、門構えのがっちりと、門壁にも守られたお屋敷であった。【写真】

ガイドと運転手のせめてもの世界への発信か。

我々は首を伸ばし兵士の姿を軟禁の家の両角に見る。彼らは、濃い暗い草色の軍服で、頭を超えた銃身の鉄砲を背負っている、若者である。

大きな湖に向かってお屋敷は建てられていて、一歩も外へ出られぬ監禁生活に、湖面から波と風が絶えずやってくる。それは国内から世界からこの女性の運命的な覚悟の戦いに贈られる電波のようだ。

一九九一年ノーベル平和賞を受けた彼女は、自由を願う民衆の頼みの綱、世界が救済の手を差し伸べるビルマの民主化の象徴である。遊山気分の日本人がちょっと覗いたその時、スーチーさんには拘束の二十年の歳月が流れていた。

英国人の夫は大学教授であったが、妻の祖国ミャンマーの政権は、命も自由も奪いかねない強権で迫って来る。両親の別れに英国から一時帰国したスーチーを『出国すれば二度とビルマには入れない』と軍事政権は祖国ビルマか、英国の家族かと二者択一の選択を迫った。この家族は、自分達に自由と拘束が解かれる日が、ビルマの民に民主主義が勝ち取られる時と信じ、闘う。我と民衆と民主主導に向かう歩み。その困難を

「ビルマの夢」と位置づけビルマの民と誓い合う。

毎年一度の画家の長田先生率いる「創作感動の旅」もこれで参加五回目となるが、ミャンマーと決まった時、ビルマなら自分との接点がある、と思った。

ビルマ戦線から帰ってきた軍医の親戚のおじさん、夫の父親も五年間ビルマで戦ったという。

映画のビルマの竪琴を、上演されるたびに見て更に何度も見てしまう。何かにつけ耳に親しいビルマという国である。旅行中、数々のパゴダ巡りをするのだが、ビルマこそ黄金の国と呼ぶにふさわしい金色（こんじき）に輝く浄土世界を造り、皆僧制を布き、上部座仏教を深く信仰し、皆さん敬虔に礼拝している。私はこのパゴダと戦時中の日本兵の出会いはどうであったのか、気にかかっていた。

アジアに侵攻し、ビルマを戦場にした日本人への反抗は、海外旅行気分の私達にどう返って来るのか。

ミャンマーの人達の我々への特別の感情は、顔色には現れず、敵愾心は歳月か、佛陀の教えに浄化されたか風化なのか、判らなかった。しかし、表情の硬さと暗さ、心の奥に鉛のような塊がどの人にも潜んでいると窺えた。

旅から帰って十カ月、私は敗戦の記念特集のテレビや映画、新聞記事にあおられて、戦争を反芻している。東北大震災と全国に配置された原子炉におののき震える実感のあるこの頃だが、七十年前アメリカ軍による日本列島の帯状の空襲の恐怖を思うと、人間が始める一民族の敗れる戦争の破壊の力は計れない。ひるがえって今思うのだが、ビルマという自分の国土を、30万人もの日本兵が戦いながら移動するとは、現地民や村人に与える影響はどうであろう。その歴史を日本人は語らずに報じずに、いや、私は無関心で来た。

中日新聞の「白骨街道インパール作戦・敗走の記録」（2012年6月より8月15日迄）が七回掲載された。その記事No.7に黄金に輝くパゴダを前にした日本兵を見つけた。高温多湿のジャングルで白骨になるのは三

日もあれば十分だった。すれちがう兵が前方を指さす。
「この先一キロに、二千もの死体があるぞ」。
山頂のパゴダ《仏塔》へ続く五十段の階段を、日本兵の死体が埋めている。歯を食いしばり悔しそうな顔をした死体。きちんと軍服、軍帽を身に付けた白骨。生をあきらめた兵たちは、なぜか白骨の合間に入り込んでいく。

30万人派兵され13万人が戦病死。そして「インパール作戦・白骨街道」などの終戦特集が目、耳に入ってくると、一体この戦況は、その判断は、参謀は、兵士とは何であったかと考え込む。兵士の扱いは兵奴の如く、作戦たるや負けに向かって驀進、紀元ごろの三国志の戦争の方がよっぽど理に叶っている。天道、覇道、王道がたえず支配層で語られ、人間の愚かさ賢さ、神の意志への伺いを込めて語られていると思う。國という文字は武器で戦い取られた囲いだという。

国の困窮、国力のなさ、民意、思想の弾圧、陸軍の暴走、日本国民には、内部から崩壊の時が来ていたのであろうか。

日本に生まれた私、私一人何ができるわけでもない、しかし、以前の私の意識は、旧ビルマを訪ねてから大きく変わり、ニュースをスーチーさんの動きを発言を聞きもらすまいと心し、アンテナはられる。

「今、ひき裂かれた愛・スーチーさんの物語がミリオン座にかかっています」とEメールを入れてくれる朋もいて、何とか出掛けて観た。

今、軍事独裁政権は、自国をミャンマーと呼ばせている。アウンサンスーチー女史が軟禁を解かれた。二十一年間の無抵抗主義を貫抜いた彼女の映画が、名古屋で上演されている。私達が、軟禁の彼女をその屋敷の高い壁の奥に感じた時には、彼女にはもう二十年の歳月が経っていたのだった。

英国人の夫と生き別れながら、ず、母国で戦い抜く。祖国を出ず由の為、旗手となる彼女。髪に生を見る。映画の最後の言葉は、

「あなたの力を、自由の為にお使いください」という呼び掛けであった。

ビルマ・インドはイギリス領であったと聞く。カンボジアはフランス領、インドネシアは、ベトナムは？大東亜共栄圏を掲げた日本は、敗れたけれど戦後、アジアの民族自立の火種となった。西欧と米国の植民地支配に、アジア人である日本が解放の思想を持ったとも聞く。ミャンマーの日本で、とにかく生き、希望を持った。

暗殺された父将軍の言葉

あなたが政治を変えるのではなく　政治があなたを変える

「今からスーチンさんのお宅をぐるりと廻りましょう」と提案。私達のミャンマーの旅はそこで初めて核心に触れた。

貧しき人々は六万の僧侶と共に歩く。彼等は、もうずーっと我々日本人の前を歩いている。上部座仏教の教えを受け継ぎながら。

あの敗戦の四面楚歌の日本で、とにかく生き、希望を創りだし頑張ったのが、母であり、父であり日本民族だ。旧ビルマにも同じ豊かさと、民族の自立、民主主義が根付いて欲しい。

細身の現地ガイドさんは若く黒髪で、腰にロンジーを巻き、着る服も毎日変わり、南国の旅の花のようであった。知的で流暢な日本語で話す彼女は民衆と階級が違うように私には感じられた。仲間たちは質問、疑問も遠慮がちになる。その女性ガイドさんが、

参考資料
アジアハイ
ウェー
日本放送出
版協会



中央に筆者とガイドさん、となりは山田夫人



エッセイ

どうしてこんな国に
―母性からみた性教育を―

有馬　冨美子

昔の女性は大家族の中で姑に気を遣い、食べ物も充分ない環境で一日中働き続け、子供にだけは食べさせたいと自分は我慢した。その子供への愛情が母性である。その母性がどんどん毀(こわ)れていく。

この世に生まれ出たのに、泣き声をあげることも出来ず、消される生命があった。

日本はいつからこんな国になってしまったのか。

子供を産んで殺して埋めた。

その足で会社の面接に行った。

平気でやってのけたのは普通の女性であった。助産師の私は中絶の激増に驚いてはいたが、それ以上に驚いた。何がおこっていたのだろうか。

母性が育っていないという性教育の大きな落とし穴を発見したのである。

戦後の高度経済成長時代からバブルが崩壊した時代に児童虐待が社会問題ともなった。

この時代に高学歴社会を迎えた女性の社会進出が進み、高収入となったことで女性を自立へと向かわせた。その一方で母性の欠如というアンビバレンツな状態を招来した。

性教育の失敗であろうか。或いは避妊薬に関する医療のミスであろうか。

避妊薬を上手に使って妊娠さえしなければ、何をしようと自由だという風潮が社会に蔓延したからだろうか。まちがって妊娠すれば人工妊娠中絶。避妊薬のピルは医師が処方してくれる。

日本国憲法の基本的人権には自由権の中に自己決定権がある。子供を産むも産まないの権利は、女性一人一人に与えられている権利ではある。

然し、現状は日本のひとり親世帯が一四二万世帯である。

心身共に健全な母性をもつ女性に育つためには、正常な生殖器と性腺刺激ホルモンとオキシトシンのバランスに基づく良い人格の形成が必要とされる。

ホルモン系の避妊薬が成長しつつある女子の人間形成にダメージを与えるとしたら、性教育の見直しが必要である。

性行動の若年化は成長期の性器をゆがめ、性感染症や子宮頸部癌の発症などが加わり、政府の心配する「不妊」の女性へと進むのではないか？

ホルモン系の避妊薬を使用しつづけた女性が、たとえ子供を得ても思いやりやあたたかさを司るホルモン分泌が少ない冷酷な人間となり、離婚、いじめ、児童虐待、育児放棄など、社会問題へと進むのではないかと思う。

今年のコロナ下では、中・高生女子の望まない妊娠の相談件数が六月から七月の一ヶ月間で七倍になり、女子高生の自殺も増加した。

従来の性教育の中で避妊に関する少ない知識はあるものの、予期せぬ妊娠により精神的についていかず、

自殺へと進んだのではないかといわれる。

この結果からも若者の性行動の日常化、低年齢化を知ることができる。コロナのために学校は休みになり、両親は共働きで留守、子供達は自分に与えられた個室でどんな生活をしたかを想像してみなければならない。二人なのか或いは友人のグループが集まっているかも知れない。

性に興味津々の子供の範疇にある中学生や高校生が、親の知る由もできない状態にあるとすれば、放任はほぼ倍増している。

十代の妊娠中絶は全国で年間四万件以上あり、十五～十九歳の女子千人あたりの中絶率は、一九九五年に六・二人だったものが、二〇〇〇年には十二・一人と（旧厚生省統計）

妊娠成立の概略は次のようである。

女性の基礎体温は月経開始から二週間は低温期、その後の二週間は高温期となり、その両期の間に排卵が起こる。この排卵期の子宮頸管粘液は、卵子と精子の出合うことでエストロゲンにより精子は頸管を通過しやすく、子宮に入り卵管膨大部で受精する。

受精により大脳視床下部の下垂体前葉から、卵胞ホルモンと黄体ホルモンが分泌され、卵巣からはエストロゲンプロゲステロンが分泌される。

妊卵着床後は、絨毛から分泌のゴナドトロピンにより、卵巣の妊娠黄体を維持する。妊娠四ヶ月の胎盤形成後は胎盤からのエストロゲン分泌が上昇し、黄体ホルモンが妊娠を維持する。

一方、妊娠により精神面の変化を起こすものは、愛情ホルモンといわれる視床下部の下垂体後葉から分泌されるオキシトシンである。

これは幸せホルモンともいわれ、脳や身体に働きかけ、温かい感情をもたらしたり、ストレスを緩和したりする作用をもつ。赤ちゃんに対して愛情を感じるのも、このホルモンの働きであり、女性は母親役割を獲得していく。

生殖器が未発達なうちから性交渉に入り、避妊薬を用いて月経を狂わせ、妊娠したからと人工妊娠中絶をすることで、子宮壁に傷をつける。妊卵は子宮内の着床が出来ず流産をし、身体をズタズタにしていては、本当に子供が欲しいと妊娠を望んでも思い通りになるかどうか。

妊娠さえしなければと自由をはきちがえて快楽をむさぼり、三十歳前後になって結婚でもしようかと考えるのであろうか。不妊状態が続くかも知れない。性教育は最も重要な課題である。

教育現場では文部科学省が大きな枠組みで、発達段階別に指導内容を示している。細目については各自治体の教育現場に任されていて、産婦人科の医師による専門的講義や助産師による指導が行われている。ある中学校では避妊具の実物を生徒に見せて指導をしている。

全人教育の考えに立ち、当然人としての生き方についても教えていると思われる。現指導をしておられると思うが、生とめ方をしているのだろうか。

避妊について教えることも必要れ以上に人はどう生きるべきかをな性行動に目をつぶるべきではなまちがっていることに気づかせなければならない。

歴史をみれば教育現場では学校内容について意見が分かれ、保守る現状のようで安心した。

現代の子供は早熟であり、メデている性の問題を煽(あお)るようなことなく、我慢することを教え、勉強に集中辛抱することだ。

外国では早期から避妊を教えるをする必要はない。

安易に避妊薬を使うことによって、まだ大人にもなっていない未熟な心身の発育を狂わせてしまうことに注目したい。その人達が成人し、出産に至ったとし

ても子供を育てるという自覚がうすれ、育児放棄へと進む人が三万人もいるという。子供の世話が出来ないうちは母親になれないし、なってもいけない。

そしてもっと大変なことが、個人個人が受ける生殖器の病気（性感染症や性器癌、子宮内膜症、生理不順、生理病など）やうつ病が心配される。

誰にも相談出来ず、一生苦しむことにもなる。

統計では性感染症は一九八八年に二十%以下だったものが、十五～十九歳の性器クラミジア陽性率は一九九九年には三十五%に増加している。

女性の身体が妊娠出産に適しているといわれる年齢は、二十五歳頃から三十二、三歳といわれている。

現代の若者は相手を好きになったからとか、始めて会ったその日に性交渉に至るともいわれる。

そんな安易な行動はやめるべきだ。自分を認めさせたいためにファッション化しているともいわれるが、とんでもないことだ。

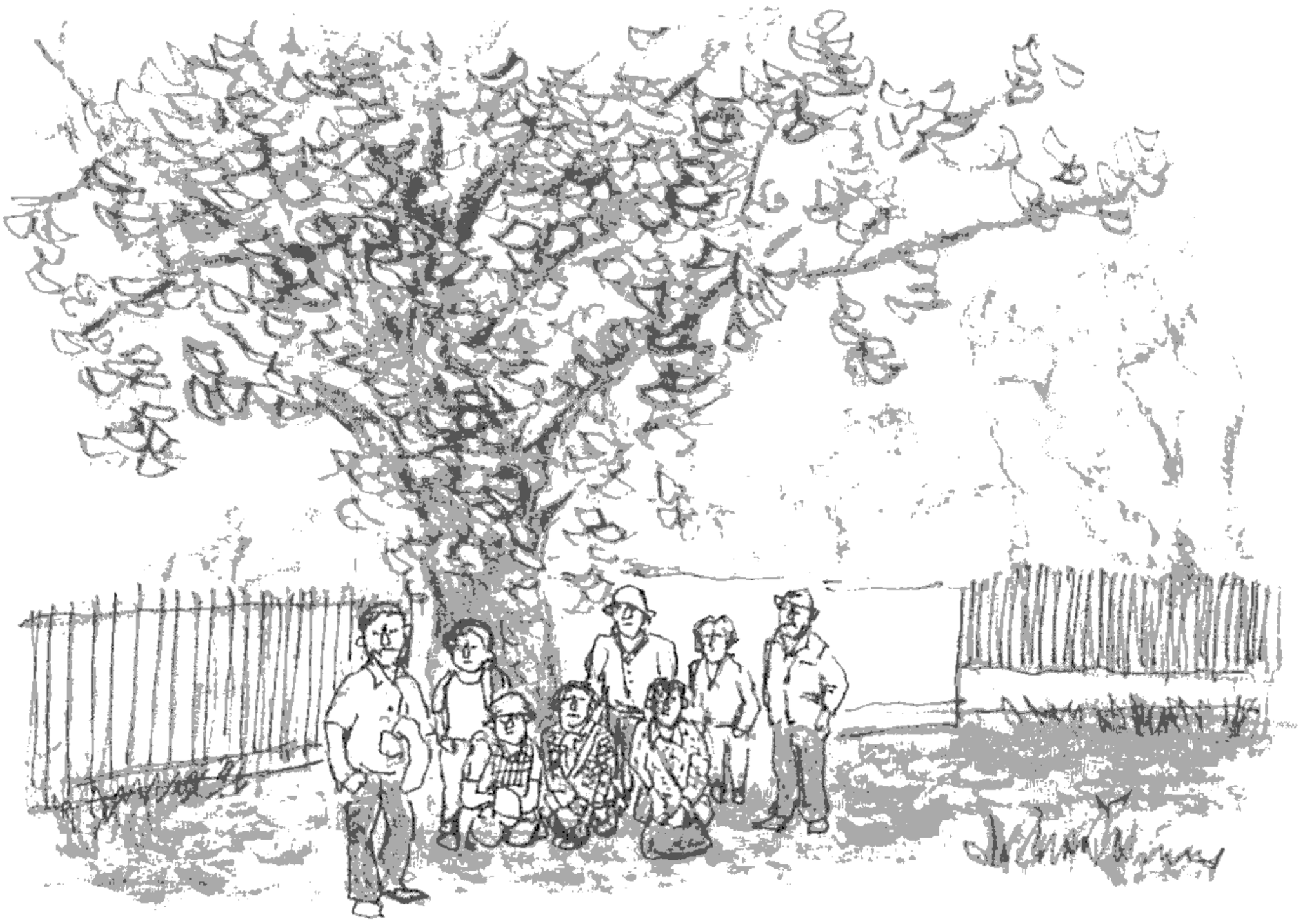
ること。そして自分自身を大切にし、自分を磨き一人前の人間として生活出来るように勉強をすることが大切だ。

自分が得意とすることを見つけ、何か一つ資格をとるような勉強を積み重ねる期間にして欲しい。

そのことが自分が生きていく上で自信をつけることになるからである。

これからは人生百年時代といわれるが、性教育は母性を育てるためにも助産師が中心となり、知識も科学性に基づき、妊娠結婚を二十五歳を目途としたカリキュラムを作成し、全国統一の指導が行われることが望ましいと思われる。

早急に検討されるべきことは、ホルモン系の避妊薬の使用制限を国際的な問題として取り上げ、健全な母性の確立をめざしていかなければならないことである。



きようだい旅行

国方　学

（１）

二〇〇〇年四月九日

教会の先生が、葬儀のときは三人だったが、今回はひとりだけで朗々と祝詞をあげている。その最中、津和子はみんなの背中越しに首をねじ上げて、母親の写真に見入っていた。あれはたしか、米寿の祝いでかぶと虫温泉へ行ったときに撮った写真だ。かすかに笑った柔和な顔だが、ちょっと恥ずかしそうにも見える。

実家の神壇のある座敷の右手の鴨居の上。父と並んで額縁に入り、高い所から子や孫を見下ろしている。

見上げる津和子の方にも、照れのような違和感があった。あの元気だった母さんがあんな所に収まって……。そういう思いが写真の画像に反映して、恥ずかしげな表情に見えるのかもしれない。

母の信仰したこの教義では、仏式の三年七年という法要ではなく、五年十年という区切りで供養の祭祀を行う。この日は母没後の五年祭を親戚抜きで、仙台の叔母も招かず、子や孫たちだけで執り行っていた。東京や大阪、名古屋、四国の郷里近辺から集まったきょうだい八人が、祭壇の前に並んだ。末っ子の津和子はいちばん末席にいて、兄や姉の薄くなった後頭部を眺めている。

母の法要ではあるが、きょうだいたちに逢えるのはうれしかった。血の繋がった歓びというより、朝鮮から日本に引揚げてきてこの開拓部落に入植し、ひとつ鍋の炊とんでひもじさをしのいだ同志との再会みたいなうれしさだ。寒い冬の夜、ひとつの布団にもぐり込み、寒さに耐えたあのときの皮膚感覚が、今もみんなの肌の皺の奥に残っている気がする。顔を合わせると、そのときの温もりが甦ってくるようでうれしい。

祝詞をとなえる先生のすぐ後ろにいるのは、きょうだいでいちばん年上の長姉である。体は小さいのに声と態度は大きい。

その横に並んでいるのが長兄と次兄。

長兄は内地への引揚げ時には十五歳だった。本当は大学に進学したかったのだが、弟妹が多い家庭の事情で、高校卒業後銀行に就職して家計を助けた。結婚後もあちこち転勤が多く、老父母と同居できなかった。長男のかわりに両親の老後を支えたのは次兄だった。この兄は勉強は苦手だがやんちゃは得意という問題児だった。あの温厚な父がこの兄にだけ手を上げたという。仕事もいろいろ変わったが運送会社の運転手をして、結婚後も実家の離れに住んで、最後まで老親の面倒をみた。だから両親の葬儀の喪主は長男ではなく、次男であった。

津和子にとってこの上の三人は、同じきょうだいと

いうより親戚の叔父叔母みたいな感覚だった。年も離れているし、早くから家を出て、いっしょに遊ぶ機会も少なかったので仕方がない。下の半分が本当の兄や姉といった気持だった。

パンパン、パンパンと柏手が座敷に鳴り響いた。長姉がひれ伏すように祭壇に頭を下げる。ほかのみんなもそれに倣った。

先生が「玉串奉奠」と指示をした。長兄が尻を上げかけたが長姉はそれを制し、次兄を促す。次兄は肉体労働で太くなった手指で榊を持ち、枝の向きを変えて母の神前に供える。

こういう法事や葬式では仏式でやる方が合っているように津和子は思う。読経や線香の匂いの方がしめやかな雰囲気を醸し出す。でも、ほかのきょうだいは昔から母のいいつけに従順だった。

鴨居の上を見上げると、うっすらと鼻髭をはやした父がウインクしたように見えた。

母が亡くなってから、実家とのつながりは今までみたいな濃密なものではなく、ゆるやかになっていた。きょうだい間のつき合いも、母という媒体を失ったせいで、それまでよりは希薄になった。

生きていれば母の話題を中心に連絡を取り合って、ひんぱんに交流したのだが、今はその必要もない。むしろそこから解放されて、自分の家族や趣味などに集中し、両親のことは忘れがちであった。

それだけに実家での法要を終え、会場を料理旅館に移してからの食事会は、きょうだいだけの気安さから、今までにない盛り上がりをみせた。

「おい、津和子。お前んとこの店、大丈夫か。つぶれやせんか」

世の中の景気に左右されやすい水商売を心配して、きょうの祭主の次兄が声をかけてくれる。

「こうよ。こう……」

津和子は右肩をガクンと下げる仕草をした。バブルがはじけて八年。売り上げは下がる一方である。

「そうだよなぁ。わしも来年からは無職だわ」
定年を過ぎ、それから一年ごとの契約で運送会社で働いてきた兄も、七十代では仕事はない。景気は後退し、みんなの髪の生え際も後退し、年取っていく。
「引揚げてきたとき、父さんはいくつだったか知っているかい」
隣の席の長兄が、だれにいうともなくみんなに向かっていった。この人はいつも皆に教える物言いをする。
「四十九だよ。母さんが四十三」
ホーッという感嘆の声が上った。そんなに若かったのか。わたしよりウンと若い。今年五十六になる津和子は、なんだか痛ましいような気持ちで両親のことを思った。その年で無一物になり、八人の子どもをかかえて山の開拓農家になり終えた後はいやだったのだ。
「母さんが生きていたら今年で九十七。百歳まで生きてほしかったわね」
テレビで活躍のキンさんは亡くなったが、元気なギンさんを見ると、母も生きていればなぁと思う。
「みんなも年取ったわね。死ぬまでにやりたいこと、やっておいた方がいいわよ」
「やりたいことか……」
きょうだいみんな、互いに顔を見合わせた。津和子にはまだ実感なかったが、長姉は七十五歳だからそういうことも考えるのではなかろうか。
「そういう映画を観たことがあるよ。癌になって余命何カ月といわれ、やりたいと思っていたパラセーリングや超高級店で食事をしたり……」
兄のひとりがそういい、別の兄が受けていった。
「しかしそういうのって、全部やり終えた後はいやだよね。あとはもう死を待つだけなんて」
「ねえねえ」
姉さんたちを呼ぶみたいに下の姉が声を上げた。
「みんなで旅行に行くってのは、どう?」
「みんなって、きょうだいみんなで?」
「いいねえ。温泉一泊旅行。下呂なんか行ってみたいと思っていたんだ」

旅行という提案に兄たちも気をそそられたみたいだ。きょうだいは他人の始まりという言葉もあるように、特に親が亡くなった後のきょうだい仲は疎遠になるのが普通のようだが、うちの場合は違うと津和子は思っている。八人もいるのに、煙たがったりいがみ合う兄弟姉妹はいない。それゆえ、マイクロバスに乗ってワイワイ行くのはきっと楽しい旅になるだろう。でも、下呂温泉ではなあ……。

「じゃあさ。いっそのことはどうよ」

「ええ！　忠州？」

このことばを聞いて、みんなの顔がいっぺんに花開いたように明るくなった。この地名はきょうだいにとって特別であり、第二のふるさとといってもいい憧れの町の名である。

津和子の記憶は一気に四十五年前、小学校四～五年生の頃の、山の家の茶の間の風景にまで飛んでいった。

あの頃の思い出はとにかく食べ物のことが強烈にしみついている。アレがおいしかったとか、コレがうまかったというのではなく、ただただいつもお腹をすかせていたという怨みの記憶だ。夢見る少女の津和子でも、いつも夢想していたのは、白いご飯をお腹いっぱい食べられたらどんなにいいだろうということだった。

夕飯で麦ごはんが食べられるのはまだいい方で、菜っぱの沢山入った雑炊だけというメニューの日もあった。それでも食後はみんなで掘りごたつに足をつっこみ、いろんなおしゃべりをした。一家団欒で空腹のやるせなさを紛らわせていたのだと思う。

「ねえ、今いちばん食べたいものってなあに？」

あのころのゲームだ。そんなことを聞かれてもこまる。幼い津和子には何が食べたいのかもわからない。ごちそうを食べたことがないから、とりあえずお腹がいっぱいになればいい。

「そうだなあ。オレは白いご飯に明太の子をのせて、それを朝鮮海苔で巻いて食いたい」

高校生の兄が鼻の穴を広げていう。いかにもおいしそうだが、明太の子とか朝鮮海苔ってどんなもの？

「俺はカルピッチムだ。くるくる巻いた骨付き肉。あれは牛のあばら骨なんだ。それを炭火で焼いてみろ。匂いだけでメシ三杯はいけるぞ」

「あれって、ハーモニカっていってなかった？」

「ああ。骨に付いた肉をかじる恰好がハモニカに似てたからね」

「忠州にいるときはオモニがよく作ってくれた」

「兄さんはオモニのオンドル部屋に行って、赤いごはんを食べてたでしょ」

「うん。コチョチャンな。辛いけどうまいんだ」

オモニというのは住み込みのお手伝いさんのことだ。食べ物の話が一段落すると、忠州でのソリ遊び、鶏足山の登山遠足、達川の釣り……。ほんの十年ほど前まで住んでいた忠州の家での事柄が次から次へと出てきて、そのうち小さい津和子はこたつ布団の裾で居眠りしながら聞いている。

忠州には何でもあるんだね。お菓子も人形も、オルガンも百科事典も、テニスコートまで。それをみんな置いてきたの。バカだなあ。持ってくればいいのに。

掘りごたつで聞いた兄姉の話はみんな朝鮮での出来事だった。山の開拓生活には何にもなかったので、まるでパラダイスのように聞こえた。一歳半で引揚げてきた津和子には一つの記憶もないが、眠りながら自分で描いた空想の忠州はおとぎ話の国みたいだった。

その忠州にきょうだいみんなで行こうというのだ。胸が躍る。血が沸き立つ。

「行こうよ」「行きたい」。声はすぐ上った。みんな同じように思っていたのだ。死ぬまでに一度行っておきたい所は忠州。むろん津和子も異論はない。兄姉の年齢を考えれば、今がちょうどリミットかもしれない。

「いつ？」「来年？」気ぜわしげに聞く声に、リーダー役の長兄がまとめる。

「じゃあ、みんな行くのでいいんだな」

「ちょ、ちょっと待てよ」

次兄だった。いちばん呑み助でいやしん坊で、下腹の出具合いが尋常ではない彼が、充血した目でいった。

「あんなとこ、みんなホンマに行きたいんか」

あれ?と思った。次兄がいちばん行きたいんじゃないの。少年時代、いたずらばかりしてたんだから。

「きみは行きたくないのか」

一歳違いの長兄がきいた。銀行員らしい几帳面さと冷たさがこもった声で。

「何しに行くんや。汚いとこやぞ」

何しにって。この人は自分の生まれ育った所が懐かしくないのだろうか。

「わしはイヤや。それに、そんな金もないし」

多少酔っているとはいえ、次兄からこんなことばを聞こうとは思わなかった。韓国をよくいわない人は津和子の店のお客にもときどきいる。でも、うちのきょうだいの中から嫌韓を口にする者が出ることは予想していなかった。

わたしは韓国のことを美化し過ぎているのだろうか、と津和子は思った。実際に見聞きしたのではなく、親や兄姉の話から創り上げた忠州像なので、ただ憧れているだけなのか。その点次兄は、実際にイヤな目に遭っていたのかもしれない。

「わたしもちょっと無理かもしれないわ」

あたりを憚るように小声でいったのは次姉だった。

津和子はびっくりした。

「エッ。なんで? 姉ちゃんもイヤなの」

この姉こそ忠州を恋い慕っているとばかり思っていたのに。

次姉は結婚してから趣味の人形作りに打ち込んできた。東京で人形展を開いたこともある。なぜ人形を作るようになったかというと、忠州から日本に引揚げてくるとき、大事にしていた人形を土に埋めてきたためだった。そのときの口惜しさが人形作りの原点になったといっていた。その忠州に行かないなんて。

「ううん、行きたいわよ。行きたいけどうちには糖尿病の病人がいるでしょ。だから家をあけられないの」

義兄のことだった。糖尿からくる合併症で入退院を繰り返している。いまは在宅療養中だが、病人用の特別食を作るのが大変らしい。目を離すと、止められている食物に手を出すので、留守にできない。

「行ける人だけで行ってきて」

せっかくのきょうだい旅行なのに、二人不参加で残り六人で行ってもつまらない。八人揃って行くのに意味があるのだ。

「ねえ。みんなでいっしょに行きたいよう」

甘えん坊だった昔を思い出して、津和子はせがむようにいってみた。

（2）

津和子が物ごころついたときの家計は貧しかった。それは戦後日本のどこにでもあった困窮生活なのだが、幼少期の津和子は「うちは貧乏なんや」と思い込んで育った。そしてその劣等意識はかなり根深く津和子の心に巣食っていた。

忠州に行くということは、そのコンプレックスを振り払いに行くという意味も含まれている。向こうでどんな生活をしていたのかを見届けることで、幼い頃の怨念を晴らす。少し大袈裟かもしれないが、そんな風にとらえていた。

きょうだいすべてが忠州で生まれたわけではない。父は転勤の多い銀行員だったので、元山で結婚した後、金泉、金堤、釜山鎮、馬山などにも赴任し、忠州で支店長になった。

忠州はむかし京城といったソウルから南東へ車で二～三時間行った所らしい。日本でいえば岐阜市みたいな山間の小都市で、忠清北道に位置する。きょうだいの上四人は金泉や釜山鎮などで生まれたが、下四人はみな忠州で生まれ、そこが一家の在鮮最後の土地だった。銀行員としての父の絶頂期であり、家族全員思い入れのつよい町であった。

四国の実家で執り行った母の五年祭後の食事会で、

きょうだいで忠州へ行く話が持ち上がり、大筋でみんなの合意を得た。二人不参加ということだったが、一年半後の秋、一家が引揚げてきた十月を目標に計画することになった。

父の跡を継いだ形である銀行員の長兄の音頭取りで、全員の旅行資金を月々積み立てることにした。きょうだいの間でも家計に凹凸があるので、無理のない程度の金額を出し合って、きょうだい会名義の口座に各々が振り込む。自営業の津和子は少し多めの送金をして、世話になった兄姉への恩返しをするつもりだった。

それと同時に、韓国・朝鮮についてほとんど何にも知らないので、図書館で関連の本を借りて勉強することにした。自分がどうして朝鮮で生まれたのか、家族の歴史についても調べたいと思った。

両親が金婚式を迎えたとき、家族みんなで記念のファミリー文集を作ったことがある。その冊子には父母それぞれが自分の家系と生い立ちを書き遺している。それによると、先に朝鮮に渡ったのは母の祖先だった。

母の祖父は元々武家の出で、廃藩置県により禄を失ったためいろいろ苦労をしたらしい。そういう士族や、維新の急激な改革ではみ出た人々の不満をそらすため、明治政府は未だ鎖国状態にあった隣国に目をつけた。

明治四十一年（一九〇八年）に、「朝鮮を指導し富強をはかる」ことを目的とした東洋拓殖会社が設立された。その営業内容は、かの国の農業・土地の売買と賃借、不動産の経営管理、日朝移住民の募集と分配ということであったと、本を読むと書いてある。

母が金婚式の文集に書いたものを読み直すと、祖父は東拓設立より三年早い『明治三十八年に、日印綿株式会社の代表として元山に移住した。その後独立していろいろ事業をし、元山開発の第一人者のひとりになったが、士族の商法で財は大を為さなかった』とある。

いろいろな事業というのはどういう仕事をしたのだろう。津和子が子どもの頃、母が祖父のことを自慢げに語る話の中に、米を扱ったとか華街を作ったという話の中に、米を扱ったことを聞いた気がする。身内の懐旧談なので、派手に

儲かれば痛快に思ったのだが、中には阿漕な商売に手を出していたやも知れない。

図書館にある朝鮮・韓国の近代史に関する書籍には、大まかにいって二種類あるように感じられた。

ひとつはリベラルな立場からものをいう派で、反対派からは自虐史観と揶揄されている。もうひとつは高見からものをいう派で、植民地化は朝鮮の近代化を促進したという見方。

母の祖父が元山にきて十年後に、大日本帝国はそれまで保護国としていた朝鮮を正式に併合して植民地とした。朝鮮総督府がまず行ったことは、それまで曖昧だった土地の所有権をはっきりさせることだった。識字率や近代的権利意識の高くないところで地籍が確定され、土地は売買される商品となった。

祖父のように早くから朝鮮に渡った者はそこでどんな仕事をしただろう。母のむかし話では実家がどれだけの財産家だったかはわからないが、「おじいさんは刀道楽で、虎徹などの名刀もあった」とか「日本の陸軍がうちに軍資金の入った鞄を預けていった」とか、そういう話は今でも憶えている。

でも、個人事業の利益はたかが知れている。莫大な利益を上げたのは、土地の売買と移民を一手に引き受けていた東洋拓殖会社と土地改良会社、それに穀物商社だったという。それらの会社に融資をしていたのが、父が勤めた朝鮮殖産銀行だった。

我が家のファミリー文集に書いている父の手記によると、『大正三年（一九一四年）中学卒業当時は、次男たる者は宜しく海外に出ずべしという世論が盛んであったので、自分も海外植民地へと志し、今の拓大、当時の東洋協会植民専門学校に入学し、大正八年（一九一九年）に卒業して、朝鮮殖産銀行へ入行』したとある。

父は四国の田舎町の庄屋の次男坊で、田地田畑はそれなりにあったが、当時の憲法では家督はすべて長男が相続し、次男三男は外に出るしかなかった。

ここでやっと父と母は顔を合わす。母は長崎高女を卒業して、元山の祖父方へ寄留していた。そこで殖銀

元山支店勤務の父と邂逅した。

広辞苑によると「植民とは、ある国の国民または団体が、本国と政治的従属関係にある土地に永住の目的で移住し、経済活動をすること」とある。

当時二十七と二十一の父母の意識に、植民地で暮らすという自覚はあっただろうか。あるとすれば、わずか父の方に、お国の方針に従うという自負心があったくらいだろう。

大正十一年（一九二二年）二人は見合い結婚をし、終戦までの二十三年間、父はひたむきに銀行業務に専念し、母は八人の子どもを懸命に育てた。忠州で暮らしたのは昭和十二年からの八年間だった。

津和子が小さいときに聞いた忠州の話は、豊かで華やかでまばゆいくらいのものだった。お姫さまや王子さまが出てくるおとぎ話のように聞こえ、兄や姉が羨ましかった。乳飲み子で帰ってきた津和子だけがきらびやかな世界を知らない。それが口惜しい。

でも、日朝間の本を読んでいくうちに、その贅沢な暮らしは朝鮮の人々の犠牲の上に成り立っていたのではないかと思えてきた。その一方で、日本は朝鮮に鉄道を敷き、電気を通し、道路を建設して貢献をしたと主張する人もいる。

略奪したのか、貢献したのか、どちらが本当か。実際に忠州に行ってみるとわかるかもしれない。

二番目の姉からとつぜん人形が送られてきた。

それは津和子が「みんなで忠州へ行きたい」という名目で、旅行積立預金に他のきょうだいの分も振り込みをしているのを知ってのことだった。

「わたしは行けるかどうかわからないけど、あんたの気持がうれしいので、新作の人形を送ります」

小さな便箋にそう書かれていたその人形はとても奇妙なものだった。お姫さまや王子さまではなく、壁面に掛ける額のようなのだが、飾ってみると面が盛り上がるように見える。

「何これ。デスマスク？」

そう思えるほど不気味で、人形ということばからくる可愛らしさはどこにもない。ただ、何かを主張しているようには感じられた。

この姉は四人姉妹の中で、自分がいちばん母さんに似ていると自負している。嫁いだ先が家父長制そのままの旧弊な姑小姑付きの家で、壮絶な嫁いびりに耐えながらも頑張ってこられたのは、母さん似の根性があったからだと自分で述懐する。津和子など想像もつかない苦労があった。

それだけに余計にいっしょに行きたい。糖尿病の夫の世話も大事だろうが、今までの忍従の生活を顧みれば、二泊三日の旅行くらい許されてもいいではないか。費用の一部をきょうだいが肩代わりするといえば、頭の固い義兄も認めるのではないかと思って、津和子は余分に毎月旅行基金を振り込んでいた。次姉を『ビルマの竪琴』の水島上等兵にさせたくなかった。

「ありがとう。そういってくれるのはうれしいけど、やっぱり無理なんじゃないかな」

人形のお礼の電話をかけるとそんな返事が返ってきた。もしダメだったらお金は次兄にまわそう。そしたら、あの兄も行く気になるだろう。

「でも、あの人形の顔って、すごいね。いじめられた姑さんへの怨念かなにか？」

きょうだいの誼みでそんなことを聞いてみたが、一笑に付された。そうではないが、それに近い気持ちが込められていたのかもしれない。

（3）

一九四五年八月十五日

津和子は朝鮮人の新しい乳母に抱かれて、オンドルの部屋で昼寝をしていた。オンドルは床に油紙が貼ってあり、冬温かく、夏涼しい。

次兄が目を怒らせて学校から帰ってきた。

「何でや！」

台所の水甕から柄杓で汲んだ水を飲んで、どたどたと応接間に行き、ソファに身を投げ出した。

「何で神風は吹かんかったんや。吹くっていってたじゃないか」

校長先生は毎月八日の大詔奉戴日に、「神国日本は最後には神風が吹く」と自信たっぷりにいい、みんなで戦勝祈願をした。

忠州市内に三つある国民学校で、本町小学校は日本人生徒ばかりだ。たった一人朝鮮の両斑の子がいたが、そのほかの朝鮮人は慶北と桂林の国民学校に通っていた。大詔奉戴日にはその二校も忠州護国神社にやってくるが、お参りの順番は本町小が先頭と決まっていた。

朝鮮人学校でも日本の教科書を使って、朝鮮人の先生が日本語で授業をする。名前も日本人風に改名したのは、やがて彼らも日本皇民になるためだった。

それが今朝の登校途中、朝鮮人の子どもが数人かたまって、「ニッポン負けた。ニッポン負けた」と囃してる。次兄は「何いうか」とにらみつけたが、いつもと違う彼らの挑みかかるような態度に不安を感じた。

天皇の玉音放送の後、「死ぬまで戦え」といっていた担任が、「わたしたちは内地へ帰ることになる」という。裏切りだ。子どもはみんな戦うつもりだったのに、軍人も校長も大人はみんなウソツキだ。

ソファにうつ伏していると涙が流れた。クッションをぬらしながら、次兄はいつしか寝入っていた。

赤ん坊の津和子はぐずぐずと泣いていた。お腹がすいたのではなく、不安な気持ちになったからだ。

家の外が騒がしい。夕方から夜になって騒ぎがいっそう大きくなった。「マンセー、マンセー」という声がうねるように聞こえてくる。何かのはじける音もする。

「外に出てはいけません」という母さんの声。なのに次兄は晩ごはんの後、家をぐるりと取り巻く塀の上を伝って、朝鮮人街を偵察して報告した。

「母さん、大変だよ。すごい人が出て、日の丸の旗を持って行列してるよ」

「ばかだなあ。あれは日の丸じゃない。太極旗という朝鮮の旗だ」

「ええ。朝鮮にも旗があるの？」

「みんな、お父さんが帰ってくるまで、オンドルの部屋にいなさい。中から鍵をかけるのよ」
「父さん、どこへいったの？」
「忠州中の日本人の男はみんな、町の映画館に集められているんだって」
「だいじょうぶかな、父さん」
「うちの父さんは銀行でも朝鮮人にやさしかったから、きっとだいじょうぶよ」
「赤瀬くんのお父さん、警察の署長をやってただろう。政治犯を釈放しろといわれ、後でピストル自殺したらしいぞ」
兄や姉たちが興奮した口ぶりで話している。
玄関を乱暴に叩く音がする。
「われわれは青年保安隊だ。この家には武器が隠されているだろう」
廊下を駆け上がる靴音がした。気丈な母が応対している。
「あなたたち、履物を脱ぎなさい」
「何いうか。日本人にはもう何もいう権利はないんだ」
座敷の刀箪笥から十振りの日本刀が持ち出された。
応接間からオルガンや琴も、子ども部屋の空気銃まで没収された。
津和子は激しく泣いた。次姉が抱きしめてくれるが、なかなか泣き止まない。
夜遅く帰ってきた父がけわしい顔付きで二十歳の長姉に告げた。
「すぐに頭の毛を切るんだ」
「いやよ。丸坊主になるのはいや」
坊主にはならなかったが二十歳の姉は短髪にして、人がくるごとに押し入れにかくれた。
「みんなリュックに大事なものを詰めて持って帰るのよ」
母にいわれて、次姉は大きな人形を抱えた。
「遊びに行くんじゃないんだから、そんなものは置いて行きなさい」
姉は抵抗した。「絶対持って帰る……」。それを長兄

がなだめた。「人形のお葬式をして上げよう」。日本へ引き揚げる前日、奥の野菜畠に布にくるんだ人形を埋葬した。「ごめんね、いっしょに日本に帰れなくて」。津和子も盛土の上をなでながら、「ネンネ、ネンネ」といって姉を余計に泣かせた。

忠州を去る日、忠北線の忠州駅は大荷物を抱えた日本人家族でごった返していた。みんな逃げ帰る者ばかりで、見送る人とていない中、一人だけ若い朝鮮人が駆け付けた。

「支店長さん、奥さん。お世話になりました。気を付けて行ってください」

「ビンさん。ありがとう」

「坊っちゃんたちもお元気で」

ビンさんは銀行の小使いさんで、家の手伝いもよくしてくれた。創氏改名で父はその人に水田ひろしという名を付け、「これからはビンさんといってはいけないよ」といったが、誰も水田さんという者はいなかった。

黒々とした貨物列車の窓から、津和子は無邪気に手を振った。

「バイバイ、ビンさん。またね」

（4）

二〇〇二年十月十三日。

東京、名古屋、大阪、高松から飛行機に乗って、韓国・仁川国際空港にきょうだい八人全員が集まった。前年、ニューヨークの貿易センターに旅客機が突入するテロがあったので、集合したロビーではみな「怖かった」と手を取り合って再会を喜んだ。旅慣れしていないので、飛行機に乗るだけで異常に緊張する。

「お葬式には行けなくてごめんね」

津和子は次姉をみつけてまず謝った。昨年暮れ、店のいちばん忙しい時期に姉の夫が亡くなったのだ。

「いいのよ。でもあの人、最期に女房孝行をしてくれたわ」

病人の世話であきらめていた忠州へのきょうだい旅行が実現して、姉の表情は明るかった。ぐずっていた

次兄も皆にいわれて参加することになった。積み立てた旅行基金が役立った。

「ほら、見て。これが京城の秋の空よ」

空港からソウル市内のホテルに向かうマイクロバスで、在鮮期間が最も長い長姉が窓を見上げて声を張る。

「あんたが赤ん坊のとき疫痢に罹って、母さんがタクシー乗せてこの京城の病院まできたのよ」

「もう、その話は何回も聞いたって」

姉妹のやり取りにきょうだいたちがどっと笑う。どの顔にも普通の旅行とは違う、子どもに返ったような浮き浮きした表情が出ている。六十年近くも懐かしく恋しく思っていた所に全員で来れたことで、満願成就した歓びがあふれていた。

夜、ホテルから歩いて明洞や骨董店街をみんなで散策する。日曜日は歩行者天国になるのか、通りにいろんなパフォーマンスの人や屋台が出て楽しい。

「この時季だと焼き栗売りがいるんだがな」

むかしの忠州では、炭火で焼いていたそうだ。今はトッポギやオデンの店が目に付く。

街を歩く若者たちの姿には、戦争とか占領の名残などどこにもない。日本とはちょっと違った化粧の目立つギャルたちが、紅い唇をあけて笑い合っている。

長兄や長姉がかつて見た風景は、もうこの国では見られないにちがいない。

「ぼくらが忠州にいた頃、一度サッカーの日韓戦をやったことがあった」

ソウル市内の散策を終え、ホテルに戻ってロビーでくつろいでいるとき、長兄が周囲を見回しながらいった。ロビーの壁面には今年六月に行われたＦＩＦＡワールドカップ日韓大会の、韓国チームの活躍を撮った大写真が貼りめぐらされている。日本はベスト十六だったが、共催国・韓国は堂々の四位で世界を驚かせた。

「へえ。そんな頃もプロチームがあったの？」

津和子はびっくりして尋ねた。

「いや。小学生同士の蹴球試合だったけどね。キミも出たんじゃないか」

長兄はからかうように一つ違いの次兄を指差した。

終戦一年前、本町小学校でのことだった。

その年の六年生にはワンパク坊主が多かった。昼休みの運動場は六年生が蹴球ばかりして、下級生は危なくて遊べない。先生が注意しても直らない。そんなに元気なら対外試合をしてみたらと、慶北小に声をかけた。慶北は朝鮮人ばかりの学校である。

土曜日の午後、試合は始まった。運動場の六年生もそれを見守る下級生も、下流国民の朝鮮人に負けるはずがないと思っていた。

序盤は互いにボールの奪い合いが続いた。本町小の攻撃はただゴールに向かって蹴るだけの単調なものだった。それにくらべて慶北は正確なパス回しで本町を翻弄し、疲れてきたところで怒涛のように押し寄せた。

「奴らはボールにヘディングするんじゃなくて、わしらの顔や頭を狙って頭突きをかましてくるんじゃ」

本町小は一点も奪うことなく〇対九で惨敗し、慶北は意気揚々と引揚げて行った。

「あのときからわしはイヤーな予感がしたんじゃ。戦争も負けるんじゃないか、みたいな」

次兄はワールドカップの写真を眺めながら、力なくつぶやいた。

明日はいよいよみんなでその忠州市へ入る。

ゆうべ寝たのが遅かったせいで、翌朝バスに乗ると津和子はすぐに眠ってしまった。

ハッと目がさめ、窓外に視線をやると、車は都会の街並みをはなれ、両側に田んぼが広がる田舎道を走っていた。遠くの野菜畠で農婦がひとり作業をしている。車一台が通れるくらいの細い道が左右に延びていて、そんな道でさえポプラ並木がずっと遠くまで続いていた。

不意に津和子の胸に懐かしいという気持ちがあふれてきた。ポプラ並木は朝鮮独特の風景なのに、そうい

う景色を眺めるのも初めてのはずなのに、この田園風景の中に身を置くと、きれいとか物珍しいではなく、ただ懐かしい思いでいっぱいになる。旅行をすると既視感というのはたまにあるが、それよりもっと胸の内を熱くするような心のざわめき。

どうしたのだろう。

津和子はそんな自分の変化をいぶかしく思った。自分がこの地で生まれた感傷なのか。

しても、たった一歳半で産土のせいだろうか。そうだとこの地を離れた赤子にそんなものを見たり食べたりしたが、こんな気持ちにはならなかった。この農村のうソウルに着いて、いろいろとしているのだろう風景は自分にいったい何を示そうとしているのだろうか。

そんな感情に突き動かされているときに、後ろの方からハーモニカの音色が聞こえてきた。すぐ上の兄が吹いているのがわかった。眠っていたほかのきょうだいも目をさまし、演奏を聞きながらバスの外の田舎の景色に見入っている。

♪ふけゆく秋の夜　旅の空の　わびしき思いに　ひとり悩む……

ハーモニカの音色はただでさえ哀愁を帯びるのに、この選曲はあざとい。津和子は鼻の奥がツーンとなりかけてくるのを感じて首を振った。

♪恋しや　ふるさと　なつかし父母……

隣席の姉はバッグを引き寄せ、急いでハンカチを取り出している。その向こうの兄も鼻をクンクンいわせて落ち着かない。

この兄は中学生の時からよくハーモニカを口にしていた。津和子とは四歳しか違わないので、忠州の話ではいつも疎外感を味わっていたはずなのに、このパフォーマンスは何の真似か。

♪夢路にたどるは　里の家路

洟をかむ音や咳をする音が方々でする。みんな泪でぼやけた瞳で川沿いの風景を眺めている。

演奏はまだ続いた。これもまた、この兄なりのきょうだい思いの行為なのだろう。

忠州市に入るとガイドは運転手に頼んでまず市庁へ車をつけた。朝鮮動乱で市の大半は焼けてしまったが、その後の復興はめざましく、庁舎の規模は意外と大きい。現在は二十五万人を超える人口を抱えているという。市庁で昔の地図を探すが、見当職員に尋ねると、別棟の奉仕課のような所へつれてってくれた。そこで大体の目星がついたようで、上の「ああ、あの木……」

長兄が右手を伸ばしてバスの前方を指差した。みんな一斉に目をやる。最初に反応したのは長姉だった。何の木なのか枝ぶりがっしりした大きな樹が二、三本、小公園の鉄棒の脇に立っている。

「あれは郡庁の庭にあった樹よ。父さんの銀行は郡庁のそばにあったから、この近くのはずだわ」

小公園にバスを停め、全員下車して朝鮮殖産銀行忠州市店を探す。だが、看板やポスターなどに漢字は一字もない。忠州という字もない。表記されている文字はすべてハングルで、これを読める者はきょうだいで一人もいなかった。ここで生まれ、少年少女期まで育ったというのに、文字の一字も読めないし、簡単な会話もできない。

津和子はなんだか、昼なお暗い密林の中に分け入ったような心細さを感じた。五十七年前まではそんな状況の中でも、兄や姉たちは何不自由なく快適に暮らしていたということが、不思議であった。どうしてそういうことができたのか。それが植民地の現実か。

こうなると日本語ができる中年のガイドだけが頼りだった。

突然「あった、あった」という声が前の方から聞こえた。「この表玄関に見覚えがあるわ」という次姉の声にうながされて見やると、レトロというか、かなり年期の入った小ぢんまりした事務所の入口があり、左右両脇から三段の石段を上ると外扉がある。

「違いますよ。ここは証券会社で銀行じゃありません」

外壁のポスターを見てガイドが注意する。津和子には判断する記憶材料が全くないが、証券会社と聞いてハテ?と首をかしげた。業種が似ているではないか。次姉はおそるおそる正面の内扉を押し、中に入っていった。そしてすぐに引き返して、声を殺していう。

「お姉さん、兄ちゃん、早くきて。ここ、そうよ。だって父さんの座っていた椅子があるもん」

エエ！　と声にならない声をあげ、みんながいっぺんに建物の内部になだれ込んだ。視線の位置がやや腰高な感じの窓口にいた女子事務員が、驚いた表情でこちらを見た。

奥行きはあまりないが、天井が高く、照明が薄暗くて、昔の銀行の雰囲気は感じられる。中段に男性社員一人と、奥の正面に支店長らしい男の人が、肘掛けのついた椅子に座っていた。

「本当だ。父さんの椅子だ」

上のきょうだいたちが互いに体をつつきながら嬉しそうにいう。男性社員が何事かと緊張した面持ちでやってきた。あわててガイドが事情を説明する。その間にも兄や姉たちは無遠慮に室内のあちこちを指差しながら口々につぶやいた。

「父さんの席の後ろの金庫はそのままだわ」

「いつも裏口から父さんのお弁当を届けにきたの」

「あのドアの向こうは土間の食堂だったね」

「そうそう。玉突き台が置いてあった」

「いや、卓球台だったよ」

奥の肘掛椅子から支店長らしい男が立って、ガイドの方に近付いた。クレームをいわれるのだろうと津和子は身構えた。

話し終えたガイドが長兄に説明した。

「ここは証券会社のオフィスですが、昔は銀行だったそうです。皆さまのことをいいましたら、奥の部屋も見学していいとのことでした」

ワーッと安堵と感謝の声が洩れる。

お言葉に甘えて脇のドアから裏に回ると、がらんと殺風景な土間があった。

「あ、ここでビンさんに遊んでもらった」
「この窓から見える裏庭にわとりを飼ってる家があったな」
記憶とはおもしろいものだ。頭の中でかたまっていた塊がひとつ溶け出すと、また次の塊が現われる。
それにしてもよく残っていたナと津和子は感嘆した。市の大半が焼けたというのに、七十年以上前に日本人が建てた殖産銀行の社屋が、今なお使われていようとは。「父さんに一目見せたかったネ」は、きょうだいみんなが思ったことだった。

（5）

銀行はわりとすぐにみつかったが、一家が住んでいた家をさがすのは簡単にはいかなかった。
手がかりは、南向きの座敷の縁側から東南の方向に煙草専売公社の煙突が見えたということだけ。ほどなくその煙突は見つかった。しかし、専売公社はあるのだが、周囲が変わってしまっているので、この近くのはずなのに、核心に行きつかない。
老人のいる家を訪ね、お婆さんに尋ねるがわからない。あの煙突の位置から見てもうすぐの周りをうろうろするもどかしさ。
決め手はテニスコートだった。
これだけ町の様子が昔と変わっているので、まさか家の横にあったテニスコートなど潰されていると思い込んでいたのだが、通りかかったおじいさんに試しに聞いてみると、近くにあるという。
教えられた角を曲がると、ポーンという澄んだ硬球の打球音が聞こえてきた。
下の姉が以前こんな作文を書いていた。
『夏の終わりがけの夕方。茶の間の円く大きな食卓に夕食が並び、母にお父さんを呼んでくるようにいわれた私は、家の横のテニスコートに行った。赤い夕陽の映えるコートからポーンポーンと軽いボールの音が響いてくる。「父ちゃん、ごはんですよ」と大声で呼びかける。若い行員とテニスに興じていた若い父さんの姿

が、映画の一シーンのように浮かぶ』

当時七歳だった姉の目に焼きついたテニスコート。それがそのままの姿でそこにあった。よじ登って遊んだというローラーまで。

十人家族が住んでいた和風の家は鉄筋三階建ての独身寮に変わっていたが、屋敷周りにあった樹やブロック塀などは昔のままだという。

五十年以上もの時を経て、奇跡的に残っているそれらを見て、兄や姉たちはことばも出ずに立ち尽くしている。

そうか。これが我が家か。ここに一家は住んでいたのかと、津和子もしみじみ周囲を眺めた。あのポンプ小屋で兄たちが鷹をつかまえた。あの銀杏の樹の下で姉は落葉に埋もれて遊んだ。今も黄色い実をつけている杏の木には、朝鮮の子らも採りにきていた。

この敷地の内側で、ニッポンの坊っちゃん嬢ちゃんはぬくぬくと育った。一歩塀の外に出ると、そこには藁屋根の粗末な家に、ちがいて、塀の中から漂ってくるお腹をすかせた朝鮮の子どもたち

鼻をひくつかせ、うらやましげにそこにあった。よじ登って遊んだというローラーまで。

十人家族が住んでいた和風の家は鉄筋三階建ての独身寮に変わっていたが、屋敷周りにあった樹やブロック塀などは昔のままだという。

五十年以上もの時を経て、奇跡的に残っているそれらを見て、兄や姉たちはことばも出ずに立ち尽くしている。

そうか。これが我が家か。ここに一家は住んでいたのかと、津和子もしみじみ周囲を眺めた。あのポンプ小屋で兄たちが鷹をつかまえた。あの銀杏の樹の下で姉は落葉に埋もれて遊んだ。今も黄色い実をつけている杏の木には、朝鮮の子らも採りにきていた。

この敷地の内側で、ニッポンの坊っちゃん嬢ちゃんはぬくぬくと育った。一歩塀の外に出ると、そこにはお腹をすかせた朝鮮の子どもたち

子どもの頃の津和子そのものであった。

これが忠州の家。幼い頃、兄や姉からさんざん聞かされ憧れていた昔の我が家。

「そうよ。ここよ。ここに埋めたのよ」

八重桜の向こうで次姉が声を上げた。つられて皆が集まると、野菜畠を指差している。引揚げの前日、大切にしていた人形をここに埋めたのだ。

「あんたがネンネ、ネンネといって土をかけたのよ」

姉にいわれて津和子は畠の畝を見つめた。もちろんそんな記憶はないが、畝の土の盛り上がりを見てハッとした。昨年姉が送ってきた自作の人形、デスマスクのような面容と、畠の土の凹凸がそっくりに見えた。まるで今もこの下に人形が眠っているかのように。

その夜はフレンドリーという名の忠州市のホテルに泊まった。夕食はそこのレストランで海鮮鍋をつつい

たが、絶品であったのに、みんな味もわからぬくらい興奮している。

ここで鮮明になったのは八人のきょうだいの中でも、忠州組と四国組の二手に分かれることだった。朝鮮でいい思いをした上の四人と、開拓貧農生活をモロにかぶった下の四人とでは、忠州の印象が自ずと違う。

津和子は自分が末っ子の甘えん坊であるせいか、上四人に妬みのような思いを抱くことがある。自分の知らない上流生活を体験したということが妬ましい。若い父母に抱かれたことも妬みだった。さらに今夜のように上四人のはしゃぐ姿が癪の種にもなる。

津和子とすぐ上の兄はほとんど話の輪に入れないでいた。はしゃぐ兄や姉を横目に、下の者同士でかたまってぼやいていた。

「兄ちゃん。きょうのバスの中で、何であんなハモニカを吹いたん？」

「そりゃ、みんな忠州がふるさとなんじゃないかと思って、盛り上げてやろうと……」

わたしは違うよ、と津和子は即答した。みんなもそれは違うと思う。

上の者は在鮮期間が長いし、思い出もいっぱいあるだろうが、だからといってここがふるさととはいえないのじゃないか。十五、六歳で引揚げた者にとって懐かしい場所には違いない。でもそれは借り物というか、根差した所ではない。どこか後ろめたい気持ちも混じっているような気がする。

「半分のふるさと、ということかな」

兄はどこかで聞いたようなことをいった。

わたしにとって忠州とは何なのか。きょうだいにとっては何なのか。両親を含めうちの家族にとって忠州とは何だったのか。津和子は考えようとした。

持ってきたウイスキー一本では足りないくらい、夜遅くまでみんなの話はキリなく続いた。

翌朝の朝食会場に次姉は降りてこなかった。頭が痛いらしい。ゆうべしゃべり過ぎ、飲み過ぎたのだ。

きょうだい旅行も今日でおしまいである。あれほど長い間みんなで忠州に行きたいと願っていた旅行も、終わってみればたちまち過去の出来事のひとつになっている。

朝食後、最後にみんなで本町小学校跡に行こうということになった。日本人子弟ばかりが通っていた国民学校で、今は町の公園になっているという。

ここは懐かしい風物はあまり残っていなかった。敗戦一年前の日韓小学生サッカー試合をした運動場もない。それでもこの学校に通った兄姉は、どこかに思い出のかけらでも見つけられないかと、周囲に目を配りながら歩いていた。

津和子にとっては何の思い入れもないので、一団の最後列をぶらぶらついて行くと、前方で長姉が何かしゃべっている。韓服のようなチョッキを着た地元の老人と話しているらしい。物怖じしない性格なので、昔ここに住んでいたとでもいったのだろうか。

急に老人の態度が変わった。両のこぶしを握りしめ、韓国語で怒鳴り出す。意味はわからないが、激しい怒りの感情は伝わってくる。日本人の感傷旅行が気に入らないのか、姉のことばの中に地雷が混ざっていたのか、ことばが理解できないので、どのように扱っていいのか、津和子はただ怖くて、兄の背に隠れていた。戦争に負けた日もこんなだったのだろうか。

ほかのきょうだいがもてあましている時、次兄がふらふらと老人に近付いた。この兄は、子どもの頃川の堤に遊びに行き、釣りをしていた朝鮮の子から釣り竿を取り上げて自分で釣りをした。抗議をする子に下駄を振り回しておどしたという、きょうだいきっての乱暴者である。

今朝も朝からビールを飲んでいた。けんかにならなければいいがと心配して見ていると、次兄は老人に向かって何やら話しかけ、軽く頭を下げている。すると、それまで怒っていた老人が態度をやわらげ、顔を横に向けて歩き去った。

「わあ。兄さん、すごい」

「いま何ていったの」
妹たちの喝采に兄は照れたような、得意なような笑みを浮かべて、ぼそっとつぶやいた。
「ハラボジィ……ミヤネヨ……」
「ふうん。それって、どういう意味？」
「いやぁ、わしもようわからんけどな。子どもの時にいうとった朝鮮語が急にぽろっと出てきたんよ。どういう意味だったかもわからずに。何でもええからいうてみた」
酒臭い息を吐きながらそういい、みんながどっと笑った。そんなことに到らずにすんだので、一同ホッとして帰途についたのだが、ホテルにもどる道すがら津和子は今の出来ごとについて考えていた。
老人は我々が日本人とわかって怒り出した。年齢的にも十分にない時代に、山の家の掘りごたつで聞いた忠州の話は、津和子をおとぎの国へつれていってくれた。その頃の怨みの思いが我々を見て噴き出したのではないか。
うちの両親は忠州にいる間、特に朝鮮人をいじめたことはないらしい。父さんは朝鮮人行員にも親切にした。だがあの老人からすると「それが何じゃい」ということなのだろう。母さんはオモニにも大金の退職金を与えた。「だから何だというんだ」というのかもしれない。
そんなことで済んだと思うなよ。お前らのしたことは末代まで忘れはせんぞ。
聞きとれない老人の韓国語はそういっていたのではないだろうか。
きたときと同じように、きょうだいみんなとは仁川国際空港でお別れした。
二時間あまりのフライトの間に、津和子はひとり今度のきょうだい旅行について考えた。
忠州はあこがれの地だった。小さいとき、食べる物も十分にない時代に、山の家の掘りごたつで聞いた忠州の話は、津和子をおとぎの国へつれていってくれた。

その国を実際に見る感激。父の勤め先や家族が住んでいた家屋敷跡を発見して、兄や姉の流した涙。それらは甘く切ないノスタルジーの世界へいざなうものだった。

だが、それだけでよかったのだろうか。それはこちらの一方的な思いではなかったか。今度の旅を通してあらためて感じたことがある。

津和子たち八人きょうだいは、母方の曾祖父の代から朝鮮の国とかかわっている。曾祖父は大陸浪人の亜流として渡鮮し、財を築いたのではなかろうか。父はそういった在朝日本人相手に資金を運用する銀行で働き、津和子たちを養った。

自分たちはテニスコート付きの邸宅に住み、まわりの藁葺き屋根の家には地元の朝鮮人が住んだ。きょうだいたちが日頃接していた朝鮮人は銀行の小使いのビンさんであり、家の家政婦のオモニだった。いわゆる使用人・下婢といわれる人たちである。

津和子には朝鮮人を差別する意識はない。と自分では思っている。だが、ほんとうになかったのか。忠州に向かうバスの中で経験した、初めてきた土地なのに懐かしいと思う心と同じように、差別はしないと思っているのに三代にわたる祖先の血流から、自分ではそれと気付かぬうちに差別していることはないか。彼らに怨の思いが今も伝わるように、我らの内側にも侮りの連鎖が流れていないか。

行きたいという思いだけできてしまったが、忠州の人たちは我々をどう思っていたのだろう。再訪する前に、もっと何かをしておくべきではなかったか。

そんなことを思い浮かべているうちに、飛行機はもう日本に到着していた。ほんのひと飛びの距離しかない両国だが、考えるべき事柄は山ほどあるようだ。津和子は大きく溜息をついた。

三日ぶりに帰ってきた日、日本のテレビはどのチャンネルに合わせても、北朝鮮から帰国した拉致被害者五人のニュースで沸き立っていた。



冬の叢（五）

杉山　千里

――これまで――

沙月は四歳で、久瀬家の養女となった。

養父母は高末と香耶。高末は市職員を退職した後、土木会社を興した。香耶は書道家。しかし二人の間柄は破綻していて、沙月は二人にも家にも馴染む事は出来なかった。

沙月、二十四歳。クラフト陶房、竜窯のデザイナーと絵付けをしている。竜窯の代表はクラフト工芸家の

宗形竜作、娘のまさきもそれで名が通っていた。

竜窯の展示即売会で、沙月は栂原逸雄と出会う。その後逸雄は竜窯を尋ねるようになり、沙月との間柄も深まっていった。逸雄は竜窯にライターを忘れる。沙月が届けに行くと、逸雄と継母の美青が争い、逸雄は美青に刺されて意識を失っていた。その一月後、養母の言動に疲れた沙月が、病院前のベンチに座り込んでいると、逸雄が現れて家に連れ帰り休ませた。沙月はそこで美青の作品に出会うが、木工芸では無い女人の彫像を見てしまう。逸雄の長兄が、美青の作業場を手放すと伝える。

五　章

六十一

産業振興会館が落成して竣工式がすめば、その記念行事のトップが手工芸祭である。完成式典が午前中に終わり、午後から準備が始まった。大ホールの床に、縦横にカラーテープが張られ、間口六メートルの一区画に一事業所が入る。場所は抽選で決まっている。竜窯は北側。ホールの正面入り口から一番遠い。

始めに敷かれた水色のグランドシートは、希望者が体験するための電動轆轤と、水を張った桶や細工道具、出来上がった作品を置く棚のたぐいてしまっている。沙月は吹き溜まりの枯れ葉のようだと胸を痛めた。

手工芸祭の実行委員会の顔合わせの席で、実演コーナーを置こうと提案したのは、実行委員長の宗形竜作。

「今回は地場産業の製品の、安売り祭りにするのはやめにしようやありませんか。我々は手仕事で、ええ生活雑器を安価に作ろうちゅう大志を抱いてやね、今日までやってきて、こんな爺さんになっちゃった訳やね。いや、若手さんもたくさんおって、心強いよ。僕らが轆轤を挽いたり、鑿を使った鉢で、たくさんの子供達

に給食を食べてもらってさ、器ってこんなに素敵なんやと知ってもらいたい。新婚さんに一生使いたいと思ってもらえる整理棚。僕らはそういう志を共有して、仕事をしとるんやわね。それがどんな作業なんか見て頂き、じゃあ自分もこんな仕事をしてみたいと思ってくれる人が現れたらと…」

竜作やまさきが手にすれば、鞣し革は器の口辺を滑らかに整え、水糸は張り詰めて轆轤から胎を切り離す。グランドシートの上であろうと、竜作もまさきも瑞々しく力ある轆轤を挽く。忽ち電動轆轤と、それを囲む木枠が据えられ、ヘラも水糸もそれぞれの位置に納まると、沙月は滅びから救われた気がした。

即売展の方はまさきが取り仕切り、沙月は配置図のコピーを見ながら、運び込んだ段ボール箱の中から包装紙やら荷造り紐やら、並べていった。

午後の大ホールは建設現場さながら。沙月は裏の搬入用の駐車場に出る時、東側の通用口近くに出来上がっていく、ウッドクラフトの木の郷工房に目を遣る。開催中木の郷工房の代表中宮圭に会うために、栂原逸雄が来るはずだと、まさきから聴いている。さすがに今日では無いと思いながら、目がいってしまう。

底冷えする半日は瞬く間に過ぎて、晩秋の日が傾いてゆく。三時を過ぎる頃、会場に飲み物が運び込まれた。ステージには祝いの生花の籠が並び、ロビーには案内所や宅配便の受付コーナーが整い、店舗も次第に全体が見えてくる。

百数十人がステージの前に集まってくると、竜作が押し出された。逃げ回っていたが方々から声が飛び、拍手が手拍子に代わると、観念してステージによじ登った。

「俺、高い所は苦手なんやわ」

それからよく透る声で短く挨拶を言い、乾杯の音頭を取った。会場はどよめきに溢れた。沙月は誰彼無く缶コーヒーを打ち合わせながら、熱気の中を漂って行った。年輩の工芸家は清々しく枯れて、瞳が澄んで

いる。中堅くらいの人は野心と謙虚が混ざり合う。自分は生々しく、余計なものを剥き出しているだろうか。

あてなく歩いてゆくと会場を半周して、気が付けば木の郷工房の前にいた。倒木らしい枯れ木を平らにして、白で書かれた看板は素朴さの中にシャープな雰囲気がある。竜作の奔放な文字とは対照的。

六十二

そこへ段ボールを抱えた青年が出てきて、店頭の板の上に中身を並べてゆく。片方の足を少し引きずりながら、きびきびと楽しげな様子だった。横目のフクロウ、びっくりして耳をピンとたて、口を開いているウサギ。青年は沙月に気づくと笑顔で会釈した。白みがかった木に、尻尾の大きな動物を取り出した所だ。この人達は乾杯の集まりに出ず、のんびり仕事を続けていたようだ。

「イタチ、ですか？」

おずおずと聞くと青年はにこやかに、

「ああこれね、オコジョなんだよ。イタチと親類だけど、これは山岳地帯に棲むの。雷鳥と同じでね、冬になると真っ白い毛に生え替わるんだね。すばしこくてなかなか姿を見せてくれないのは無い。都会に育ってクラフトを志す似たような人達は、沙月の周りにも大勢いる。

「あなたが作られたんですか」

「そう。この辺のウサギちゃんとか、やぶにらみのフクロウもね。人体彫塑を目指したんだけど、こっちの方が良くなってね。なんかこう、命が愛おしいって事が表現したくて」

青年はオコジョの次に、箱の底を何か探しているようだったが、これこれと沙月に差し出した。

「貰ってくれる？　今日会った記念ね」

三十を過ぎる位の青年はもう一つ同じ物を取り出すと、唇に当ててヒュッと吹いた。

「森の中でこれを吹くと、応えて啼く鳥がいるんだよ。そりゃあもう必死なんだから。嫁さんを探しているのかなあ。何か結婚詐欺をやってるみたいで気の毒になるよ」

沙月も真似て吹いてみた。青年のようにはいかないが、いずれ澄んだ音色になるだろう。

「仕事場は山の中ですか？」

見ず知らずの人に、こうも馴れ馴れしく尋ねるのは、逸雄が木の郷工房に行くかも知れないと、まさきからがっていて、熊もカモシカも、リスもいるよ」聴いていたから。

「標高千五百メートルだね。近くに撫（ぶな）の原生林が広

「大勢でお仕事をしていらっしゃるのですか」

逸雄に代わって聞き出しているような。行くかどうかさえ分からないのに。逸雄が二度と会うことも出来ない遠くに去ってしまっても良いのか。

いやよ！

胸の底から烈しい叫びが聞こえた。

いやよ！

はっとして口元を押さえた。声る。あの小高い丘の上の一軒家を、自分の居場所だとは思えないだろう。あそこに暮らし続ければ、美青との記憶は繰り返し甦るに違いないりに生きていくのが良いとは思えない。これからも投げや行く事を、放棄してしまった姿。

あんな風に人生を投げ出してし理な努力をして、無意味な人生を自分をごまかしているに過ぎない生きる事に納得したいと願い、底理想を投げ込み続けているに過ぎに絶望する事を避けようとして。信じたくて。しかし井戸は埋まらない。

「今は僕を入れて、三人だけになっちゃってね。独立していったヤツがいて。十人いて混み混みのエレベーターのような時もあったけどね。大勢の方が、何かと楽しいよ。わいわいやっているとしんどい事も片着

いていくからね。春の道普請なんか、大勢に限るね」
「道普請、ですか？」
「正月を過ぎると、毎年雪がどかっと降るわけね。それで林道が閉鎖になるの。春になるとみんなで除雪やって、車が通れるようにする訳ね。モグラのおじさん道普請」
この人には足に障害があるようだが、精神は何と健康だろう。その何と眩しいこと。
「工房は閉めるんですか」
「ううん。雪が来る前に、食糧やら日用品やら、運び込んで置くからね。雪がきたら輪かんにアイゼン着けて、林道とは別の獣道を使うんだよ」
店の奥から呼ぶ声がして、青年は「じゃあね。お互いにがんばろう！」手を挙げた。

六十三

ステージに近い西側の通用口に、逸雄は杭のように立っていた。間違いない。いつからそこにいたのか、白のパーカのポケットに両手を突っ込んで、真っ直ぐ沙月の方を見ていた。沙月は缶コーヒーを上げて合図を送り、散りかけた人混みを分けて小走りに近づいていった。
意識の片隅で、随分大胆な行動をしていると思いながら、会場の高揚感が沙月の心を軽やかにしている。五メートル、十メートルと近づいてきたが、次第に歩調を落とし、ホールの中程まで来て立ち止まった。ちょっと眼を切ったら逸雄の姿が消えていた。気づかないでどこかに行ってしまったのか。そんなはずは無い。距離はあっても確かに目が合った。
避けたの。そんな事……。
白いパーカは、この季節目に付きやすい。なのにどこにもいない。沙月は体が空っぽになった。これだけの人が動き回っているのに、誰もいないと感じる。そのままふらふらと竜窯の店に戻ってきた。
誰もいない。まだステージの辺りにいるのか。昼夜

無く作り続けて来た製品が積み上げられ、高い天井の無数のライトを映していた。その時、器の曲面に集まる円いライトが沙月を捉えた。それは無数の目のようにも、増殖してゆく細胞のようにも見える。無表情の不気味さ。

沙月を囲む空気が一瞬に変わった。憶えがある。忙しく動き回る人々の様子はそのままなのに精神が抜け去り、巨大な悪意が沙月の心を窺いはじめた。ふわりと体重が失われ、足が宙を踏む感覚に堪えて歩き出す。誰もいない場所にいては行けない。人では無くなってしまう。恐れて竦めば、その僅かな隙をついて天井からガラガラと崩れ出す。

沙月は恐怖に囚われ、大声で叫び出しそうになる。頭と口を押さえる。立ち働く人達も、まだ談笑する人達も、眼差しの据わったマネキンのように魂を失い廃墟と化す。そして沙月一人が取り残される。手足の先がしんしんと冷え、それなのに冷や汗が滲む。繰り返すイメージ。これは何だろう。

ただ一人周りから隔てられ、これまで辿ってきた過去の時間が背後に連なる。振り払えない力に両脇を固められ、ここまで歩いてきた。遠いいつか、この同じ恐怖に曝された。冷ややかな目に取り囲まれ、それは容赦なく沙月の脆さを見据え、滅ぼしてしまおうと狙い続ける。初めてそう感じたのは、久瀬の家に来て高末の前に立たされた時。

人の声がくぐもって、言葉が音になる。沙月は当てなく歩きながら、すれ違う人の相貌を挑むように見詰めた。どの人も歩きつめて悔いない前途があるだろうか。何と力強く嘉された生き方だろう。そのような人々の精神と生き方を信じて、マネキンの林を突き破ろうとした。そしてさっきまで包まれていた、広々と居心地の良い世界に戻ろうとした。

沙月はいつからかジーンズのポケットの、蛙のキーフォルダーを握り絞めていた。逸雄から預けられた物。ユーモラスな姿をしながら、どこか逸雄の人生を現す、

その金属の塊だけが、今実感出来るただ一つ自分以外の命と通い合うものだった。

会場にいられなくなり、外に出た沙月は敷地の境のロープを越え、裏手の穏やかな斜面を登って行った。日が傾いてゆく。丈の低い笹や、痩せた山躑躅が疎らに生えている。

逸雄の家は南方向。今どこにいるのだろう。無性に会いたかった。助けを求めたかった。大ホールで見たのは何だったのだろう。あの面差しを間違えるはずが無い。

少し登って見下ろすと、会館と広大な駐車場が真新しい。その隈無い明るさは自信に満ちている。ホールにいた時、新しい塗料や化粧壁の匂いが厭だった。溶け合わないその生々しさを、神経がずっと拒み続けていた。人工の何もかもが身震いするほど厭だった。伐り払われ、削り取られた傷痕を、丘陵は永遠に記憶し続けるのではないだろうか。そして長い歳月の果て、周囲の野生はアスファルトを破壊し、コンクリートを風化させ、やがて元の山野に還してしまわないだろうか。

逸雄は木の郷工房に行くだろう。それが一番良い。そして自分は今までそうしてきたように、一人を護って生きていく。

『宮木』のように待ち続けるのも、『比叡のなま女房』のように、あの世に救いを求めるのも、自分以外の誰かに心を預けること。心を預けるのは何だったのだろう。あの面差しを間違えるはずが無い。

少し登って見下ろすと、会館と広大な駐車場が真新しい。その隈無い明るさは自信に満ちている。ホールにいた時、新しい塗料や化粧壁の匂いが厭だった。溶け合わないその生々しさを、神経がずっと拒み続けていた。人工の何もかもが身震いするほど厭だった。伐り払われ、削り取られた傷痕を、丘陵は永遠に記憶し続けるのではないだろうか。そして長い歳月の果て、周囲の野生はアスファルトを破壊し、コンクリートを風化させ、やがて元の山野に還してしまわないだろうか。

逸雄は木の郷工房に行くだろう。それが一番良い。そして自分は今までそうしてきたように、一人を護って生きていく。

『宮木』のように待ち続けるのも、『比叡のなま女房』のように、あの世に救いを求めるのも、自分以外の誰かに心を預けること。心を預けるのは何だったのだろう。あの面差しを間違えるはずが無い。

沙月は木の郷工房の青年から受け取った笛に、唇を当てた。始め濁っていた音色が、透き通っていった。撫の原生林を吹き渡ってゆく風の音は、きっとこんなだろう。そして逸雄はそこに去る。

いやよ！　だめよ！

笹の葉を揺るがせて風がどっと吹いた。

手工芸祭の最後の一日前の三時頃、逸雄はようやく産業振興会館を尋ねた。駐車場の混雑で人出に疲れ、場違いな世界に紛れ込んだ心地で、正面の入場口を避け、人気の無い西側の通用口に来たものの、そのまま突っ立っていた。竜作に押されるように勧められたが、決断しかねたままだ。

そこに後ろから声を駆けられ、あわてて脇に寄った。ふり向くと五十代ほどの、痩せたバンダナの男が立っていた。皮を剥いたまの丸太を担いでいる。日焼けした顔に柔和な目が澄んでいた。

「ああ、すみませんな。そうだ。あのねえ、丁度いい。ちょっと後ろを担いでくれませんか。この先狭くてねえ、さっきも焼き物屋さんの店に当てちゃいまして、あれ割れるんですて、まいったなあ」

悠長に男が言った。

丸太の後ろを担ぐと、否応なく会場に踏み込んでゆく。男は世俗離れした様子で、狭い所もひょいひょい通り抜けて行く。六十過ぎだろうか。

「これ、樵ですね」

逸雄はつい声をかけた。

「良い色合いでしょう。君は木を知っている子だね」

飄々として透る声。ふり向いて凝視された気がした。この人の目には、あるがままの自分が見えている。不思議な安らぎを感じ、当惑する。

「これはね、深い森の中から引っ張り出されて、人混みに面食らって黙り込んじゃいましたよ。君と同じかなあ」

「何に作るんですか？」

「そうねえ。何になりたいんですねえ。後から来た子が、椅子やら本棚やらになって、出て行ってしまってもねえ。自分が何者とも分からないんでしょう」

担いだ木肌を愛おしそうに、男の指が撫でた。

「まだ何になりたいとも言わないんですねえ。後から

――中宮圭。

この人が、中宮圭。

逸雄は直感した。行く手に『木の郷工房』のモダンな看板が見えてきた。

「木が語り出すのを待つのですか」

美青がそう言ったのは、いつの事だろう。木の中に隠れている女人を彫り出すように、美青は繰小刀を使った。美青から作業場を取り上げるのは、息の根を止める事なのだ。

「そうねえ。待つといっても、ただ待つばかりでは無く、こちらから話しかけもしますよ」

木の郷工房の中から、逸雄より年嵩らしい青年が飛び出して来て、慌てて肩代わりした。少し足が不自由な様子だが姿勢が良く、朗らかな感じがする。右手の知覚を失った自分は、平然と振る舞っているが心はどうだろう。知覚を奪われた怒りが不意に溢れて、自らに驚く時がある。

あの時一瞬に覚悟を決めて、美を落として良いと思ったはずだ。われたと。何を今更。奪族に人生を捧げ、そして奪われた（許さないのよ。私が母親になれない事）

〈助けて！　逸雄！　助けて！〉

あの時何を覚悟したと言うのか。

「すみませんでしたね、君。丁度いてくれて助かりましたよ」

肩代わりした青年が呆れた顔をして、

「突っ立っていたなんて、実はまう。なんやかんやでみんなをすぐ巻き込むんだから」

立ち去ろうとすると、親爺さんが、

「君、誠にありがとうさんでしたねえ」

目を細めると、人なつこい面差しになった。一礼して背を向けてから、逸雄は笑って

た。たくさんの店が並ぶ右手の一番奥に、宗形竜作の手と分かる、竜窯の看板が見えてきた。

六十六

逸雄は退院してしばらくして、まさきに礼を伝えるため竜窯を尋ねた。まさきは留守だったが竜作が手工芸祭のパンフレットを渡してくれた。

「圭さの工房がガラス空きになって、誰かおらんかといっとらしたやろ」

「ああ、そうでしたか……」

あの日以前の記憶は、遠く朧な物になってしまった。

「圭さはさ、栂原美青さんのお名前も仕事ぶりも、よう存知とるし、その息子さんなら会ってみたいって言わしたんやわ。どうや、本気で考えてみんか。手工芸祭の間は、ずっとこっちにおらっせるでね。その間に一度会ってみいや」

未来という物が、もう自分には無いのだ。あれほど心を炙られた、虚しく生きる事へ焦燥は、どこに消えてしまったのか。あの時、何かがぷつりと切れた。二度と誰の人生もそれでも沙月に会って心が動いたら。そんな気持ちになれたのは沙月がそばにいたから。しかし一人に戻れば、損なう事無く生きていけるなら。

一時の想いは薄い煙のように消えた。

「お母さんは今でも目が離せんのか。入院しとらっせるんやらあ。後はお兄さんが看るって事になったって、まさが言っとったが」

「ええ、僕は会っていません」

「会っとらんて、あれからずっと？　まじまじと逸雄を竜作は情の籠もった驚きの目で覗き込んだ。

「はい。一度も」

美青に会いにいかない自分に改めて当惑する。

「面会出来んのか」

「いえ、僕が行かないだけです」

「ほうか……。ほりゃ許せん気持ちも分かるがなあ」

竜作もまた、逸雄が言い張った事を、信じてはいないだろう。

「許すのは僕ではないでしょう」

美青について語る事に戸惑う。竜作にしろまさきにしろ、美青と自分は余りに遠い人達なのだ。

「お母さんはずっと、あんたを待っておられると思うがなあ」

「彼女は親をやめて、ほっとしていると思いますが」

「ご本人が言わしたんか」

竜作の声が厳しくなった。ますます竜作が遠のいてゆく。厚意、情、道理……そのどれも、美青と自分からは遠すぎる。それは世間という場所でこそ、通用するものだろう。では美青と自分の間柄は何だろう。

「彼女は僕たちの母親が亡くなった後、父親に乞われて栂原の家に来てくれました。でも家族と溶け合えず、苦しんで苦しんで、心が壊れていきました。僕にも責任があります。彼女を救えませんでした。これでやっと解放されたのです」

口にする程に、美青の気持ちから遠ざかり離れ、嘘で塗り込んでいくようだ。嘘は言ってないが、しかし美青と自分について、どう言えばよいのか。美青が逸雄の怪我について取り調べを受けた時、黙って頷いたのも同じ理由だ。罪を逸雄になすりつけたのでは無い。

二人とも十年のうちに築かれてしまった密室に、閉じ込められた。そしてそれを、誰にも曝したくなかった。話すほどに、美青との間柄は別のものにすり替わってしまう。誰にも理解されようも無い世界に、二人だけで生きてきた。

「ほんで親をやめて、安気にならしたって。そりゃあんたの考え違いや。何としても謝りたいと、思っとられるよ。それが親や」

親。あの人が。分からない。分からない。

「詫びるって、あの人が僕にですか。何を詫びる事があるのですか」

逸雄の当惑が出口を失っているうちに、竜作は何を思ったか、

「それで中宮圭に会うのを、躊躇っとるんか。親の七光りは、誇りがゆるさんのか」
いいえ、と逸雄は首を振った。竜作の言う事が皆的外れとしか思えなかった。

六十七

逸雄は竜窯の実演コーナーを訪れた。竜作がヌタ（泥漿・粘土に更に水を加えて、轆轤に乗せた土を滑りやすくする等に使う）を前掛けで拭きながら、立ってきた。
「中宮さんと、多分今お会いしてきました」
「多分て、なんや」
「樋を担ぐのを手伝っただけで、ご本人かは分かりません」
「ほりゃあスパイやぞ」
まさきが気が付いて、竜作に代わって轆轤の指導を始めた。美青も本来ここにいたはずだ。厚手のスモックを着て、楽しげに箱物の組み方の実演をしていた。
「偶然です。店の中には入らなかったし」
「そこまで行っといて、逃げてきたんか」
そう。逃げてきた。断りに来たのだ。しかし中宮圭と出会ってしまった。そして惹きつけられてしまった。よりによって、木工の世界。美青から木工芸も木彫も奪った者が、どうしてその世界に踏み込める。場内アナウンスで、迷子の親を探している。耳の奥で中宮圭が言う。
（君は木が好きな人かな）
「どうも断る気で来たようやが、邪魔なだけです。いってええやろ」
「これほど混んでいるとは知らず、ありがとうございました」
「おい、待ちゃあせ。その手で鋸が挽けんちゅうなら、そりゃ甘えやぞ」
逸雄は右手に、捨て鉢な視線を投げた。
「栂原美青の息子が、僕ではね」

竜作の分厚い手が、逸雄の右腕を掴んだ。掴まれても感覚は無い。医師に言われた。知覚障害は心因性。美青には救いにもならないだろう。

「あんたが毎日どんな生活をしているか、俺の目は誤魔化せんよ。俺は終戦後、生きる意味を無くして、クラフトに出会うまでは、酒浸りの無頼漢やったんや。人生投げ出してな。どうなってもかまうもんかと、荒れに荒れたんや」

竜作のこんな烈しい目は、見たことが無い。

「あんたはほんな事はしとらんわなあ。ほやけど心んや。自分を見捨てて、もうどう目が言っとるわ。いつまでほうなっても構わんとそのる気や。俺なんかと違って、あやって人生を無駄にすんや。長い事いろいろあって疲んたにはまだ先があるくぼーとして過ごしたい。ほれた。ほやからしばらしあんたは違うわなあ。自分がならええやろう。しか

一番分かっとるはずや

竜作の声が喧嘩腰になる。通り行く人が何事かと振り返る。こんな所で宗形竜作とも者の相手などしている暇は無いはずだ。

「中宮さんにお断りして、帰りま

「いいや、俺はなあ、命より大切な娘を一人、殺したも同然なんや」

人形のようなたまきを思って、逸雄はどきりとした。そして美青を思った。

「初めてあんたと会った時、何やんであんたが、あの写真集を撫でて、ああそうやと分かったんや」

「だから何ですか」

竜作は逸雄の腕を掴んだまま歩の郷工房の方向だと分かる。

「ご迷惑になるだけです。これほ思わなくて……。自分で行きます

「言いたい事はあるやろうさ。しんのは、よう知っとるやろ」

これだけ強引に扱われて、腹が

ろう。こんな風に誰から、親身に心をかけられた事が無かった。父親さえ。

――美青には？

彼女との間柄が破綻したのは、いつから……。更に怒りや憎悪を投げかけられ、もう情愛など信じられなくなったのは……。

沙月。そう、ただ一人。しかし信じるのが怖かった。いつまた壊れてしまうだろう。中宮圭は……。

ああ、導いてくれる誰かがいたら。しかしもう何かを求めて良い資格が無い。ただひとつ残るものがあるとしたら、それは誰かの為に生きる事だ。自分を捨てて。

六十八

中宮圭は大勢の入場者の犇めく狭い通路を、悠然と先に立って行く。今のきの急ぎ足も、樹間を渡る風のようだ。

逸雄は木製の車椅子の前で、立ち止まった。竜作のアトリエにあった、写真集に載っていた。写真の感じより小ぶりだ。子供用と記されていたが、これほど小さかったとは。

少し前に姉が尋ねて来た。美青は重い鬱病で、一日ベッドで俯せに寝て、指先さえ動かさない。話しかけても応える事は無く、目も動かない。髪を切っても らったら、遠目には高校生のように見える。食べ物は受け付けないので経管栄養にしたという。

美青は中宮圭も、その仕事も知っているはずだ。面識もあるようだ。当然この手工芸祭にも参加していたはずだ。奪ったのだ。美青の人生も、生きる世界も、そして生きる意味も。繰り返し思い知らされる。

「君、僕と一緒に山に帰りましょう」

中宮圭の手が、逸雄の肩に触れた。竜作から一部始終を聴いているのだろう。誰も断罪しないのか。何故！

「僕では足手まといになります」
利き手の知覚を失ったから。それも聴いているかもしれない。それでも誘ってくれるのか。中宮圭は、ほお、と首を傾げていたが、そういえば耳が片方聞こえない子がいる、と言ってた。
「もう一人もそう言えば、片方の足が不自由でしたなあ。僕も胃と肺が少しずつ狭いし、女房も姉に腎臓を一つ分けていますよ。君は左手も足も使えそうだし、目も脳みそも大丈夫そうだ」
にこにこと笑う。春風のようだ。
そこへ大きな紙袋を下げた女性三人が、二人の後ろを通り抜けようとして、中宮圭にどしんとぶつかった。その辺に立てかけてある材木に見えるらしくてねえ。君の手のことも、忘れてしまいそうですから、不都合があるたびに言ってくれたらよいですよ。そのうちにみんなが憶えますからね。まあ、なあなあでやってるのが、ウチの伝統かなあ」
小さな車椅子にもたれた美青の、髪が見えた気がして、逸雄ははっとした。誰も乗っていない。中宮圭が気づいて、愛おしげに車椅子の押し手を撫でる。
「これは特注でしたが、乗るはずだったお嬢さんが亡くなってしまいましてね。受け渡しが済んでいましたが、引き取りましたよ」
「お幾つだったんですか」
「四歳でね、少し大きめにしましたよ。育ち盛りですから。成長に合わせて、あちこち広げられるようにしました。みんなで工夫してね。何人かでお宅に伺って、寸法をとって、どのように使うのか、どこに工夫が必要か、何度もやり直してやっと出来上がりましてねえ。彼女は喜んでくれて、でもその時はもう起き上がるさえ出来なくなっていました。僕が抱き上げて、何とか乗せました。それから家の中を全部回って、短い時間でしたが外にも出ましたよ」
中宮圭は遠い目をして淡々と語る。
「その夜遅く、彼女は召されましてね、知らせを聴いた工房の者達は、みんな声をあげて泣きました。未だ

に忘れられないんですよ。
してね。五月生まれだから
子でしてたよ。ああいう子
いのかもしれませんね」
誰かの為に何かしようと
いるのか。そんなものは無
れた。気が付くと涙が溢れ
ている。
皐月……沙月。
沙月が四歳で養女となっ
前で、雨に濡れそぼってい
（私、四歳になる前に、死
したらその先を生きなくて
皐月が生きる事から解放
が生きているのだろうか。
失った。では今、ここに生
「君ね、栂原くん。木の郷
ここにいてはいけない気が
中宮圭がもう一度、逸雄
名前は皐月ちゃんといいま
。誰からも愛される優しい
はこの世に長くはいられな
すれば、何かを失う覚悟が
かった。むしろ失う事を恐
たと聴いたのは総合病院の
た、あの日。
んでいればよかった。そう
すんだわ）
された時間の続きを、沙月
自分もまた生きる意味を
きているのは誰だ。
工房に帰りましょう。君は
するんですよ」
の肩に手を置いた。

六十七

会場を出た逸雄を、まさきが追
しい顔をしている。通用口の方は
の端に枯れかけた野菊が一輪、風
小豆色に霜枯れて、花だけが薄紫
まさきは先に立って径を外れ、
まりに行って振り返った。
「逸雄くん、あの時あのまま死に
まさきの強い視線に、いきなり
かれて、言葉が出なかった。
死にたかった……そうだろうか
。嵐の急斜面を転が
り落ちて行く勢いで、そのまま底
まえばよいと思った。それが一番
れる。美青を憎んだ時、生きて良
「……いいえ」
「なら良いわ」
まさきの目から、張り詰めてい
た光りが退いた。
人気が無く、砂利道
に揺れている。葉は
色を保っていた。
人目につかない日だ
たかったの」
胸の深い部分を射貫
の底まで、いってし
簡単に、方をつけら
い理由を失った。

「私を選んで引っ張り出した、さっちゃんの機転も込みで許してあげる」

「機転……て。ご迷惑をおかけしたのは僕たちだし、久瀬さんがあなたに連絡したのは……」

逸雄ははっと言葉を飲んだ。

「私は誰にも迷惑なんか、被っていないわよ。私に出動要請したさっちゃんを褒めているわ」

嵐の中で夏草に手をつく美青の姿が、ありありと甦る。まさきなら美青に動じないと、沙月は咄嗟に判断したのだろう。その時まさきの手が伸びると、いきなり逸雄の腕を掴み上げた。パーカのポケットの中で握り絞めていた車のキーが、枯れ草の上に落ちた。

「何しているの」

まさきが逸雄の手を開かせると、無数のひっかき傷から血が滲んでいた。キーを力任せに握り絞めて、加減が分からなかった。他にも幾つか火傷やら、切り傷の痕がある。逸雄は傲然とキーを拾い上げ、ポケットに突っ込んだ。

「それを弁解の材料にしないでね」

まさきも動揺を組み伏せた、向こう気の強さで言った。

「それなら大将にも言われました」

「憶えてるかしら。ウチにあった黒い素焼きの笛。さっちゃんはあれからずっと、笛造りに没頭しちゃったわよ。製品になって店頭にも並んでいるわ」

逸雄の怪訝そうな顔を見て、呆れたように微笑する。

「私はあなたたちに、お節介を焼きに連れ出したの。その笛の一件でよく分かったのよ。この先輩はさっちゃんに、何もしてあげられないって」

まさきから目を逸らすと、思わぬ勢いで、

「久瀬さんは行く手を求めながら、独りで生きていく人だと思います。まさきさんの作品に惹かれて、竜窯に来て陶板をつくり、笛と出会って自分の笛を作ろうとする。周りはただ彼女の人生の傍らに影のように存在するだけだと」

確かにそのような一面が沙月にはある。自分はそう

ではない沙月を見てきい。
「だからあなたが退こと言うつもりなの」
「笛は偶然でしょう。ません。そんな些細な
「そうかしら。あの笛逸雄くんでしょう。私些細ですって。さっちイターを、逸雄君の物よ。大真面目な顔でねを知って、どうやってわよね」
「もう……止めて下さの折り、僕が芳名簿に「何百人もの人が来たんだけ憶えていたというの」
まさきの強い視線が窯で沙月は、こういう人達に支えられて生きて行く。
「それともあなたは、何かしでかした人間だから、もう誰にも近づかないと言うの。病室で熱に浮かされながら、何度も繰り返していたわね。僕が加害者だと。あれはどういう意味なの」
逸雄は不快な物を見たように、目を逸らした。
「あなたはお母様の自殺を止めようとしたのよね。それがどうして加害者になるのかしら。誤って美青さんを傷つけたならともかく、怪我をしたのは逸雄くんの方でしょう。これでも案じているつもりなのよ。さっちゃんとあなたをね」
足許の一輪きりの野菊も、手の届かない日差しの中に咲くようだ。今、午前なのか午後なのか、秋なのか春なのか、自分のいる世界が分からない。時々聞こえるアナウンスが、遠い別の世界のざわめきのよう。
「あの時母が使おうとした繰小刀、あれは僕の物です」
「それも病院で聞いた。あなたの言葉に、美青さんは全て頷かれたそうね」

美青を犯罪者にさせないと言うより、二人の間に第三者が入り込んで裁くのを拒んだのだ。美青も同じ理由で頷いた。しかしそのために、あの時の逸雄の心と行動も、覆い隠されてしまった。

「手に掛けようとしたんです。あの時僕は……」

美青の項の熱さが右腕に甦る。もう何も感じないはずなのに。

「だから加害者だというの」

まさきの声は冷静だった。

「それだったらね、宗形の家の者はたまきをおいてみんな加害者よ。たまきが生きているのが不思議だわ」

たまきが近くの疎林を歩き回るだけでは無い事を、知るようになっていた。時々狂乱状態になって、信じられないような力で暴れるたまきを、家族が押さえようとする現場は、揉み合いなどという生やさしいものではなかった。殺すか殺されるか。知っているのは竜窯の者だけでは無い。それでもたまきを閉鎖病棟に置こうとしない。それはたまきが、家族以外の誰も、傷つける事が無いから。

今どこに行こうと、行き着く当てはない。百キロ走っても、千キロ行っても、風景が変わるだけ。自分が別の者になれる訳では無い。

「僕があの人の精神を滅ぼしたんです。結果がどうあろうと、それが事実です」

「それは逸雄くんの主観というものよ」

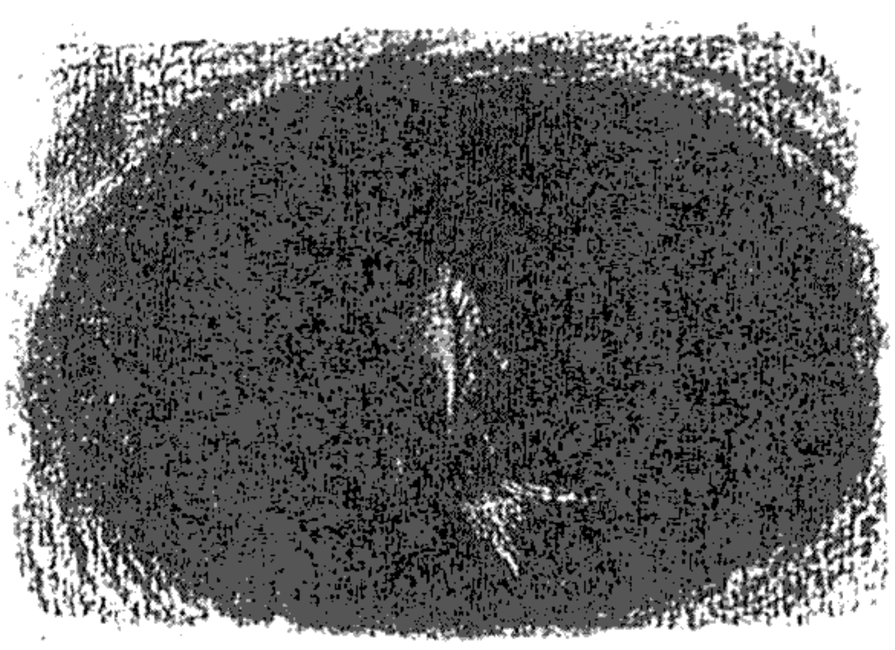
「他に何で自分のした事を認識できますか」

まさきの瞳にある光りは、たまきと共に生きる人達の家から盛れる、薄い灯りのようでもある。美青と生きた歳月。自分の心がなした事実を忘れ無い事が、せめてもの贖罪かもしれない。一礼して踵を返そうとすると、まさきがパーカの袖を掴んだ。

「ねえ、たまきはたった一人の人を失って、滅びてしまったのよ。魂ってそういうものよ。逸雄くん、さっちゃんがクラフトの世界で一人で生きて行けると、本

気で考えているの」
　見えるはずの無い会場の中の、竜窯の店にいる沙月が、その時こちらを振り返った気がした。逸雄の答えに、じっと耳を傾ける風に、生きて行くつもりなの。瞳が物問いたげに揺れている。
「これからずっとそんな風に、生きて行くつもりなの。そんな選択をする、どんな意味があるというの」
「人一人の魂を滅ぼした者が、また誰かに関わってその人を滅ぼす。そんな事が許されますか」
「美青さんがあなたに、そんな生き方を望まれると思うの」
「これは僕の問題です」
　宗形の人達は皆、それぞれの心でたまきを愛し護っている。自分は美青を愛し護るべきだと努力した。その違いの大きさが、今は分かる。埋める事は出来ない。母親を受け入れられない心の底にあるものを、沙月一人が理解し、頷けるのでは無いだろうか。
「大切な者をどう護るかは、人それぞれだと思います」
　沙月に向かって答えた。脆いロープを断ち切って、舫っていた小舟を押しやってしまった。辺りが一瞬真空になって、胸のどこかが砕け散った。小舟は流れ去り、逸雄も自ら発した言葉に押されて漂い出す。沙月が頷いたのか、否定したのか分からない。その時悲鳴を聞いた気がした。
　身勝手な一方的な断言だが、それが答えだった。その時初めて沙月の人生と運命を、自分との関わりにおいて眺めていた。

――次号に続く――



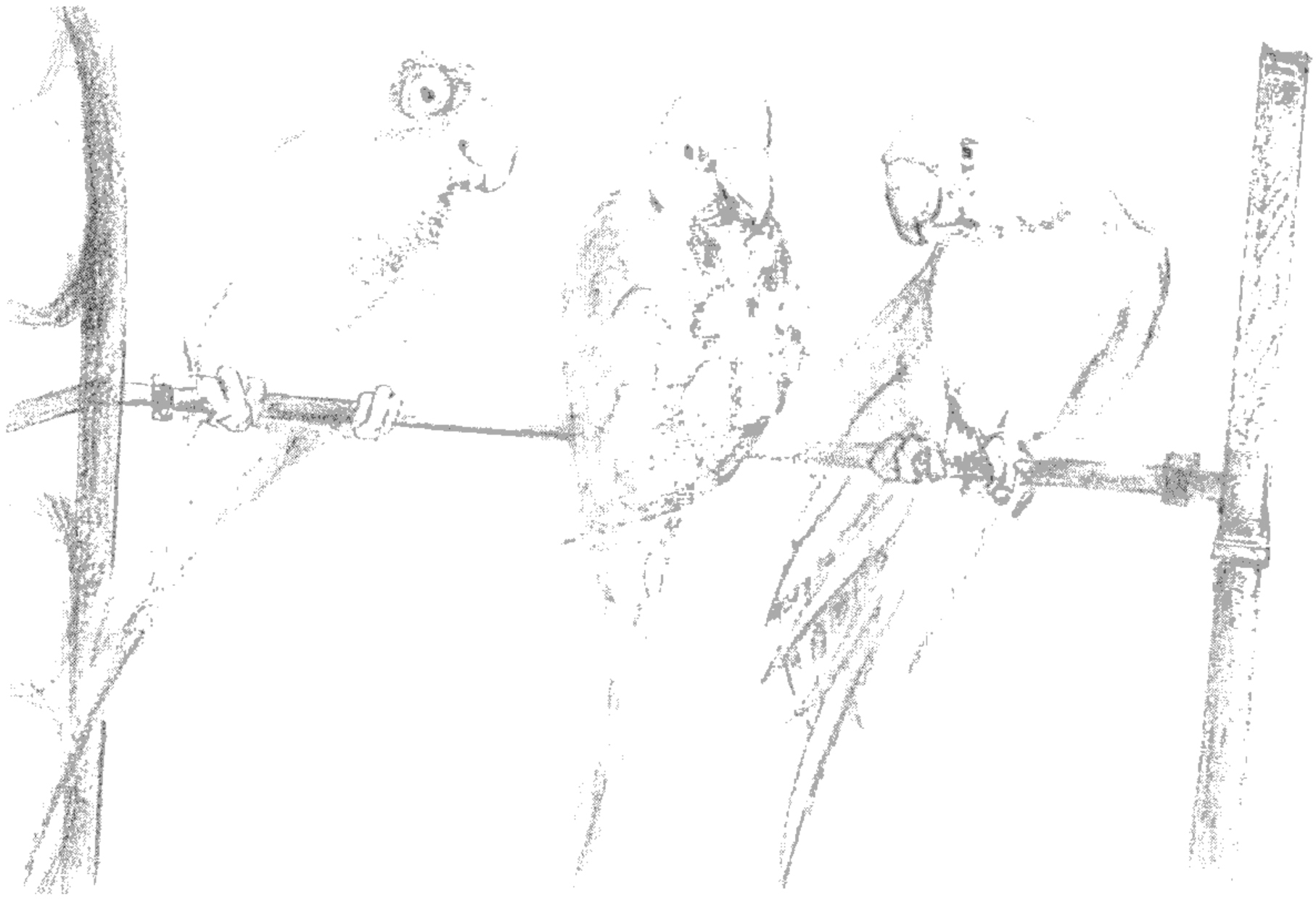
表紙のことば

コロナ禍の春

岡部　寛治

昨年の春先から広がり始めた新型コロナ感染症…。世の中その波に巻き込まれ大変な事態になっている。我塾パレットハウスに於いても、影響は大きかった。年に三回開催していた展覧会は、一月と三月は実施できたが、八月と今年に入っての一月下旬の展覧会は中止になった。春と秋に行っていた日帰りスケッチ旅行展覧会後の打ち上げ、忘年会等々塾生、講師の楽しみにしている行事も中止にせざるを得ない世の中の状況であった。そして昨年の四月下旬、五月一ヶ月は完全休業という形をとった。世間の人々が家に閉じこもり家族だけで過ごす時間が多くなった。同じ敷地内に住む長男一家も仕事はテレワーク、学校は休校という事で暇をもてあましていた。そんな折、息子が「親父（おやじ）、今迄の作品を整理したらどうか」と申し出てくれた。終活のためにも《何とかせねば…》と約六十年間描き続けてきた油絵や、アクリル水彩の作品群を見る度（たび）に思っていたので、さっそく受ける事にした。そして、小四・中二の孫二人と私と息子の男四人で、作業が始まった。額縁から油絵や色紙を取り出すのは中二の孫、その作品を撮影する台にのせる役目は小四の孫、カメラで撮影するのは息子と仕事分担を決め、約一週間で作業は終了した。全作品に番号を付け、撮った写真の番号と合わせれば、すぐ作品が取り出せるように整理した。昨年の五月中旬この仕事をしたおかげで、行方不明になっていた〝気になっていた作品〟を数点見つける事ができた。今回の《猫柳》もそんな一作である。

《諦めていた作品との出会い》の喜びよりも、私にとっては《長男一家との家族の絆が深まった思い》が嬉しかった。男四人で汗を流した五月が、また巡って来るが、未（ま）だ未（ま）だ縛（しば）られた日々が続きそうである。ネコヤナギ《猫柳》の花ことばのように〝自由〟に外に出られる日を待ち望んでいる。



花壇

山田　實

ホームセンターが改装されてトストアになった。そこの魔力た。動物の高価な食料が豊富にた。

私は愛くるしい子猫やスピッるだけにやって来た。冷やかし惑な人間だ。我が家では動物をたから、買う気はない。店にと客だが、子猫を見たくてふらり暮らしの味気なさで猫を飼おうと

アウトドア用品とペッに惹かれて何度も訪れあった。

ツを含む愛玩犬を眺めだから店にとっては迷飼うのを妻が禁じていっては来て欲しくないと入ってしまう。二人とか犬を飼おうと、妻

に何度も持ちかけてみても、あたしが死んだ後でなら何匹でも飼って猫屋敷にしてちょうだい、素っ気ない返事だ。田舎で育った妻は実家が犬や猫を飼っていて、彼らが不潔な場所を駆けずり回り、同じように家の中を駆けずり回るのが適わないらしかった。少女時代から犬猫を飼わない家庭をつくろうと夢見ていたらしい。私は相手がそんなことを夢見ていたとは知らなかった。

子供が育つ間、ペットを飼う飼わないで擦ったもんだがあって、夜通し車輪の中を駆け回るハムスターと金魚鉢だけは折りあって家に置いた。

アウトドアには興味がなかったから生物が展示されたコーナーの方へ足が向いた。美しい色彩の小鳥が囀っていた。突然けたたまし、オウムが鳴きだして小鳥の囀りが掻き消された。薄暗いジャングルをイメージしたコーナーの奥に幾つものガラスケースが並んでいた。やや大ぶりのケースに枯れ枝があり、目を凝らすとカメレオンに似た爬虫類が静止していた。隣のケースの蜥蜴が見上げている。マスクがずれて鼻を出した少年と、怯えた幼女が母親の尻を掴み、顔を押しつけてよろめきながら歩く。その後ろを私は歩を詰めないように続いた。

蜥蜴はかなり前に勤めていた職場の中庭で、よく見かけた。それらは金蛇だった気がする。さらに奥まったケースには真っ白な蛇が入っていた。赤目で十二センチほどのものだ。コーンスネークという。これなら可愛らしい。その隣は黒いケープハウススネークで大黒蚯蚓を細く長くしたものだ。生き物でも爬虫類がことに嫌いだが、この日は苦い記憶のためにかえってガラスケースに引きつけられた。

記憶を思い返すたびに、爬虫類を嫌ってはならないという相反する思考へと、自己暗示をかけるようになった。小ぶりのガラスケースにブルースネークの幼生がいた。色素が抜けた体をS字にして微動もしない。目が皮膚の色に反して澄んでいた。

ペット王国に来ると、勤めていた頃の職場や、そこに広い中庭があって小さな野菜畑があり、花壇もあっ

たことが思い出される。小さな生き物が脳裏に浮かぶ。

ずいぶん前のことで記憶が錯綜してしまう。昼休みに伊澤商会の中庭で宮橋孝一さんと仕事の話をしていたら、青大将が出てきて騒ぎになったことが浮かぶ。花壇の手入れをしていた女性社員達が、コンクリートブロックとレンガの囲いにいた蛇に気付いた。

「気持ち悪い、河辺さん、早く追っ払って、早く」

私を名指ししたのに逃げ腰に喜代が金切り声で、なってしまった。孝一さんが咄嗟にブロックにへばり付いた青大将をつまみ上げた。首に圧力がかかったのか尻尾が手首に巻き付いた。孝一さんは、そんなことは厭(いと)わないらしく、表通りから工場を遮蔽するように立つ事務所の溝へ逃がした。私はへっぴり腰を恥じて、蛇の面構えを嫌悪視するようになった。花壇は、喜代が結婚する前に寮で暮らしていた頃、寮長と除草剤が撒かれた中庭に造って欲しいと孝一さんに懇願して出来たものだ。部長だった孝一さんは二人の頼みを聞き入れて工務店に除草剤を取り除かせて花壇と野菜畑も併せて造った。

そこは雑貨類の加工をかねた小規模の貿易会社だった。工場では磁器の食器とも装飾とも付かない物品、ガラス製の食器類を仕入れて組み合わせ国内でも卸して、輸出にも充てた。爬虫類との縁はない。私は青大将に出くわしたために屈辱の災難に遭ってしまった。空き地さえなかったら、喜代にへっぴり腰だとバレなかったはずだ。長い生き物だけではなく蜥蜴も住み着いていると作業場の娘達から聞いた。この会社が緩やかに衰退していたことと、爬虫類が住み着いたこととは関係がない。空き地に除草剤が撒かれているのを娘達が不安視していたから、宮橋孝一部長が土に染み込んだ薬剤を工務店に取り除かせたばかりの頃は、婿養子になる文則さんは伊澤商会に来ていなかった。

永い年月持ちこたえて来たこの会社は、質素と堅実を旨とした二人の先代によって維持されてきた。

それでも年々出荷量が少しずつ減りだして、先代社長の縁者達の中に将来のことを不安視して嘆くようになった。その頃になって文則さんも伊澤商会にやって来た。直ちに課長から部長になった時期だ。宮橋孝一さんは専務に昇進していたはずだ。斜陽産業だと認識していても、それを口にしたり、方向転換を宮橋孝一さんも文則さんとは話し合ってはいないらしい。孝一さんは心の内では思っていても、口には出さないようだ。私も不安に思っていた。しかし口にすれば、現状が不満なら辞めるより仕方がない。そんな究極の声が返ってきそうだ。孝一さんは事業の転換を図る良い考えを持っているかも知れないが、黙っているので無能と思われても致し方がない。孝一さんは文則さんが来てから急に言葉数が少なくなった。何しろこの会社には姻戚が多く紛れ込んでいる。それに無用の役職名が付けられていたから気にしだしたら息苦しくなってしまうかも知れない。

亡くなった先代の社長が愛惜と情を断ち切れなかった矛盾が、労力の質を落とした。後継者の文則さんも、それが分かっていても、手の付けようがないのだろう。死に体のような会社だったが不思議なことに、決算では赤字が出ていない。理由は正社員が少なかったことや、名前だけの役職の報酬が一般の社員と大差がなかったこともある。本業の実労は寮の娘達とパートタイムの女性達ばかりが担っていた。それで社会保険の分担金を出すリスクも軽減されている。文則さんが実権を握ってからは正社員の削減が一段と進んだ。その他にも赤字を出さい方策はあった。孝一さんの養父で前の専務が作り上げたものだ。その方策は、孝一さんを守るために築いたように思える。それに気付いたのは後々のことだ。縦(よ)しんば私が早く知っていても、人員配置の矛盾と同じように、口外はしなかった。

伊澤商会の家に文則さんが婿養子の候補の約定(やくじょう)で来てから、かれこれ十数年になるけど、来たばかりの頃はまだ宮橋孝一さんは部長のままだった。彼は気立て

のいい人で、先代専務の恩顧を受けた年配者から、孝(こう)ちゃんと呼ばれていた。文則さんがやって来てから間もなくの事だが、養父の宮橋専務が内臓の疾患で亡くなってしまった。情にもろい先代の伊澤社長は孝一さんをいきなり専務に任命した。古参の従業員は孝一さんが専務になっても、部長の時と同じように役職名で呼ぶことはなかった。孝一さんが養父に比べて見劣りはしていた。専務という職責を果たせていないと見る者もいた。課長から部長となった文則さんが重要な決済にあたったからでもある。暗黙のうちに孝一さんはその証は、三次(みよし)でも勤まる出荷格下げにされていた。場の責任者みたいになっていた。そこでは文則さんも働いて、一先(ひとま)ず専務の指図に従っている。文則さんが孝一さんの職責を踏襲した頃を見計らうように、養女の奈津江さんと祝言を挙げさせた。彼女は社長の妻の姪だから血縁になる。幼い奈津江さんは母親が早世してしまったので、伯母が引き取って育てた。境遇は孝一さんと似ているが、では決定的な違いがあった。かっては皆から親しまれて重宝がられていた孝一さんも時の移ろいにつれて退けられていった。それでも彼は何時もにこやかに出社していた。先代の社長は結ばれた二人の仲が盤石だと見定めたのか、家督を奈津江さんに譲った。婿養子として入籍して三年ほど経ってから、満を持したように文則さんをいきなり社長に据える。それを知らすために、従業員へ祝いの紅白の和菓子が配られた。

古参の遠縁の従業員は、孝一さんと同じように文則さんを社長とは呼ばなかった。社長と言っているのは専務と、損得ばかりを考えている姑息な私か、喜代や寮の娘達ばかりだ。少なくなった遠縁の年配者は新入社員を呼ぶように文則さん、と呼び続けた。新社長は「あいよ」白々しいほどの軽さで返した。「あいよ」の返事は彼等の頑なさへ反撃を加えたようだ。

零細企業の事務や商品の仕入れは、かって寮で暮らしたことのある喜代と養女の奈津江さんがやっていた。それで出荷場に不要の人間が溜まってしまった。

加工場は慢性的な人員不足であった。世間知らずの私は三次がもたらす情報で、伊澤商会より更に小ぶりの会社に外注を出そうとすると、取引のあった親会社が潰れていたから円滑だのか分からない。これまで頼みに行って断られたことはない。相手はささやかな駆け引きをみせても、終(しま)いには折れてしまう。

清濁あわさった情報をくれる三次も、かっては同業の会社で番頭のようなことをしていた。主人が老いさらばえて、路頭に迷うことも考えないで廃業してしまったから、職を失った。よく気の付く男で、何かと私を助けてくれる三次は有能だが、運が悪い。伊澤商会に来るまでに数社を渡り歩いていた。どこでも彼の潜在的な能力を見極められなかったようだ。伊澤商会でも彼の知識を埋もれさせたままだ。彼は午前中には私の所にやってきた。まっ出荷を済ませると午後からも彼の能力を生かす知恵も力もなかったから、三次(みよし)は不幸な男だった。

先代は文則さんを社長に任命してから、急に衰えて従業員の前に姿を見せなくなった。長命の先代は、すべての煩わしさから解放されて安堵したように老衰で亡くなった。私は生前の社長から、妻を娶るなら喜代がいいと示唆されていた。それを真に受けてアタックする機会をうかがっていた。ただ、へっぴり腰のことがバレて、それが心に引っ掛かってしまう。

先代達が若い者のために安全なレールを敷いてくれたことで、文則社長の経営に変化はなかった。

社長宅の長女が小学校を卒業した頃、それを見届けるようにして養母も他界した。会社を築きあげた人々がすっかりいなくなると、従業員も忙(せわ)しなく入れ替わった。過去を知っているのはわずかになった。正社員だった者ばかりが消えた。凡庸な私を見誤って雇用した先代の恩顧を時々思い出すたびに、文則社長の方針が良きにつけ悪しきにつけ、これまで通りに生真面目を装って従うつもりでいた。

幸いというか代替わり後も会社の方針は変わっていない。だいたいが新社長は、これまで多くの年配者に手を焼いていたはずだ。ことに専務との間合いの取り方が難しい。先代の専務は、ささやかな会社であっても収益の落ちない仕組みをしっかりと作り上げた功労者だ。孝一さんの将来のことを考えて、本業が躓いても揺らがないように、内部留保の仕組みを不動産に振り向けていた。公営住宅の周辺に需要の見込める小規模の駐車場を散在させている。都心部でも狭い土地をずいぶん前に買い取って狭い駐車場にしていた。いつか必ずディベロッパーが代替え用地として求めてくるだろうと見込んでいたからだ。散在した不動産ストックの見積もりは低くはないはずだ。その恩恵を文則さんが受けているが、元々は孝一さんのために築きあげたものだ。

孝一さんは人伝によって、養子縁組みで宮橋家に来た。将来彼を孤立させないために会社の資産の中に養父の願望が込められていることを三次が教えてくれた。彼の話は些細なことだが的を射ている。他社を転々としながらも伊澤商会をよく見ていた。私は三次の地獄耳を疑わなかった。宮橋孝一さんや文則社長達の複雑な人間関係と創業者の理念が理解できたのは三次がいたからだ。孝一さんは有能な専務ではなかったが従業員からの受けは良かった。花壇で女性達から、気持ちの悪い青大将を追っ払って、と急かされたとき私は真っ先に逃げ口上を考えた。そして直ぐさま花壇の縁囲いのレンガで蛇を殺そうと思った。庭に孝一さんがいてくれたから私は醜悪な姿を晒さずにすんだ。

幹部にそれぞれの役職名があっても、いつの間にか三次が責任者のようになった出荷場では、上司の二人もこれまで通りに働いた。三次は正式に任命されたわけではない。出荷場の仕事は午前中で終わる。午後からは社長も専務もいなくなることが時々ある。そこの部署ではみなが閑を持て余していた。生産担当の者から見ると、人員配分のバランスがきわめて悪い。出荷

場で送り状をサッサと書き終えた三次（みよし）が午後から加工場で働かせてほしいとやって来た。彼はすべてを先読みして行動をしている。午後からパートの女性に混じって簡単な作業に従事した。専務は何処へ行ったのか分からない。喜代は結婚後も子育てをしながら事務所で働き続けていた。彼女は孝一さんの所在を知っていても明かさない。職責が重くなった文則さんも、親会社から注文書が送られてくれば、その写しを喜代に持たせて寄こした。私は場所もわきまえず、先代の示唆に意を決して、喜代を追いかけて言い寄った。振り返った微笑みで、もしや許容のサインかと思った。

「河辺さんは素敵な方。良い人が沢山居るはずよね」

中庭で言い寄って拒否されてしまった。前の禍（わざわい）が合わさって何時までも尾を引いて自己嫌悪のしこりになった。同じ日、専務は河川の近くにあるゴルフ練習場へ社長と出かけたかも知れない。ゴルフを誘ったのは孝一さんだろう。養父が生きていたときから練習に出かけていた。景気の良い頃は、孝一さんが休日に親会社の社員とプレーをしに行っていた。遊びも仕事の一部だと言うように普段から練習に励んでいた。しかし、すでにその時から親会社の仕事は少なくなりかけて、暢気にゴルフは出来なくなっていた。

殷賑産業（いんしんさんぎょう）の恩恵に浴していた時は、先代の社長も孝一さんのゴルフを奨励していた。その一方で私には、いつまでも好況は続くものでない、浮かれていると気付かないうち奈落へぶち落ちてしまう、と説いた。景況感が少し陰り始めたら、こういうときこそ内部留保に心掛けなければならないと重ねて言う。私達が怠けて遊んでいたわけではない。午後から忽然と消えてしまう孝一さんに言い聞かせるために下っ端の私を利用したのだろう。先代社長は、いつもリスクを考えていた人だった。実際に経済状況が悪化した時も同業の中に呆気なく倒産した所があったけれど、外観上は空き棟があって潰れてもおかしくない伊澤商会は揺らがなかった。

先見性のあった伊澤社長も宮橋専務も今は生きてい

ない。宮橋専務の進言を聞き入れて利用価値の高い不動産をストックしても、それを規模の拡張には使わなかった。それどころか工場には使用されていない建屋が二棟も死蔵されている。安易に量産に踏み切って失敗した会社の衰退を幾つも見ていたから、宮橋専務が孝一さんの将来を不安定にさせまいとする考えが理解できた。その割に孝一さんは鷹揚であった。ゴルフの手解きを専務から受けたはずの文則社長は孝一さんを遊ばせたくはなかったベルで働かせたいと考えていた気がする。

先代は、自己の能力を故人のことを、そう話すけどと前置きをして営者だったと、陰口をつは、それはやっかみいる、三次は誤解され

景況感が下振れをし事務所を建てかえると

ブホテルより前の時代に造られたホテルでは小振りで、事務所とした。ここに移る前の事務所は西側にあった。先代が買い取った連れ込み宿は東側だ。陽当たりが良いから用途は広い。それが今の事務所だ。一部を物入れにしている。

二階の空き部屋を使い出したのは私であった。和風の部屋は同業の知人達からも重宝がられた。

先代の考えを継承した新社長が真面目な人だっただけに、意表を突いた新築計画には驚いた。

私が事務所の二階を使い始めたのは、社長に勧められて資材屋が主催の宴会に出てからだ。影の薄くなった専務にも、行って良いか伺いを立てた。すると、ほかの会社の者たちと付き合うのは大切だから河辺くんで、堅実な人だとわしは思って是非行った方がいいと押してくれた。宴会場で皆と交わりが出来た後、麻雀を二階でやることになった。社長も専務も加わる時があった。三次を誘ったら、知っている連中ばかりだと懐かしがった。事務所の前身はラ

ひと頃の安定した景気が俄に悪化した。伊澤商会だけではない。世界中が陰鬱になってしまった。経験したことのないほど業績が悪化した。こんな時期に文則社長が事務所を建て替えると言ったけれど、状況が変化したから中止にするかと思ったが、変更はしなかった。専務も乗り気だった。木造を耐震構造のビルにする概略が明かされた。今の事務所は接ぎ足しの三階で、風俗業を営んだ頃の面影が濃厚に残っている。二階以上にある和室は小窓が高い位置に設えてある。風景を見る客などいないだろうと見込んで造った部屋のようだ。よしんば背伸びをして見たとしても工場の中庭で花壇の端が見えるだけだ。一階の道路際だけは事務所らしく改装してある。

務所にする理由は、社長の娘が将来家業を手伝う時に、部屋の構造の説明に困るから、前もって建て替える気になったんだろう、とは働いてくれる事務所の過去の用途が男女の忍び逢いの場では不味いのかも知れない。

擦り切れた畳部屋で、週末ごとに他社の人と集まった。爪先立ちしたなければ外が見られない高窓の部屋は鬱陶しい。遊興に熱心な者は部屋の履歴などどうでも良かった。魔除けでもするように牌を掻き回した。空き部屋は三階にもある。廊下を隔てた襖の奥で男女のくぐもり声がする気配もある。社長はそうした生業の痕跡を一切消し去って、将来娘に働いて貰うために備えようとしているのだろうか。関わりもない。しかし、もう麻雀は出来ないだろう。

専務は仮の事務所を探すのに忙しそうだった。ショールームぐらいはあった方がいいと社長が条件を出したので、孝一さんは養父と懇意だった不動産屋に、伊澤商会の意向のレンタルスペースを探して欲しいと頼んだ。経費も詰めて改装するためだそうだ。孝一専務に目的を明確に伝えれば信頼できる結果を出す。私が入社して間もなくの頃だった。大阪の注文先が贈答用のネームのスペルを間違えて、包装の仕直しを手伝

えと要請されて行ったことがある。そのときの孝一さんは部長として出かけた。担当違いの私に指示をして二日間で大量の商品を包み直した。問屋から危ないところを救われたと感謝をされたことがある。孝一さんは養父の威光もあって東京や大阪の商社に信頼されていた。文則さんはその頃は、まだ伊澤商会に来ていないから知らないはずだ。孝一さんは養父母が亡くなってしまった後は天涯孤独の身になったわけではない。妻もいたし子供も男女の二人がいた。それでも同じ養子でも文則さんには両親も兄弟もいた。恵まれた出自であった。孝一さんには自ら培った家族しかいない。

伊澤商会に小僧と言われる時代から勤めていた年配者から、孝一さんが幼少の頃に養子としてどのような経緯で迎えられたか、噂のたぐいとして話す。噂というのは話し手が違えば内容も変わってしまう。幼少の頃、孝一さんは養母に連れられて会社にしばしば姿を見せていたらしい。そのせいで、幼年の頃を知っている者は、部長とか専務の役職名がついても、幼年時代の孝ちゃんで呼び通して改めなかないので、私は噂と想像をこね回して上げた。孝一さんは、そのことを泰然として、従業員からつまらない頼み事も労を惜しまずにやってのける。それには、ちゃんと呼び続けた方が何事も頼みやすかったからだろう。伊澤商会を継承した文則さんが積極的な経営を目指せば、専務も潜在能力を生かせたかも知れない。専務は荷造りをしていても不平を漏らさない。また文則さんの足を引っ張ることもしない。凡庸な黒子になり切ろうとしている。文則さんが事務所を一新したらったけれども、現在積極的な商売をするのか興味があるだけだ。

仮の事務所探しを担った専務は、目的のレンタルスペースを見つけてくれる不動産屋を紹介して貰う。

宮橋専務に目的を明らかにして委任をすれば、そつのない仕事をやってのける能力を示した。

文則さんが気に入ったショウルームも早々と出来上がった。経費は圧縮されたらしい。

引っ越しは皆を動員して済ませた。

後日、見に行ったら明るいフロアだった。車も三台は停められた。ショウルームのデザインの色彩もブルーと白のコントラストでくっきりしている。次世代は今までとは違った商売に転向する予感がした。職場に精彩がなければ、決して若い人材は集まってこない。

仮事務所に行ったときに客用のテーブルに設計図が拡げてあった。立派な建物になると思った。

引っ越しが済むと塩が建物に撒かれて、間もなくして取り壊しが始まった。三階建ては鉄骨と木造の粗末な骨組みだった。東側が開いて明るくなった跡地は狭い。部屋数が多かったから広いと想像していたが、そうではなかった。設計図のような建物が建ちそうもない面積だ。やがて中庭の花壇も野菜畑もならしてから重機が入り込んで、前に使っていた二棟の工場を壊し始めた。重機が柱を毟り取るように引きちぎった。これまでの労力が虚しく潰えていった。その時の荒々しい光景が今も繰り返し夢に現われる。

三次は真新しい暗褐色のビルを見上げて呟いた。

「これは商業ビルではなさそうだな。高層住宅かも知れないぞ、ベランダがついているし、その内に立体駐車場も造るだろうな」

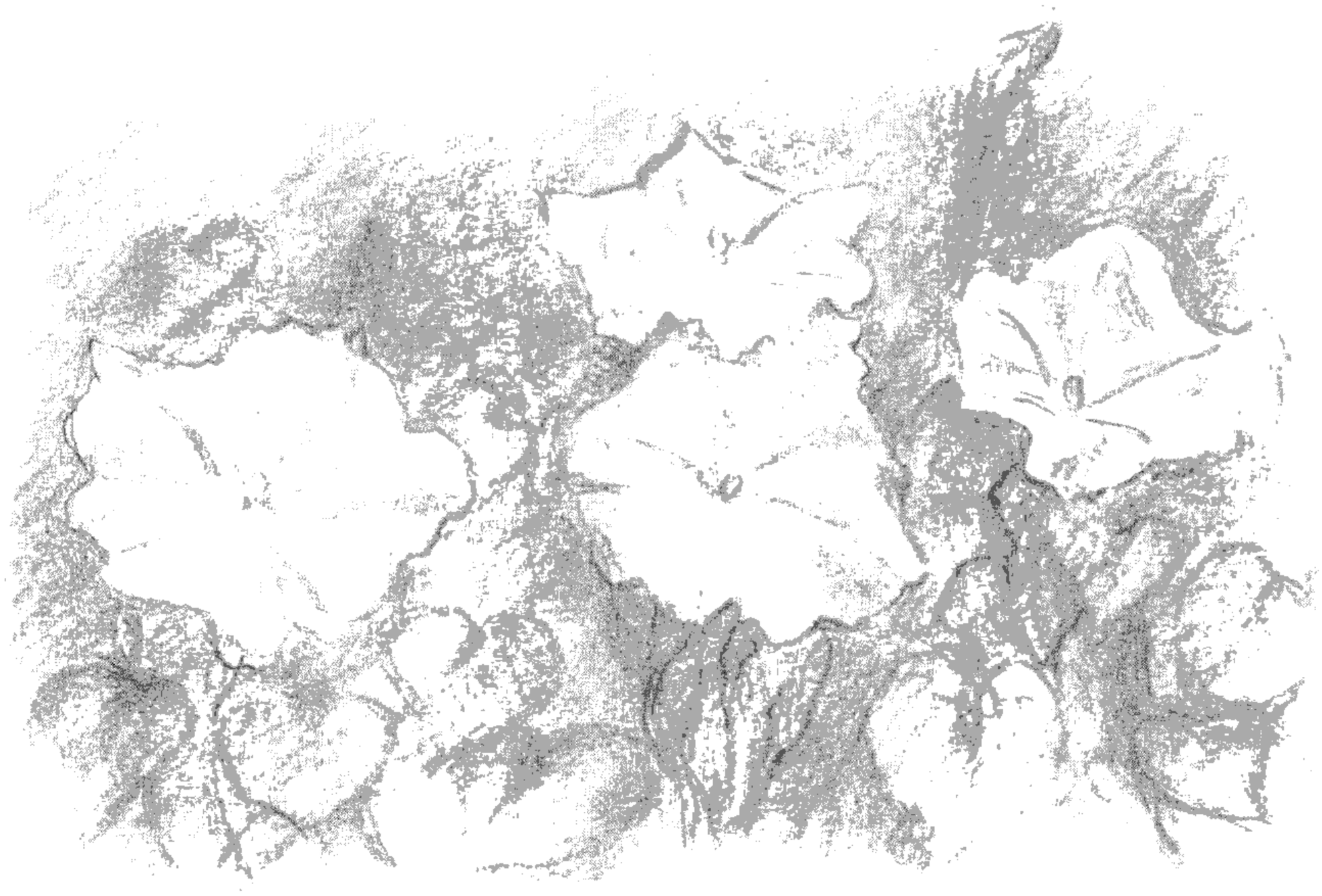
彼の寒々とした表情は私自身の顔でもあった気がして、あらぬ事を喋ってしまった。

「青大将の住み家はどこになるんだろう」

車の行き来が急に減って、街が静まりかえった。

新しい事務所は一階に出来たが、レンタルスペースの仮事務所は、残されることになった。宮橋孝一さんが当分、専務ではなく支店長として居残ることになった。期限は曖昧のままだった。

ペットストアを出ながら、明日も来ようかと思った。ら小鳥の囀りが微かに聞こえてきた。



夕顔咲く

木戸　順子

＊

同居を強く希望したのは、娘の未央よりむしろ婿の保志のほうだった。同じ市内ではあったが、未央の結婚以来二十年、娘夫婦とは別々の生活を送ってきた。双方とも小さな賃貸マンション暮らしである。母一人娘一人なのに、病気のお母さんを見捨てるようなことはできません。自分の両親は元気で田舎暮らしをしている彼は、まるで実母に言うような口調だった。これが娘の言葉なら世間にはよくある話だが、彼とは赤の

他人である。保志の優しい性格を知っている朔子の気持ちは動いた。重篤な肝臓癌と診断されたばかりで、気が弱っていたこともある。事実である。

二人が朔子の入院中に何軒かの不動産屋を回り、比較的交通の便利な市の外れの建売住宅を購入するまでにさほどの時間はかからなかった。すでに手術の不可能な場所に癌細胞は肥大していて、適合する抗癌剤を決めるのに何週間もかかった。その間に全てが決まり、整えられた。時折病院へ来る未央から事のあらましは聞かされていたが、もう自分の意見を言える状況ではなかったし、その気力もなかった。

四月に退院すると、そのまま新居に入った。一階の南側の、狭い庭に面した和室の六畳間が朔子の部屋である。トイレ、風呂、台所、ダイニングルームが使いやすい設計で作られていた。二階は夫婦の寝室とリビング、大学に入ったばかりで東京に暮らす孫の留衣の部屋もある。

一か月ほどを共に暮らすと、落ち着く間もなく保志は急にベトナムへ出張することになった。彼は大手のアパレルメーカーに勤めている。未央とはその会社で出会って、結婚したのだ。エスニックとかアジアンテイストという言葉が一時期流行って、エキゾチックで安い既製服が若い女性の間では今でも人気があった。縫製工場の責任者が急に体調を崩して帰国することになり、その代わりに任命されたのだ。感染症の心配はあったが、何とか飛行機に乗ることができた。

デザインだけなら遠隔操作で日本からいくらでも決定できるが、現場で働く人との直接のコミュニケーションは仕事の効率に大きく影響する。三年ほど前、研修を兼ねて出かけたベトナムでのマネジメントの経験が評価されたらしい。どれくらいの期間なのかは未定だった。こうして、新しい家で七十二歳の朔子と四十歳の未央の母子二人だけの生活が始まった。

夜、自室のソファに座って、ぼんやりと外を見ている。未央は、夕食が済むとすぐに二階へ行ってしまった。庭に植えられた僅かな木々はまだこの家に馴染ま

ず、よそよそしい。狭い庭の向かい側の家の黒い瓦に満月の光が当たっていて、そこだけほのかに白く光っている。不意に、甍の波という言葉が浮かんだ。昼間の瓦の波状よりも格段に美しく、月の下で輝く静かな夜の海原を思わせた。

テレビも見飽きて、散歩に出かけたついでに買ってきた週刊誌をペラペラめくる。「老人が一人暮らしをするようになったらしてはいけないこと」というタイトルが目に留まった。1．子供と同居を始めること。2．自分の財産を与えること。3．家を売って老人ホームへ入ること。1はすでに始めてしまった。2は、この家を買うときにコツコツ貯めてきた預金の大半を提供した。3の実現は最早不可能である。いつまで生きられるのかわからないが、治療費は絶対に必要だった。僅かの貯金と年金でいつまで持つだろう。急に不安に押しつぶされそうになった。いくら婿に勧められたとは言っても、自分の選択は正しかったのだろうか。

＊＊

夫の保志が同居するべきだとうるさく言うので、承諾してしまった。これを断ることは至難の業だった。理由がない。誰が聞いても感心こそすれ、非難する人はいない。母も、自分が病気でなければ同意したかどうかわからない。四月に入居してから、夫がベトナムへ赴任するまでの一か月は、家の整理に追われて忙しかったこともあり、何事もなく過ぎた。

夜になれば夫が帰り、母との間のクッションになってくれてそれなりに円満な日々だった。夕食の後、一時間ほどテレビを見ながら話す。母が入浴する時間を見計らって、二階へ上がる。それが大体九時。新しい家での二人だけの時間は思いがけなく新鮮で、若いころを思い出すこともあった。いろいろありがとう。あなたのおかげで、母も安心しているわね、きっと。ソファに並んで座って言うと、夫はわたしの体に手を回した。以前より触れ合う機会が断然多くなっている。

それが五月にベトナムへ発ってしまうと、事態は急

変した。大切な人と離れて意気消沈した。長期の出張も予期せぬことだったが、自分の心の変化も思いがけないものだった。母と過ごす時間を増やせば、寂しさも紛れるだろう。そう思って三度の食事の後、親戚のことや留衣のこと、買い物や献立のことなども話すようにしたが、心は安らぐどころか内へ籠ってしまう。母は抗癌剤が効いていて体調はよく、一日一回は散歩に出かけるほどだった。別れて暮らした時間を急速に取り戻すように、未央ちゃんという呼び方を乱発し、散歩で見聞したこと、昔の話を機嫌よく話した。仕方なく聞くことだけはしたが、自分から何かを話したいという気分にはならなかった。

若い時に母に抱いた複雑な感情は、不惑と言われる年になっても和らぐことはないのか。母との生活から抜け出したくて、十八歳で就職すると二十歳で結婚した。同じ会社で八歳年上の保志と巡り会い、求められて家を出ようとしたしかし、そうでなくても何とかしそうに働いた。以来六十五歳まで仕事を続けたのだ。

＊

何よりもまず未央の幸福を優先してきたつもりなのに、どこでどう間違ってしまったのだろうか。注いで

きた愛情は単なる自己満足だったのだろうか。二十年も別々の生活をしてきたせいで、お互いを理解することができなくなってしまったのだろうか。保志と三人で暮らしていた間は、迷った挙句のこの選択は正しかったと思える日々だった。未央と年の離れた保志は懐が深く、上手に彼女を扱い、未央も父親に甘えるようなしぐさを時に見せていた。

娘が、二人の父親に必ずしも好感を持っていないことは十分に理解している。再婚は、両親が揃った家庭で育てたいという親心からの決断だったのだが、結果から言えば何もかも私のせいだった。未央は、無意識に保志の中に憧れていた父性を見出したのだろう。保志を失ったように娘との関係は本当に弱ってしまったら、さすがだろうと自分を納得させた。

散歩は午後にしたほうがいい。病院の定期検査も交通機関を使って一人で行けるし。前中は押し入れに入れたままの衣服やバッグの整理を留守番を兼ねて、午少しずつ始めた。仕事柄、以前は身なりには多少気を使った。仕事着は揃いのユニフォームのようなものを支給されていたが、指輪、ネックレス、イヤリングなど華美にならない物を購入した。客商売でそれも女性が多く、何よりも美しくなりたいという願望を心に秘

時から一時まで働く。うん、毎日か簡単なもので済ませて。冷蔵庫の中の物を使っていいから。こちらの都合や体調は何も聞かない。まあ、それくらいならまだできる。大丈夫だろうと思った瞬間、内心ほっとしている自分に驚く。

未央が二階にいると思うと何かと気になるが、自分一人きりだと思うと、不思議な解放感があった。長らくそういう自由な生活を送ってきたのだ。今のところ、病院の定期検査も交通機関を使って一人で行けるし。本当に弱ってしまったら、さすがだろうと自分を納得させた。

散歩は午後にしたほうがいい。前中は押し入れに入れたままの衣服やバッグの整理を留守番を兼ねて、午少しずつ始めた。仕事柄、以前は身なりには多少気を使った。仕事着は揃いのユニフォームのようなものを支給されていたが、指輪、ネックレス、イヤリングなど華美にならない物を購入した。客商売でそれも女性が多く、何よりも美しくなりたいという願望を心に秘

めて来店する。それなりの雰囲気は働く側にも必要だった。高価なものばかりではないが、もう自分には用がない。いい物だけを彼女に残しておいてやれば、使えるものもいくつかはあるだろう。

しばらくすると、未央が帰ってきた。高校時代でさえアルバイトをさせたことがない。本人はやりたがったが、強く止めた。代わりに習い事と塾に行かせた。大学に進学させたかったが、これは嫌がった。成績のこともあるので、母親の力だけではどうにもならなかった。まさかとは思うが、私に対する遠慮もあったのだろうか。

「お帰り。どうだったの。初めてで疲れたでしょう」

仕事の話を聞きたくてダイニングへ行き、声をかける。水を飲み終わると、未央は私をじろりと見た。

「そんな心配、いつまでもしなくていいんだよ。わたしはもう、大人なんだから。自分の体のことでも考えたらどうなの」

機嫌の悪そうな声でそれだけ言うと、足音高く二階へ行った。取り付く島もない。

仕方なく気分転換を兼ねて、散歩に出かけた。二階に声を掛けたが、返事はない。五月の空はよく晴れて、住宅地の道路沿いに植えられているハナミズキが新緑を迎えている。以前の住まいの近所の公園にも植えられていて、懐かしい木だった。花も、赤い実も美しい。来春、ここでその花を見ることができるだろうか。秋の見事な紅葉は、まだ見られるかもしれない。この年になって引っ越すなどと予想もしなかったが、初体験の連続が人生というものだとしみじみ思いながら歩く。癌という病を得たことは、その最たるものだった。

よかったわね、娘さんと一緒に住むことになって。

今でも交流のある親しい友達の電話の言葉を素直には聞けず、複雑な思いだった。まだ三日ほど前のことである。未央ちゃん、昔から礼儀正しくていい子だったからね。あなたが一生懸命育てたそれはある意味、真実だった。

＊＊

未央は自分で自分がわからなくなっていた。母がうるさいことは昔からで、それは愛情表現だという思いで受け止めていた。もっとも小学生の間は、何の疑問も抱かなかった。母は美しかったし、何よりも母親としての役割を見事に果たしていた。それはわたしの幸福でもあったし、誇りでもあった。母が専業主婦だったころは勿論、働くようになってからでも何かと気を使ってくれた。着るものから持ち物まで品のいいものを取り揃える。学校で友達から羨ましがられるほどだった。何か欲しいといえば、大抵は叶えてくれる。愛されていると信じていた。勉強や礼儀には確かにうるさかった。未央のためだから言うのよ。大人になってからでは遅いのよ。どこへ出ても恥ずかしくない人間にならないとね。母の言うことは全部正しかった。母が一人で育ててくれている間は特に、何とか母の期待に応えようと努力した。

その母に少しずつ不満を覚え始めたのは、いつごろからだったろうか。母はわたしを大事にしてくれたが、自分の夫にはさらに気を使いに入られようとしていた。時には夫優先で、わたしのことが後回しになることがあった。これが何回か続くと猛烈なジェラシーを感じ、故意に無理難題を言い募った。

しかし、一番いやだったのは転校だった。学校にも友達にも慣れて楽しい生活を送っていると、ある日、突然母とわたしは家を出る。教科書やノートの名前も書き直す。教室でおどおどしながら暮らし、疲れる。そのたびに、母のせいだと腹立たしかった。専業主婦でなくなった母はすぐに仕事に行き始め、以前とは全く違う生活になる。朝は一緒にご飯を食べられるが、下校しても当然ながら母はいない。一人でいる時間が長くなり、以前の何不自由ない豊かな暮らしとは程遠いものだった。

そして、二度目の転校。新しい父の苗字になかなか慣れない。一体本当の自分はどっちなのだろう。学校

での人間関係の悩みもめる美容院の店長だったなかお父さんと呼べなかった。子供の目から見ても二この人と中学二年までママ、本当のわたしはにそう言ってみた。やちょっと回り道したけんだよ。ずっーと。やもう安心していいからから、一度くらいは謝えることはなかった。わなかった。何となくやはりそれなりに説明できなかった。母に何と言われても離婚の理由もわたしには言い年頃だったから、当たらず触ら

始まる。二度目の父は、母の勤た。可愛がってくれたが、なか背が高く、おしゃれで、人はお似合いのカップルだった。暮らし、また母の旧姓に戻った。はどれなんだろう。ある日、母っと元の未央ちゃんに戻ったね。ど、これからが本当の未央ちゃっとママと二人だけになった。母のせいで振り回されたのだってほしかったという思いは消母は離婚の理由もわたしには言不穏な気配は子供でも感じたが、してほしかった。

時間も感情も巻き戻すことはしいことをいいことにして、距。ある程度何でも自分で判断でことが幸いした。思春期の難し

＊

未央と私との距離はますます大きくなっていった。買い物を頼んだり何かお願い事をしたりすると、不機嫌極まりない顔になる。散歩のついでに行けるでしょ。吐き捨てるように言うこともたまには言うことを聞いてくれるが、拒否された時の感情がいつまでも残った。

言葉の暴力だけでも十分にドメスティックバイオレンスと言えます。テレビでそう言っているのを聞いて思わず涙が出た。それなのに昨夜、ついに未央は私を突き飛ばしたのだ。日増しに体力がなくなっているのだが、未央は肩を強く押したくらいで私が倒れるとは思ってもいなかったのだろう。いつまでも冷蔵庫に入ったままの賞味期限を過ぎた豆腐について、ついでに世話を焼いた。火を入れれば大丈夫だから、今日の夕飯は野菜と合わせて中華炒めにしたらどうかな。大きなお世話だよ、そんなこと。どうしようとわたしの勝手でしょ。冷蔵庫の前で、私は倒れてしまった。開け放してあった自分の部屋の方へおしりから崩れ落ちた。やっとの思いで立ち上がると、もう未央はいなかった。息が苦しい。頭部を打たなかったことが幸いしたが、腰と臀部に痛みがある。湿布薬を貼ってベッドに横になる。何とか歩けるのが不幸中の幸いだった。

父親にそっくりだと空恐ろしさを覚えた。不機嫌なときの顔つきまでが瓜二つだった。思い通りにならないと怒鳴り、些細なことで暴力を振るう人だった。いつだったか、思いがけなく帰宅が早い日があった。その日、義父母を車に乗せて買い物に出かけていた。空腹だったのだろう、怖い目つきで睨まれた。家族の前では我慢していたのか、夕食の後、二階でひどい目に合わされた。俺と親父とどっちが大事だ。一体誰と結婚したんだ。蹴とばされて倒れたところをたたかれる。顔を打つことは絶対にしない。いつも自分が一番でなければ気が済まない人だった。こんな人とは思わなかったと悩んでも、未央の存在がいつも私の感情を抑にいるだろう。夫は気が狂っているのではないかと思

い始めていた。

暴力は一度や二度ではない。ほとんど毎週、どこかをたたかれ、蹴られ、体の見えない部分には痣が絶えなかった。夏でも長袖のブラウスにパンツを穿くようになった。未央が小さいうちはさほどでもなかったが、どんどんエスカレートしていった。会社で余程辛いのか、ストレスが溜まっているのかと、逆に私は同情さえしていた。勿論、誰にも言えない。親に心配はかけたくない。未央と一緒に入浴するのを止めた。

それでも何故か彼女は夫に懐いていて、パパと大きな声で呼び、遠慮なく思ったことを口にしていた。ある日曜日、両親は親戚へ出かけていて、三人で昼食をとっていたときだった。味付けが気に入らないのか、こんなまずいものが食えるかと言った。パパ、残しちゃ駄目だよ、食べなきゃ。それは、私にいつも言われている通りのせりふだった。無邪気に言う未央の頭をげんこつで強く二回もぶった。娘に暴力を振るうのはそれが最初で、びっくりして泣き出す未央を抱きしめながら、もう一緒にはいられないと決心したのだ。

未央まで被害者にするわけにはいかない。義父母は容易には信じてくれなかったが、私を見せて一歩も引かなかった。

生まれて四十年も経ってから、未央の体内にある夫の遺伝子が現れて、顕著に活動を始めたとしか思えなかった。彼の遺伝子を百パーセント受け継いでいるのだ。そうとでも思わなければ、自分が余りにもみじめになるばかりだった。

＊＊

ベトナムとの時差は二時間なので、わたしはよく夫とスカイプで話す。大抵は向こうからの発信で、時間も夜十時ごろと決まっている。夫は多分夕食を終えたばかりだろう。その時刻、パソコンに向かって調べ物をしたり、ゲームをしたりしていると都合よく着信音が鳴る。必ず、初めに母の容態を聞く。東京の留衣とも話しているはずだが、妻でも娘でもなくまず義母を

気遣うとはどういうことかつい苛立つ。会社の方は問題ないよ。すべて順調だは及ばないけどね。いつごろ帰れるかはまだわからん。休んでいる彼が全快すれば交代できるだろう。重病らしいから、次は新任者ということもあるが。

のんきそうに喋る彼に、思わず早く帰ってきてと言ってしまった。何かあったのか。わたしの声の調子や表情から感じるものがあったかもしれない。お母さんを大事にして、残りの時間は羽を伸ばしていればいいだろう。あなたがいないと、わたし、困るのよ、寂しいのよ。まんざらでもなさそうに彼は笑顔を見せた。自分の感情をコントロールできないの。さすがに最後のせりふは口に出せなかった。

翌日、気分転換に中学時代から交流の続いている友人に会った。転校して間もなく仲良くなり、互いの家を訪れる仲だった。その佳乃と気が合い、母の離婚のことも含めて何でも話していた。

同居して初めて会うのだが、家には呼ばなかった。おばさんにも久しぶりに会いたいし、どんな家なのか興味もあるし。彼女の家から遠いことを理由に、わたしは二人の家のほぼ中間にある地下鉄の駅の近くのレストランを指定した。食事が終わると、正直に自分の気持ちを話した。理性と感情のギャップ。つい辛く当たってしまう自分。気詰まりな二人だけの日常生活。

コーヒーを飲みながら聞いていた彼女は、

「おばさんは長い間一人で頑張ってきたからねえ。きっと世代交代というタイミングがうまく取れないんでしょう。二人きりだと、なんでもストレートに伝わってしまうし」

「本当にいつまでも子ども扱いなんだから。いくら夫が勧めたからと言って、同居したことを後悔している」

「おばさんが元気ならまだしも、お医者さんに余命のことまで言われている状態なら、やっぱり未央が歩み寄るしかないよね。この世でたった一人の母親なんだから。私のように母を早くに亡くした者もいるのよ」

ここでも説教されてしまう。誰もわたしの気持ちな

どわかってくれないのだ。
「何もなくてもイライラすることって、このごろ、私にもあるわよ。更年期障害かもしれない、未央ちゃんも。ちょっと早いけどね。そう思えば、少しは気が軽くなるんじゃない。あんまり神経質に自分をいじめないほうがいいと思うけど」
それから近くの公園を二人で散歩した。
「今度近いうちにカラオケに行こう。ストレス、発散できるかも」
別れ際に彼女はそう言った。帰路、彼女の言葉を反芻してみる。いつ会っても未央のお母さんは私から見れば理想的なお母さんだった。優しく、美しく、よく気が付き、料理も上手で。たまに夕食をご馳走になったけど、いつもすごくおいしかった。私の母は、まるで反対だった。がさつで、何も干渉しない代わりに何でも自分でしなくてはならなかったでしょ。羨ましくて仕方なかった。大人になって、私達二人とも親になってみると、おばさんはあまりにも立派過ぎたのかもしれない。未央ちゃんから見れば刀打ちできない。偉大過ぎて乗り越えられない。そういう存在だったのかもね。その思いが蓄積されて、素直になれない。時に反抗したくなるもなかったのに、あり得るわね。今まで意識したことも佳乃の言葉は未央の内面を抉り出した。

＊

仲が良かった先輩を頼って紹介されたのは、新しく開店したばかりの美容院だった。住宅街の大通りに面した二階建ての洒落た店で働いているのは、若い女の子が多かった。朔子は四十歳になっていた。先輩から仕事の経験や、家庭のことなど聞いているに違いない店長の山際は、どういうわけか朔子を重用した。八人ほどの美容師を前に、経験豊かな人だからいろいろ教えてもらうようにと言った。どうやら最年長で、まとめ役のような立場を期待されているようだった。
未央と二人、何としても生きていかねばならないと

いう強い思いで朔子は働き始めた。その意気込みと昔取った杵柄は大いに役立ち、店の雰囲気に自然に溶け込むことができた。昔のやり方が通用しないこともあったが、自分の娘と言ってもいいような若い子に素直に教えを乞うた。そのうちに何かと頼りにされ、店長からも信頼されていると感じるようになっていった。

ある休みの日、未央が学校から帰るのを待って、二人ですぐ近くのスーパーまで買い物に出かけた。車も自転車もない。荷物を下げて帰ろうと歩き出したときに、穂高さんと呼ぶ声がして駐車場から店長が現れた。

「お近くなんですか」

「車で五分くらいかな。確か穂高さんは隣の区でしたよね。スーパーの近くの道路が区の境界線になっているんですよ」

長身の彼は屈みこんで未央の顔を見ながら、何年生と聞いてから可愛いねと笑顔を見せた。帰り道で店長さんだと教えると、未央は優しいおじさんだねと二回も言った。

休日が同じなので、それからも際はいつも一人だった。ある日、車で近くの洒落た喫茶店に出かけソフトクリームを頼むと彼も同じものを注文し、向かい合って舌をべろべろさせながらおいしそうに食べ始める。学校の様子を聞いたり、好きな歌手の話をしたりして楽しそうだった。また行こうね。今度はもっとおいしいものをご馳走してあげるよ。山際のその言葉を信じて、未央はスーパーに行くたびにおじさんに会えるかなと周りを見回すようになった。

それとなく美容師仲間に探りを入れると、山際は一人暮らしで四十五歳。五年ほど前に離婚しているという。しばらくして三人で夕食に出かけてから急速に親しくなり、山際からプロポーズされて迷った挙句に受け入れた。

もう男はこりごりだと思うほどは傷ついていた。一緒に生活するようになると、男というものはあれ程豹変するものかと不信が募るばかり

だった。未央が山際に会うのを余りにも喜ぶのを見て、それが朔子の背中を押したのかもしれない。それに、できれば父親のいる家庭で娘を育てたかった。三人で住むには両方のアパートは手狭で、店からあまり遠くない二ＬＤＫのマンションに移った。仕事仲間は突然の報告に驚いた。一人の仲は誰一人気づいてはいなかった。穂高さんは美人だし、店長の好みのタイプだなと直感していたとき、仲の良い一人が言った。でも気を付けたほうがいいわよ。女性が多い職場だしね。

山際は本当に優しい男だった。未央の面倒もよくみてくれるし、休日は買い物もしてくれる。一人で生活をしていたのだから、それくらいは雑作もないことなのだろう。それだけでも以前とは全く違う穏やかな生活だったが、朔子が一番幸福を感じるのは夜だった。長くてしなやかな彼の指が、朔子の体の隅々まで時間をかけてゆっくり愛撫する。初めて経験する喜びだった。これが愛されるということなのか。体の中のあらゆる部分が温かいもので満たされていく。荒々しく自分の欲望だけを吐き出して終わりという男しか知らなかった自分にとっては、夢のような時間だった。

＊＊

前のパパのことは嫌いではなかったが、山際の父についていえば好きという表現が妥当だろう。以前と違って母が幸福そうなことも子供心にうれしかった。ソフトクリームを一緒に食べたときのことは、いつまでも忘れられなかった。前の家では、ほしいものは何でも買ってもらえたが、親子三人で楽しい時間を過ごすことはあまりなかった。その時はまだ父ではなかったが、わたしのソフトクリームが溶けて流れ落ちそうになった時、父はそれを自分の舌で舐めた。未央ちゃんの分が減っちゃったから、お返し。はい。差し出されたクリームを、テーブルから体を乗り出してペロリと二回舐めた。わたしは体が小さく、学校の朝会でもいつも一番前だった。

小学生の間は、授業が終わると六時まで学校の近く

の学童保育所で過ごした。帰ると、母の用意したおやつがテーブルの上に乗っている。夕食が遅くなるので、とてもおいしかった。分でお風呂を沸かしてまずママが七時半ごろ帰ってくる。ママが料理をしていると、店の後始末をした父が帰ってきて夕食になる。時々わたしも手伝う。機嫌がよかった。中学生になると部活に入った。

休みの日には、父がママのご飯はおいしくて、父もの変哲もないおかっぱ頭だが、仕事はとても丁寧で気持ちがよかった。毎回ママにしてもらっていたが、初めての時、父の方が上手だと感じた。ママが優秀な美容師だと信じていたわたしにとって、それはちょっとした驚きだった。そばで見ていたママは、誰も店長には敵わないのよと、自慢するように言った。時には二人でお互いの髪をきれいにすることもあった。

父は休みの日には、といってもわたしは学校があるので、学童保育を休んでで帰るといつも遊んでくれた。散歩しながら公園へ行ったり、に行ったりした。公園で小柄なれると、とてもうれしかった。

ある日、久しぶりの外食の後が、父は私の体中を、平らな胸論髪も丁寧に洗ってくれた。一ちょっと窮屈だったが、父はいる。一番びっくりしたことは、て、前の奥さんが育てていたしより二歳上。六年生だというんが本当の娘に思えてしまうんしが中学二年になるまで幸福なも平均を上回るようになった。を付けるようになった。さすが浴することはできなかった。六入ろうと言い出した。男の人とママを見ると、いいよと言って

わたしは中学生になると急速に成長し、身長も体重母の勧めでブラジャーに誘われても一緒に入年生になってすぐ、友

達と誰と一緒にお風呂へ入るかという他愛のない話をしたことがある。勿論、一人よ。いいわねえ。私は小さい妹を入れなきゃいけないのよ。わたしは何の屈託もなく、父と入っていると言った。皆は仰天し、変態じゃないのかと笑った。それまで当然と思っていたことが突然否定され、ショックだった。ママも何も言わなかったのにと思ったが、それ以後父の誘いを断るようになった。ママも、そうよね、もう大きくなったんだし、女の子だもんねと助け船を出してくれた。

中学生になったころから、父の帰りが一週間に二度ほど遅くなるようになった。たまには深夜になることもある。ママは、友達付き合いなんだからと割り切り、父のいない時間を自由に使うようになった。わたしは、テストの前には遅くまで勉強するようになり、父がいなければ静かで好都合な日もあった。

ある夜、父の帰りが遅く、ママはテレビを見ながらソファでうたた寝をしていた。自室での勉強が終わって、わたしはお風呂に入った。脱衣所で裸になったところで、足音がした。ママだろう。何の用事かと思って振り向くと、父だった。無防備なまま、抱きすくめられた。父は、わたしの裸の背中からお尻に両手をゆっくりと這わせていく。どうしよう。手を離した父は、わたしの両腕を掴んで、胸の辺りを凝視して言った。きれいな体になったたね。息が酒臭く、目が充血している。わたしは顔を背けた。これは父親の言葉だと思いながらも、怖かった。ママに来てもらいたいのか、来てもらいたくないのか。次の瞬間、わたしはママと叫んだ。途端に父は寝室へ消えていった。

＊

月に二度ずつ地下鉄で大学病院へ定期検査に行っていたのだが、暑さも手伝って自信がなくなり今月はタクシーで行った。癌は手術しにくいところにできていて、抗癌剤の効果を見ながら患部が小さくなったところで手術が可能かどうか決めようと言われている。何となく、もうそれは不可能ではないかと感じていた。

沈黙の臓器と言われるだけあって、特別な体調の変化も感じずに五年ほどを過ごしてしまった。七十歳になって、疲れやすいのを年齢のせいにしてきた。仕事は六十五歳で辞め、初めて経験する自由気ままな一人暮らしだった。六十歳の還暦同窓会を機に高校の時に仲の良かった友人との付き合いが始まる。時間をやりくりしてはどこかへ出かけたり、習字教室に一緒に通ったりしていたその時期が一番幸せだったかもしれない。

そのころ、彼女がちょっとやせたんじゃないのと言った。食欲もあるし、そんなことないよと返したが、体重が減ってきていることは確かだった。何にもなければそれでいいんだからと、何度も彼女に言われて受信した結果がステージ４の肝臓がんだった。それからの経過を報告すると、娘さん夫婦と同居するのが何よりだわ。これで私も安心よ。彼女は自分のことのように喜んでくれた。

病院では血液検査とＣＴは必ず受ける。腫瘍マーカーも欠かせない。マーカーの値は少しずつ悪化していた。今、服用している抗癌剤の効果も期待できなくなっているようだった。薬を変えるのが大変なことは、最初の入院でよくわかっていた。適合するものが見つかるまで時間がかかる。もう、そんなにしてまで長生きしたいと思えなくなっていた。娘に気を使うばかりで、それでも口汚い言葉を投げつけられて気の休まるときがない。ストレスが溜まるばかりだった。どんどん弱気になっていく。病気になった老人のひがみ根性なのだろうか。

主治医は、一度娘さんと一緒に来てくださいと言うのだが、一度も連れて行ってない。大量の薬をもらって帰る。抗癌剤のほかに消化剤、鎮痛剤、副作用の痒み止め、ビタミン剤、入眠剤。抗癌剤を飲まなかったらどれくらいで死ねるんですかと帰りがけに聞いてみた。人にもよりますが、まあ、三か月から六か月くらいでしょう。医者は事務的に答えた。

保志は七月に一度ベトナムから帰ってきたが、慌た

だしく戻っていった。三日ばかり家にいても、マスクをして会社へ顔を出したり、友達に会ったりして忙しい。私と娘の険悪な状況には気づいていないだろう。未央がいくらかの不満を聞かせている可能性はあったが。彼女もそういう点は上手で、いざというときの私に対する表面的な愛想のよさも、父親にそっくりだった。二人とも二重人格なのだ。

元気なら庭の手入れもしたいと思いながら、クーラーに当たって座っている。八月に入って急に暑くなり、体に堪える。本来なら四月に種をまいた夕顔がぐんぐんと伸びて、小さな蕾をつけるころだった。アパートの狭いベランダにプランターを置いて、いろいろな植物を育てていた。シソの葉、ミニトマトはおいしくて、よく食べた。未央が結婚してからは、土いじりが何よりの楽しみだったが、もうできないだろう。

私はやっと立ち上がり、昼食にする。今日は病院がパンと、インスタントのポタージュスープを食べる。混んでいて遅くなってしまった。未央がもらってきた彼女は二時近くにならないと帰らない。いつか読んだ本の中に、現代人は孤食によって孤独になると書いてあったが、本当だと実感する。一人で食事することには慣れているはずだが、家族と住んでいても孤食というのは、全く別の感覚だった。

テーブルの隅に週刊誌が置いてある。昼寝の前に読もうと手に取ると、付箋が挟んである。きっと未央の読みかけのページなのだろう。自室に戻ると、まず付箋のページを開けてみた。太くて黒い線で印刷された記事のタイトルが目に飛び込んできた。毒親。知っていますか、この言葉。その下には少し小さい文字で、知らないうちに、あなたも…

興味が湧いて読み始めると、もう止まらなかった。読者を獲得するため、どんな記事も大げさに書き立てるということは知っていた。確たる証拠もないような芸能人のスキャンダルも面白おかしく書くことも分かっていたが、毒親という初めて聞く言葉に衝撃を覚える。未央は、このページを私に読ませたくてテーブ

ルの上に置いたとしか思えなかった。本を元の場所に戻して、ベッドに横になる。病院へ行くのも一仕事で疲れているのだが眠られずだった。しばらく前から杖なしでは歩きにくくなった。足にむくみも出てきて、うつらうつらとするだけらしい。そのうち、黄疸が出れば終末期を迎えることになる。鎮痛薬のせいで痛みをあまり感じないだけが救いだった。

あなたは子供に世話を焼き過ぎる、指示を与えすぎる、先回りをして何でも教えるということをしていませんか。子供のためという大義名分を掲げ、いかにも立派な母親を演じているだけで、実はそれは愛情という名の完全支配なのです。子供はそれを当たり前と思って育ち、自主性が育たないだけではなく、その支配がなければ不安症になることだってあります。

次から次へと、週刊誌の文章が朔子を責め立てるようにに押し寄せてくる。そういえば、母親と一緒に大学の卒業式や入社式に出かける子供の話を耳にしたことがある。会社で困ったことがあると、母親に電話する子もいると知って呆れたこともある。未央に当てはまることは皆無だと思いながらも、自分も毒親というこ

となのだろうかと小さな疑問も私という毒親に育てられたという恨みを知らせたかったのか。そして今、その恨みを癌になった母親にぶつけているとでもいうのか。

ドアを開ける音がして、未央が夕ご飯だよと言った。いつの間にか寝てしまったらしい。ぼんやりとした頭に、毒親という言葉が張り付いている。今は顔を合わせたくない。

「今日は食べたくないの、ごめん。調子が悪くて」

その言葉が終わらないうちに、

「どうして早く言ってくれないのよ」

大声と共にドアがバタンと閉じられた。どうしたの。食欲がないのね。今日の診察はどうだったのと聞いてほしかった。これが自分の育てた子供だと思うと、情けなくて泣くにも泣けない。もう生きていく張り合い

もなくなった。どちらにしろ、自分は早晩この世から消える運命にあるのだ。

＊＊

台所にいると、けたましい鳥の鳴き声がする。大きめの、多分ヒヨドリらしい一羽が庭の木に止まって歩いている。庭にはまだ鳥が巣をかけるような木はないから、やっと飛べるようになった雛が偶然この庭に着地したとしか思えない。

どうするだろう。母鳥と一緒に飛び去ることができるだろうか。未央は庭に出て、雛に近づいた。すると母親の声はさらに大きくなり、威嚇する調子になった。多分、未央を外敵だと認識し雛を守る態勢になったのだろう。頭をかしげながら、覚束ない足取りで家に向かって歩いてくる雛を庭の中央へ連れて行った方がいいのではないか。親鳥がくわえて飛ぶ可能性もある。未央は雛に近づいて身を屈めた。急に親鳥は鋭い悲鳴のような声を上げ、未央に向かって急降下してきた。驚いて思わず後ずさりし、急いで部屋へ戻った。

その必死の行動は未央の胸を打った。鳥でさえ、こうして雛を守ろうと命を懸けている。未央は放心状態だった。自分のためにしてくれた数々の母の行為が、次々に思い出された。それは過保護以外の何物でもなく、押しつぶされそうな圧力からただ逃れたいという一心だった。それなのに今まで部屋に出て、雛に近づいた。すると感じたことのない思いが少しずつ湧いてきて、凝り固まった未央の意固地さを溶かしていく。ああ、いつもとしていたのだ。最初はパパの暴力から、次は父の男としての性から。二つとも、まだ子供だったせいで自分が気付くことができなかった大きな危険だった。

この小さな出来事があってから、母との距離がいくらか縮まっていくのではと思っていた矢先、母はついに死んでしまった。そして、まだ心の整理がつかないうちに、わたしの体に病気が見つかったのだ。

じっとしていると心が乱れるばかりで、わたしは散

歩に出た。今朝、母が亡くなった病院を受診すると、一週間前の検査結果を知らされた。乳癌だという。しこりはまだ小さく、手術すれば全快するだろうと言われている。転移していなければの話だが。乳癌はよく肺などに転移しやすいことを知っていたので、安心はできないと思いながらもほっとする。親が癌になると、子供も癌になりやすいことはよく知られている。母を亡くしたばかりなので、妙な気分だった。さらに受診のきっかけとなった夢が、未央の複雑な気持ちに拍車をかけた。

ある日の明け方、母がしきりにわたしの名を呼ぶ。遠くから聞こえる母の声がだんだん近づき、わたしの耳に唇を当てて、未央ちゃん、あんたの体、すこしおかしいよ。病院へ行った方がいいよと、途切れ途切れに言うのだ。横向きに寝ていたわたしは、自然に右手で左乳房を抱く形になっていた。何気なくその手を動かすと、かすかにコリしたものに触れた。びっくりして起き上がり、もう一度ゆっくりと丁寧に触ってみると、脇に近いところに確かのがある。ママ。思わず声に出ずもない。母が死んで間もなくいうことだろうか。それも、夢いたことが病気の発見につながられないようなことだった。

いつも未央の心を見透かしたように、先へ先へと指示をする母だった。宿題をしようかと思っていると、宿題は済んだのと聞く。洗濯物を畳んでいると、そこへ帰ってきた母は、そんな畳み方はダメ。前にも教えたでしょうと言う。パジャマなんかお風呂に入ってすぐに着るんだから、袖畳みで十分だと思っているわたしは、聞こえないふりをする。このうっとうしい母親が、乳癌のことまで予知をするとは。

ぼんやりと当てもなく夕暮れの町を歩いていると、未央の行く手の左側の生け垣に、白くて丸いものがいくつか浮かんでいる。十月の中旬、よく晴れた空はまだわずかに日の名残を見せていた。密集した小さな葉

の植物の名前は知らなかったが、近づくと白いものは花だった。遠くからは見分けがつかなかったが、今は濃い緑を背景にくっきりとしたその姿が美しい。形は朝顔にそっくりだが、それよりは大きく直径十五センチほどはあろうかと思われた。生け垣の根元にまかれた種から蔓が伸び、あちこちに花を咲かせたのだろう。

しばらく眺めているうちに、それが夕顔だと気づいた。子供のころ、母が庭で毎年のように咲かせていたことを思い出した。朝顔ではなく、決まって夕顔だった。この花を、長い間目にしたことがない。

母が死んで三週間しか経っていないことが、未央を感傷的にさせた。夕顔は全部で五つ咲いている。家へ帰っても誰もいないが、気を取り直して再び歩き始める。九月十日、母一人を残しておいていいのかと思いながら、未央は東京へ出かけて留衣と一日を過ごした。夏の暑さのせいか、母はいつもよりベッドに入る時間が長くなっていたが、食事もとれていた。留衣のところへ行ってくると言うと、いいよと笑って答えたのだ。

その数日前、母の主治医から連絡があり、一人で病院へ行った。そこで告げられたことが重く心にのしかかり、二人だけで家にいるのが苦しくてたまらない。娘に聞いてほしいというつもりはなく、気晴らしが必要だった。癌細胞の増殖は思ったより早く、手術はもう不可能だという。入院するのが望ましいが、もう今となっては、特別な治療法があるわけではないのです。痛みさえなければ、家で養生するのはどうかという提案だった。わたしは狼狽えた。母の死を具体的に想像したことがなかった。ああしてのらりくらりとしていれば、まだ大丈夫だろうと思っていたのだ。しかし一方で、弱っていく母を見るのは堪らなかった。凛々しく、頼りになり、なんでも完璧にできる人がわたしの母でなければならない。壊れていく母の姿を見たくはなかった。

確かに自分は母の人生に付き合わされ、振り回されたという思いは消えることはない。同時に母となった自分は、母としても女としても母を乗り越えることは

絶対にできなかったのだ。いくら努力しても。反面教師として、留衣にはむしろそっけなく接することを心掛けることしかできなかった。

もしかしたら三か月ほどかもしれませんので、そのつもりでいてください。苦しまれるようでしたら、すぐ連絡してください。ホスピスを紹介します。

夕方東京から帰ってくると、母はぐったりした様子で横になっていた。冷蔵庫に用意しておいた食べ物にもほとんど手を付けていなかった。急いで病院へ連れて行ったが、十日後、早さに驚くほどだった。保志は者もその思いがけない勿論、留衣も最期には間に合わなかった。飛行機は、感染症のせいで便数が激減していた。

体力が非常に衰えていて、急変したのは酷暑のせいですからと医者は未央を慰めた。しかしと言ってから、ということもありますと。高齢者には珍しくないことで彼は母の死について何か言った。未央は動転していて、その言葉が耳に入らなかった。

こんなにも早く死なせてしまったのは自分のせいかもしれないという気持ちと戦いながら、慌ただしく葬式の準備に追われた。身近な者だけのひっそりとした家族葬だったが、それでもやることは多かった。保志が到着するまで式を伸ばすことができ、幸いだった。

どれくらい歩いただろう。初めて通る道だった。右に曲がると、道路沿いに小さなお寺が見える。門のそばに立てられている掲示板の前に、八歳くらいの女の子が母親と手をつないで立っていた。女の子が掲示板を見上げて、書かれている文を読み出したところに未央は通りがかった。

「いくやまかわ、わたしがここにくるのには、めにみえぬあんないにんがいた」

その声は、道路の反対側を通り過ぎようとする未央の耳にはっきりと聞こえてくる。

「ねえ、ママ。いくやまかわって誰？」

「いくつもの山や河」

「ふーん、じゃあ、あんないにんって何？」

母親はそれには答えなかった。この親子も散歩の途中なのだろうか。未央は歩みを止めずに歩き続け、しばらく行ってから振り返ると、そこにはもう誰もいなかった。子供のころの母と自分が自然に重なる。

何と答えたのだろう、あの母親は。未央の人生にとっての案内人とは誰なのだろう。自分が今までに出会った多くの人たちの顔が脳裏に浮かぶ。仏教上の深い意味は知る由もないが、一般的にはやはり身近で自分に大きな影響を与えた人ということになるのだろうか。嫌でも一番に母を思う。同時に、このお寺に未央を出合わせたのも、目に見えぬ案内人の力なのだろうか。

一人になってしまったけど、ママ、大丈夫？パパは年末には帰れると言っていたから、もう少し頑張ってね。ばあばの分まで長生きしないと。母親を心配してかけてきた、留衣の夕べの電話を思い出す。彼女は、母親と祖母の良好な人間関係を信じて疑ったこともないだろう。そのほうが自分の気持ちも楽だった。乳癌のことはまだ言えなかった。

それにしても、いつごろから捨てていたのだろう。母のベッドの下が引き出しになっているのだが、そこにはビニール袋に入れられた大量の薬が残されていた。母がそんなことをしていたのを、未央は知らなかったのだ。死期が早まったのも当然で、ほとんど自殺行為である。自分のせいなのかもしれない。もう少し母に優しく接していればと後悔してもしきれない思いだった。

当てどもなく歩いていくと空は少しずつ濃さを増し、家並も電柱も道路の端に植えられている木も姿を消していった。大きく広がった群青の空間に、どこからともなくいくつかの白いものが現れた。夢遊病者のように、未央はその掴みどころのない、雲の小片のような物を追う。さっきの夕顔のような白い顔と重なった。急にそれが最期の時の母の小さな動きの速くなった夕顔未央は何かに引かれるように、を追いかけてどこまでも歩いていく。

同人雑誌の周辺

中村　賢三



『文宴』一三四号〔三重県津市〕
「ミトコンドリア」藤原伸久

理科か生物の教科書でしか目にしなかった題名に、教室で学んでいた時代に一気に引き戻された。

知識の源泉が如何に広く、興味深いものか気付かされた主人公は中二で十四歳の女生徒。型にはまった学校教育では出会えないものを、Q館堂という古本屋の四十二歳の店主から得ていく。それはベトナム戦争の生々しい記録写真やルワンダでの何十万もの虐殺など。

「人の死は何度でも繰り返せる。でも自分の死は繰り返せない」。人間として避けては通れない事柄に眼を向け、成長していく少女の人生が描かれる。

巨大な樟（くすのき）が化石のように黒々と影を落としている描写は、小さな人間と対照的な植物のシアノバクテリアを象徴していてうまいと思った。

『海』二五号〔福岡県太宰府市〕
「あだし野」有森信二

京都嵯峨の奥、小倉山の麓の野にて、儚い世の中を譬え、父母や家族の墓場をさ迷う主人公の心の内面が描かれる。

長崎を襲った記録的な豪雨により、母と身重の娘を一瞬で亡くした悲劇と原爆で焼け野原に変わり果てた長崎の街に、終戦で戦地から復員した時の自身の思いが、重層的に書かれている。

それを乗り越え、働いて生きてきた自分が定年を迎え、これから家族と共に余生をと考えたいけれど、その家族はすべて黄泉へと去ってしまっている。

それでも最後は広すぎる５ＤＫの家にどっかとあぐらをかいて一人座っていたいと思い始めている、と結んでいる。

こういう人生もあるのだという、諦観すら感じられる。

『果樹園』三六号〔愛知県豊橋市〕

「ライブハウス」そらいいくと

前号の江戸時代の八丈島を素材にした作品は力作であったが、今回は八丈島の現代版。偶然同じ船で島へ渡った三人がそれぞれの物語を展開する。五十歳の下積みの演劇女優のおばさん。妻に先立たれ息子からも見放されその日暮らしの六十歳の冴えないおじさん。そして、男に振られ独りで島へクジラを見に来たという若い性の三人である。

演劇一筋で生きてきても年齢に限界を感じ、十年前に八丈に帰るから一緒に行こうと誘った男に会いに来たという女性は男に巡り合えるのだろうか。

六十男の両親の墓は島にあり、兄が死の間際に三十万のお金を渡して永代供養を島の寺に頼んで欲しいと遺言していったのを果たすためだが結果は。

クジラを見るために来たという若い女性の顛末はと、興味が尽きないテンポの良さで進み、終盤の山場はライブハウスでおじさんが舞台で脚光を浴び、若い女性は漁師の青年と意気投合する。楽しい読物になっている。

『果樹園』三六号

「萬葉人の草たちへの思い」

今泉佐知子

エッセイ風の評論だが、作者の呟きの如き繰り言には無上の味わいがあり教えられる。萬葉集が編まれた時代から草はあまた詠まれてきたことだが、外来種がはびこる近年の情勢と比べる視線もおもしろい。萬葉集の三大分類は雑歌、相聞、挽歌とされ、それらのわけが説明されるが、「挽歌」は葬式の時棺を乗せた車を挽くものが歌う歌から人を偲ぶ歌だと教えられ納得できた。

山上憶良の歌が再三取り上げられているのも興味深いが、萬葉人は草一本に対しても、その命と向き合うという精神を改めて思い知った。

『火山地帯』二〇一号〔鹿屋市〕

「こころの色」立石富生

コロナウイルスに罹った人が入院している病院に働いている看護師の子供が幼稚園に行けなくなった。幼稚園から、くるなと言われた。という新聞記事を見た友人が、近くの幼稚園に怒鳴り込んでいき、警察に捕まった。

そんな事件を題材にした小説だが、背景には、大きな問題意識が込められていた。日ごろは他人のことに無関心な人間も、無差別に襲ってくる新型コロナウイルスの脅威にさらされ、人が差別を受ける側になることが如何なることかに直面する。

「人間としてこの社会でふつうに生きていけること」を望んでも謂れのない

差別（国立ハンセン病療養所）の歴史を、覚めた他者の眼で見続けているこことに深く感動し、敬意を覚える。

『街道』三七号〔東京都武蔵野市〕

「花火に誘われて」木下経子

文学教室の友人たちといっしょに熱海にある先生のマンションに招かれたこと。先生の部屋はぎっしりと本で埋まり、どのような本があるのかと、わくわくしたこと。最上階で花火が上がるのを見たが、周辺の建物が邪魔だったことなどが淡々と語られる。

小学生のころ、見物の人々で埋め尽くされた多摩川べりの土手で家族や友だちと見た花火の情景が思い出される。とりわけ小六の時、担任の先生がひとり誘ってくれ、浴衣を着て付いていった。花火が頭の上でドーン、ドンと上がった。過ぎ去った時との往還が胸の奥で響くように鮮烈に蘇ってくるようすが描かれる。作者には恩師と呼べるひとが何人も去来するのであろう。先生のことを新聞の訃報欄で知る、その距離感にほんとうは、空しさを覚えているのではなかろうか。

『日曜作家』三三号〔大阪府茨木市〕

「三原レイ・ラブストーリー」落合伴美

一話読切りの連載もの。題名通りのラブストーリーという軽さに作者のねらいがあるのであろう。先日露戦争のころの実録は、江戸という時代と世界へと国を開いた狭間であり、そこに生きた人々のドラマに興味は尽きない。藤堂高虎や井伊直弼、織田信長や土田御前の話、浜松に住んだ名医の話にまで発展する小説である。

「大砲は、いかに、相手に命中しないように研究するのが仕事だ。下手な人間はやたらと当てたがる」と語る人物がいる。

鉄砲の弾で人を効率的に殺戮するのとは正反対の考え方である。何よりも、ひとの命を大切にすることこそ大事なのだ。学問はそのために学ぶものなのだと教えられた。

『蒲公英・蒼黄』四〇号〔世田谷区〕

「日本砲術の稀才　島川文八郎」

久保敦子

評伝と思える表題だが、さにあらず、天衣無縫な語りに明治の世に誘われる。日露戦争のころの実録は、江戸という時代と世界へと国を開いた狭間であり、そこに生きた人々のドラマに興味は尽きない。藤堂高虎や井伊直弼、織田信長や土田御前の話、浜松に住んだ名医の話にまで発展する小説である。

「大砲は、いかに、相手に命中しないように研究するのが仕事だ。下手な人間はやたらと当てたがる」と語る人物がいる。

鉄砲の弾で人を効率的に殺戮するのとは正反対の考え方である。何よりも、ひとの命を大切にすることこそ大事なのだ。学問はそのために学ぶものなのだと教えられた。

『長良文学』二八号〔岐阜市〕

「百日紅の夏」山名恭子

七十五年前、昭和二十年七月九日夜十一歳の留美が体験した恐ろしい記憶の夜である。サイレンが鳴りひびき、「空襲、空襲だ、避難、避難だ」との叫び声の中を、必死で走った記憶は多くの人々が持っている。

ザーという不気味な音は焼夷弾が降りかかる音とあとで知った。「防空壕は危ない、川へ逃げなさい」母が叫んだ。仲良しの妙子ちゃんと手を引っ張って走った。近道しようと石垣をよじ登った留美と、土手を遠回りした妙子ちゃんとは別れ別れになってしまった。

爆音が途絶え、隠れていた堤の窪みから出て帰ると、家はすっかり焼け落ち母たちがぼんやり立っていた。妙子ちゃんは焼夷弾の直撃にあい、死んでしまったという別離であった。まっ白に咲く百日紅の白妙は、妙子ちゃんの化身のように留美は夏になると思い出すに違いない。

『海峡』四五号〔愛媛県今治市〕

「歯長峠」西山慶尚

奇しくもこの小説も昭和二十年八月八日から始まっている。ソ連が日本に宣戦布告し満州へ侵攻してきた日である。主人公は関東軍の一兵士で、ソ連軍の捕虜となり、極寒のシベリアへ抑留された六十万人のうちの一人であった。過酷な労働と飢えと寒さと病気で約六万人もの人々が死んでいった。しかし、これは序章にすぎない。物語は三年後に故郷に帰還してからの数年間に亘る四国遍路をする主人公重政の心の精算であろう。

実家で六年もの間の衰弱した体力を癒し、やっと床を払った重政は、姉のように接していた叔母の墓参りをした。叔母の早苗は重政が出征したあと、遍路風の山伏の男に凌辱され、池に投身し不慮の死を遂げていた。重政は逃げたその男を探し出し仇を取るために遍路に出る。四国遍路の長い道のりの中で重政は自分自身の姿に気付く。それは作者の永遠のテーマでもあろうか。

『文芸中部』一一四号〔東海市〕

「あの日」蒲生一三

阪神大震災が起きたのは二十五年前のことだ。その時小学六年だった俺は神戸で被災した。父は圧死したが、母と俺は家の下敷きから救出された。今は母の実家の名古屋市へ引越し、地域の消防団に入り地震等の防災について学んでいるという手堅い小説だ。

作者の蒲生さんは中部ペンクラブを介し三十年もの文学仲間だった。この三月十一日逝去との知らせに暗澹たる思いになった。心よりご冥福を祈る。

ツ	追伸（古嶋和さん･山下智恵子さんより）	名古屋市	7-8号
テ	ＴＥＸＴ（佐山広平さんより）	愛知県春日井市	16-17号
	ＴＥＮ	名古屋市	122号
ト	峠	犬山市	77号
ナ	長崎文学	長崎市	95号
	長良文学	岐阜市	28号
	名古屋民主文学（石川久さんより）	名古屋市	116号
	なんじゃもんじゃ	高知市	21号（番外号）
	日曜作家（山本滋俊さんより）	大阪府茨木市	33号
ニ	女人随筆	岡山市	151号
ハ	花筏	三重県いなべ市	37号
	はなかみ通信	滋賀県大津市	61通（終刊号）
	播火	兵庫県姫路市	107号
ヒ	Ｐ.	三重県四日市市	29-32号
フ	風紋	富山市	15号
	風紋（詩誌）（今泉佐知子さんより）	豊橋市	19号
	文宴	三重県津市	134号
	文学街（吉岡昌昭さんより）	東京都杉並区	360号（終刊号）
	文芸	岐阜県多治見市	54号(令和2年度)
	文芸思潮（会員購読）	東京都世田谷区	77-79号
	文芸中部	愛知県東海市	115-116号
	文芸長良	岐阜県揖斐川町	41-42号
ホ	北斗	名古屋市	670-676号(4月号)
ミ	三田文学（会員購読）	東京都港区	143-144号
ム	ムーの会会報	名古屋市	106号
ヤ	矢作川	愛知県西尾市	46-47号
	山波	三重県桑名市	196号
ヨ	沃野	名古屋市	633-635号
ル	ルーチェ（久田宣生さんより）	四日市市	18号

●単行本（順不同）

文芸アンソロジー　12巻　ＸＹＺ2020（大久保和義さんより）		四日市文章集団著
樹液のように（短歌と文の個人誌）		川瀬　敏枝　著
詩集　叡智の鳥	Ｔombac	川瀬　慈　著
詩集　色鉛筆	樹海社	江原　律　著
平子純作品展　2020年8月19～31日		平子　純　著
幾何学模様　水岩瞳句集	ふらんす堂	水岩　瞳　著
北の浜風　短編集	中西出版	山内　房江　著
クロノスの庭	編集工房ノア	中島　妙子　著
七コロナ八起　転ばぬ先の杖	書肆　壺中天	ななえせいじ著
きのう。きょう。十五編の作品集	鳥影社	白石美津乃　著
欅のある家　短編小説集	磯野印刷	水田　まり　著

受　贈　誌　（令和２年10月～令和３年３月）

◎贈呈ありがとうございました。　その都度の御礼を失礼しています。

●同人雑誌等（五十音順）

ア	青い鳥	三重県志摩市	75号
	秋楡	三重県四日市市	109-110号
	葦	三重県度合郡	60号
ウ	海	三重県いなべ市	102号
	海	福岡県太宰府市	25号（通巻92）
エ	ＸＹＺ	三重県菰野町	269-270号(季刊20)
	遠近	横浜市	75号
カ	海峡	愛媛県今治市	45号
	海峡派	北九州市	150号
	街道	東京都武蔵野市	36-37号
	顔	長野県上田市	90号
	篭子	名古屋市	40-41号
	火山地帯	鹿児島県鹿屋市	201号
	果樹園	愛知県豊橋市	36号
	風の道（田村くみ子さんより）	東京都荒川区	14号
	カプリチオ	東京都世田谷区	51号
	火涼	三重県鈴鹿市	81号
	環	名古屋市	169-170号
キ	季刊午前	福岡市	59号
	季刊作家	愛知県稲沢市	96号
	狐火	埼玉県三郷市	25号
	九州文学（第八期）	福岡市	通巻574-575号
ク	CROSS ROAD	三重県松阪市	16号
コ	コオサテン	愛知県碧南市	18号
サ	彩雲	浜松市	14号
	サロン・デ・ポエート	名古屋市	342-343号
シ	じゅん文学	名古屋市	104-105号
	象	名古屋市	97-98号
セ	全作家 (吉岡昌昭さんより)	東京都足立区	119号
ソ	層	長野市	132号
	蒼空	高知市	25号
	素粒	富山市	17号
タ	たまゆら	京都市	119号
	蒲公英・蒼黄	東京都世田谷区	40号

（右ページへつづく）

「弦」　一〇九号　合評会案内

第1回　日時　二〇二一年五月十六日（日）
　　十三時～十六時三十分
会　場　芸術創造センター5階中・小会議室連結
　　名古屋市東区葵一―三―二七
　　地下鉄東山線「新栄駅」1番から徒歩3分
対象作品　目次P2―小説・評伝・エッセイ・詩

第2回　日時　二〇二一年六月十三日（日）
　　十三時～十六時三十分
会　場　芸術創造センター5階中・小会議室連結
　　名古屋市東区葵一―三―二七
　　地下鉄東山線「新栄駅」1番から徒歩3分
対象作品　目次P3―小説・エッセイ・評論

◎合評会はいずれも公開のお招き合評会です。
　会員外の参加も歓迎します。（無料）
・ご参加の場合は事務局までご連絡ください。

■弦の会事務局
〒463―0013
名古屋市守山区小幡中三丁目四―二七
　　中村賢三　方
電話・FAX　052―794―3430
Eメール　nakamura_ya@msn.com

■「弦の会」ホームページを開設しています。
「同人誌弦」「文芸同人誌弦」で検索してください。
・トップページ
・イベント情報
・規約と細則（平成27年4月に改定されました）
・弦を読む　99～108号全作品が読めます。
・掲示版　投稿して交流するページです。

あとがき

●昨今、多くのニュースが紙面を賑わせたが、少しほっとさせられる報道もあった。それは、バイデン政権によるいくつかの政策発表である。とりわけ、彼が温暖化に強い憂慮を示し、直ちにパリ協定に復帰したことを歓迎したい。中国に次いで世界第二の排出国のリーダーシップに大いに期待している。

既に、北インドでは氷河が溶け、濁流となって多くの人命が失われた。さらにこれが進めば、バヌアツなど海抜の低い島国では人が住めなくなる。洪水の多発や、森林火災も記憶に新しい。

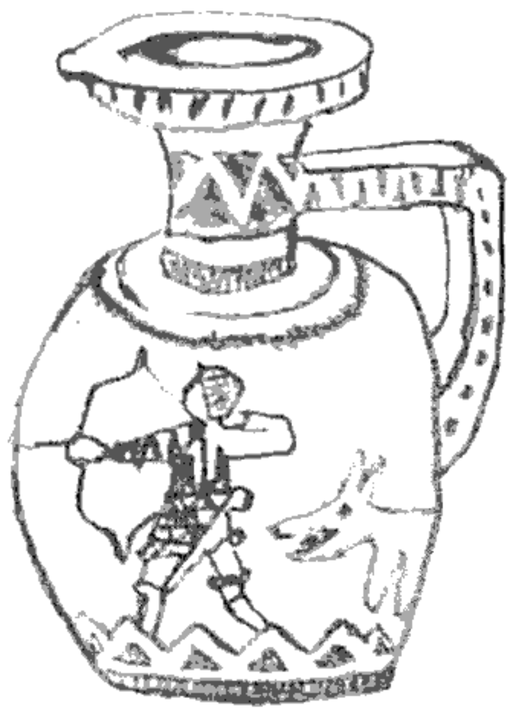
また、気温の上昇によってロシアの永久凍土に大きな穴が開いたという。もちろんこれが進めば、メタンガスの発生や新たな病原菌の発見が懸念される。今こそ日本は勿論、全世界の人々がこの美しい地球を守るために協力しなければならない。（木戸）

●寒空の下、バスを待っていた。うまく乗継ぎできればギリギリ約束に間に合う。一分過ぎたがまだ来ない。一分二分はまあ想定内。だが十分近く遅れてやっと来た。運転手に嫌味のひとつもいってやるかと乗り込む。視線を後部に移して「ああ」と思った。車椅子のお客がいる。バスの延着はこれの出し入れのために生じたのだとわかった。バスと路面の段差に架ける鉄板を渡し、車椅子の人を丁寧に降ろし、鉄板を収納し、補助席を戻す。弱者への対応によって生まれる因果関係だが、納得いく説明は聞いた遅れに私はイラついていた。もちろん実情を知らなかったのではあるが、アンコンシャス・バイアスという新語が浮かんだ。無意識の偏見。ややずれるかもしれないが、自分の都合を優先させるために抱いていないか。（国方）

●コロナの感染予防策として、当初からマスクの着用の徹底ぶりには驚いた。アメリカではなかなか広まらず、選挙集会の会場でも平然とマスク非着用なので、ひとごとならず、気がもめた。この違いが生じた最大の要因は日本人の同調体質だと識者は言う。近頃良くも悪くも、同調圧力という言葉が目につく。女性の社会的地位が低いのも最大の原因はこれだという。しかし、知りたいのはその同調圧力というのがどうして日本人の特質になったのかという因果関係だが、納得いく説明は聞いたことがない。それがはっきりしないと是正もできない。ぜひこの機会に解明していただきたい、というよりも、みんなで考えたいと思う。ん?、みんなで考える? それにも右へならえの同調圧力がかかる?（長沼）

「弦」109号の 執　筆　者　(109号掲載順)

長沼　宏之	512-0905	三重県四日市市坂部が丘５－１－７
市川しのぶ	466-0855	名古屋市昭和区川名本町６－27－２
白井　　康	454-0874	名古屋市中川区吉良町138-10 アーバニア荒子東502号
久野　　治	520-1010	滋賀県大津市雄琴６－17－17 アクティバ琵琶4304
富岡　秀雄	464-0043	名古屋市千種区月ヶ丘３－３－９
髙見　直宏	457-0863	名古屋市南区豊３－18－９
加納　　伸	463-0013	名古屋市守山区小幡中３－４－27
有馬冨美子	465-0025	名古屋市名東区上社４－190
国方　　学	463-0013	名古屋市守山区小幡中３－15－21
杉山　千里	507-0071	岐阜県多治見市旭ヶ丘３－７
山田　　實	487-0033	春日井市岩成台９－15－３
木戸　順子	466-0035	名古屋市昭和区松風町２－８－９
岡部　寛治	486-0849	春日井市八田町３－14－３
若林　雅美	496-0019	津島市百島町こがね35
中村　賢三	463-0013	名古屋市守山区小幡中３－４－27





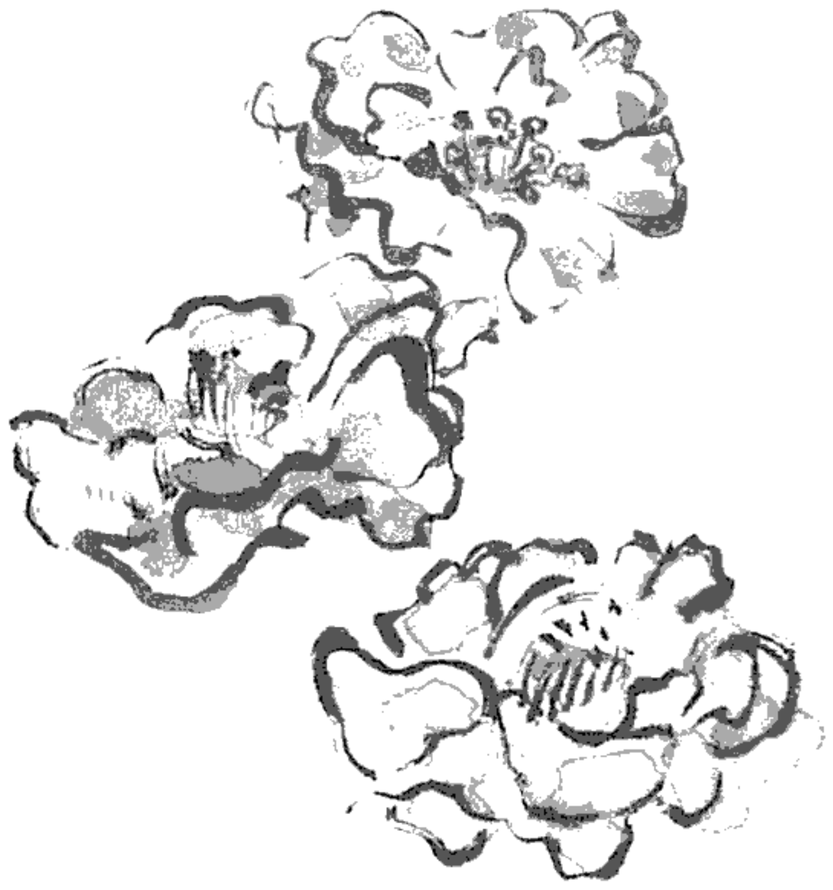
詩や短歌・趣味の雑学・記念誌



私塾のテキストから、自分史等
編集から印刷まで
ご相談ください。

株式会社　総　研

〒500-8224　岐阜市高田2丁目4番6号
TEL：058-246-1941(代)　FAX：058-246-1985
E-mail：k.souken@kk-skn.co.jp





弦

第一〇九号

発行日　二〇二一年四月二十日

編集発行　弦の会

代表者　中村賢三

発行所　〒463-0013

（事務局）名古屋市守山区小幡中三丁目

四―二七　中村賢三方「弦の会」

電話・FAX（〇五二）七九四―三四三〇

Eメール　nakamura_ya@msn.com

郵便振替―口座番号

〇〇八八〇―七―八〇〇三　弦の会

頒価　八〇〇円